

土壌10

II区中央東寄りで検出された土壌である。その東半部は調査区外に続き、北半部を近世の溝21に切られているため、全容は明らかにできない。

平面形は、肩が直線になる部分があるため、長方形を呈する可能性がある。規模は60cm×128cm以上である。検出面から壙底までの深さは21cmを測る。

遺物は出土していない。

土壌11

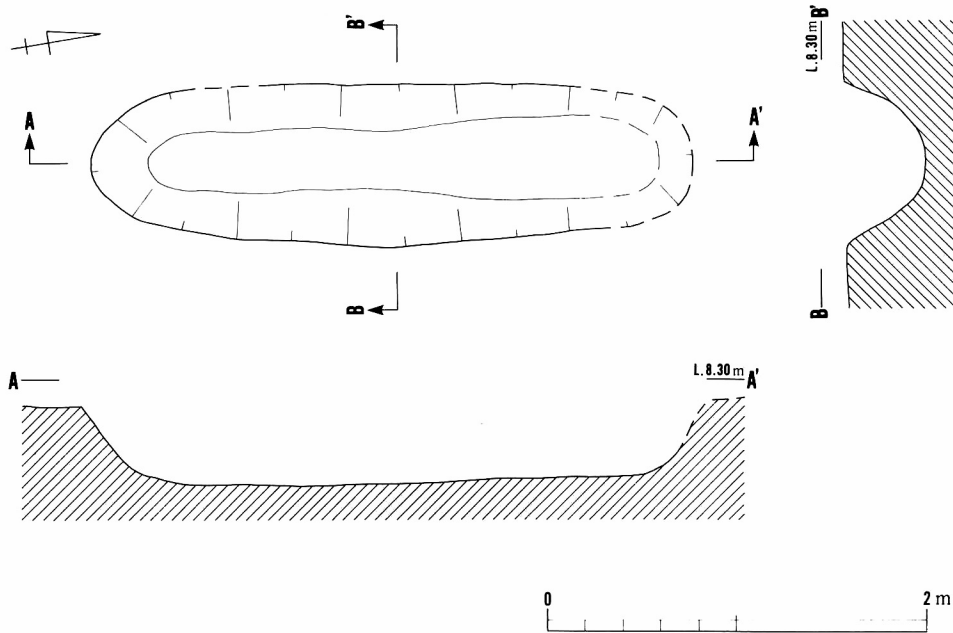
II区西寄りの、17層上面で検出された長楕円形の平面形をもつ土壌である。

北端上部が、近世の柱穴により削られているものの、規模は把握することができる。検出面における長軸の長さは318cm、短軸の長さは72～80cmである。50°前後の角度をもって土壌壁が落ち、ほぼ平坦な壙底にいたる。壙底における規模は、長さ270cm、幅31～45cmである。検出面から壙底までの深さは、55cm前後を測る。

遺物は出土していない。

土壌12

II・III区にかけて検出された土壌である。17層上面で検出された。東半部を竪穴住居3に切られているため、形状・規模は明確にしがたい。検出面から壙底までの深さは、約60cmである。埋土中より弥生時代中期と思われる土器小片が1点出土している。



第50図 土壌11

土壌13

III区北端、14層上面で検出された土壌であり、焼き塩、それもおそらく固型塩の生産に関連した遺構と考えられる。

平面形は東西55cm、南北50cmの隅円方形である。検出面からの深さは約15cmである。断面形は台形を呈する。

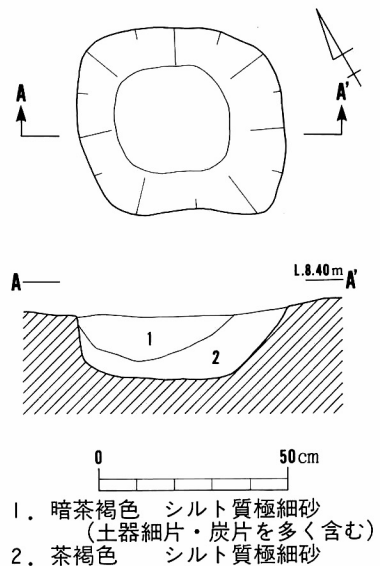
埋土は2層に分かれ、上層からは、多くの炭片および焼土、土器の細片が出土した。下層には、シルト質極細砂の堆積が認められるのみで、土器などの出土はみなかった。なお、土壌壁は焼けていなかった。

土器は脆弱かつ、5mm以下の細片が殆どである。製塩土器以外の器種は確認できない。土器量は非常に少なく、確実に図化できた製塩土器1個体である。

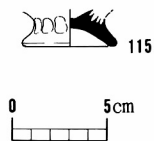
第52図に製塩土器の脚台部を示した(115)。表面は二次的な焼成を受けて器壁の剥離現象が進行している。このため、調整手法は、台脚部と体部の境外面にみられるユビオサエ以外は確認できない。

これらの状況は、何らかの内容物をおさめた製塩土器を加熱したことを表している。土器量が少ないこと、現海岸線(坂越)からも約4.5kmと離れていることから、当地で直接製塩作業を行ったものではなく、堂山遺跡(直線距離で約4.6km)などの製塩集団から、製塩土器に入った潮解性のある塩の供給を直接あるいは間接に受け、保存に耐えうる焼き塩を得るために加熱作業を行った痕跡と捉えることも可能である。

なお、土壌壁が焼けていないことなどから、直接土壌内で加熱作業を行ったのではなく、土壌に近接した所で焼き塩の生産を行い、その廃棄物の処理をこの土壌に求めたものとする。



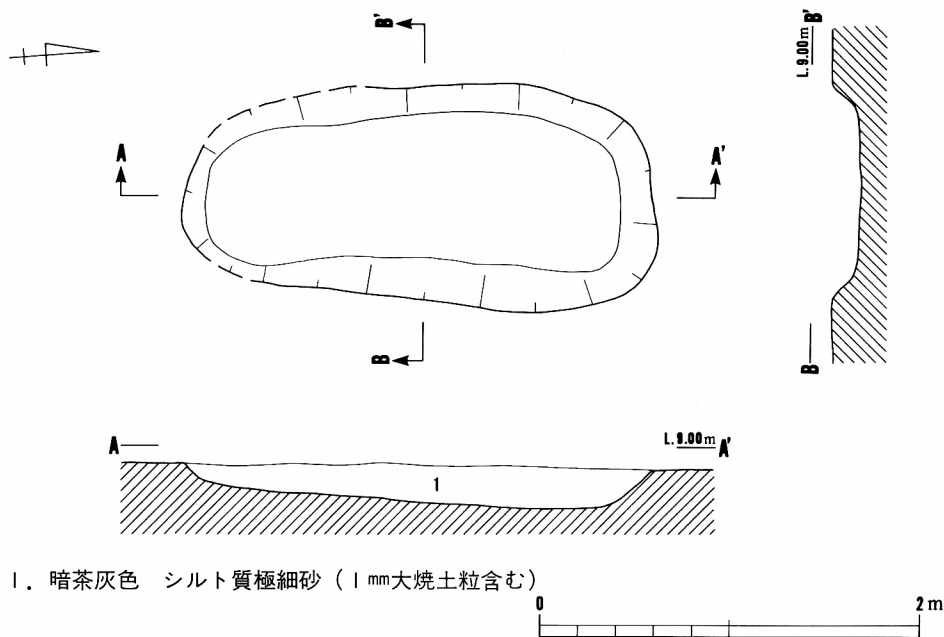
第51図 土壌13



第52図 土壌13出土遺物

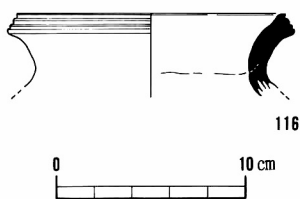
番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調	
		A	B	C	D	E		内 面	外 面
115	製塩	—	—	—	(4.6)	—	1/2	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙

土壌14



第53図 土壌14

III区北寄りの、17層上面で検出された土壌である。隅円長方形の平面形をもつ。南西隅を土壌15に切られている。壁面の立ち上がりは約45°である。長さ約2.5m、幅は北端で約1.5m、南端で約1.0mである。壙底は比較的平坦であり、長軸方向に傾斜をもつ。検出面からの深さは、幅の広い北側では約22cm、南側では約10cmである。埋土は1層であり、1mm大の焼土粒を含んでいる。埋土に焼土粒を含む土壌は、焼き塩の生産に関連する土壌13を除けば、この土壌14と、隣接する土壌15のみである。



遺物の量は少なく、図化できたのは壺の口頸部片 (116) 1点である。広口壺Bに分類され、口唇部に3条の凹線をもつ。内面に、粘土紐の接合痕が残るほかは、磨滅のため調整の観察ができない。

第54図 土壌14出土遺物

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面	外 面		
116	壺	(14.0)	(12.0)	—	—	—	1/8	10YR8/3	浅黄橙	10YR6/1	褐灰

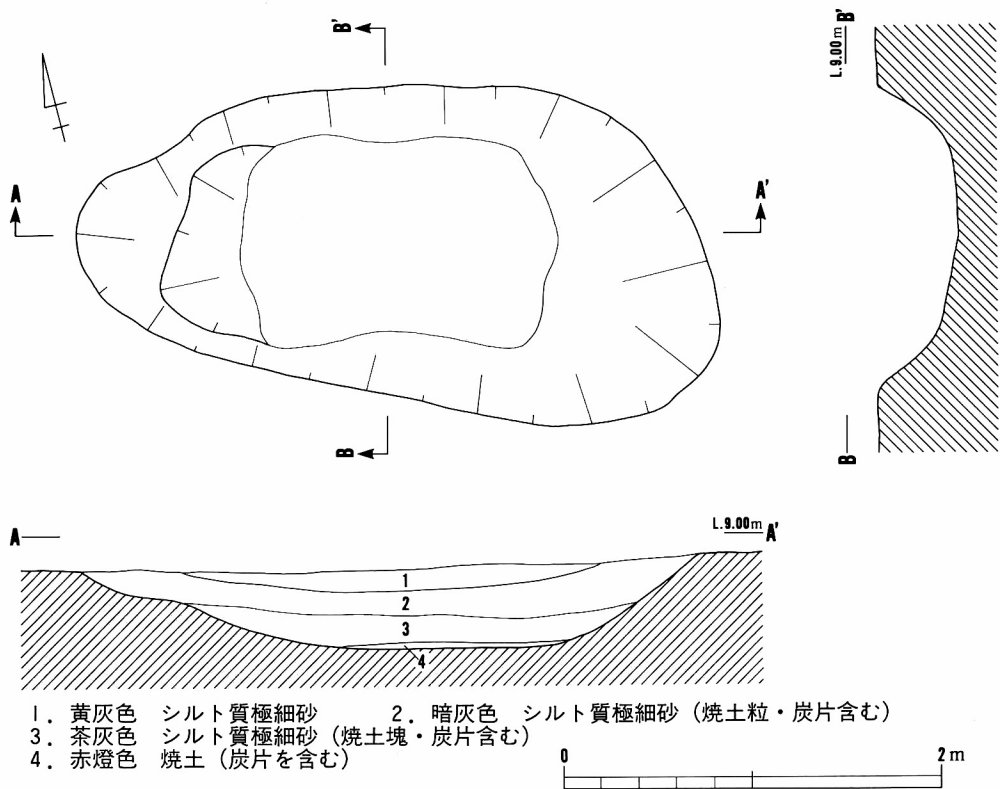
土壌15

III区北寄りの17層上面で検出された土壌であり、土壌14を切っている。長軸の長さ約3.3m、短軸の長さは東端で約1.8m、西端では約1.4mとなっている。壙底における長軸は約1.2m、短軸の長さは約1.0mである。検出面からの深さは約40cmを測る。壁面の立ち上がりは、長軸方向のそれが、東端で約30°、西端で約20°と、短軸側に比べて緩くなっている。西壁には傾斜の変換点が認められる。

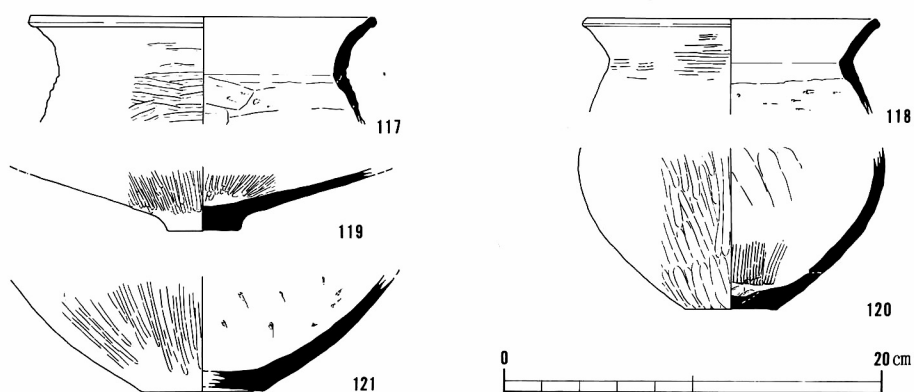
埋土は4層に分かれ、2・3層には5mm大の焼土粒、炭片を多く含んでいる。4層は焼土層であるが、壙底は焼けておらず、堆積したものと判断できる。

土器の量はさほど多くなく、壺、甕のみが出土している。

117・118は甕A₂の破片である。いずれも、肩部内面には逆時計回り横方向のヘラケズリを施している。口縁部は、叩き出すのではなく、当遺跡で一般にみられるように、貼り付け手法によるものである。119は内外面に縦方向のヘラミガキを施すもので、突出した底部をもつ。底部から約15°と緩い角度をもって体部が伸びていき、内面にヘラミガキがあることから、蓋である可能性も考えられる。



第55図 土壌15



第56図 土壌15出土遺物

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
117	甕	(18.2)	(15.2)	—	—	—	1/4	10YR7/3 にふい黄橙		2.5Y8/3	淡黄
118	甕	(15.1)	(12.8)	—	—	—	1/4	10YR8/2	灰白	10YR8/3	灰白
119	壺	—	—	—	3.9	—	体部下半1/2	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙
120	壺	—	—	(16.2)	(4.8)	—	体部5/6、底部1/2	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y3/1	黒褐
121	壺	—	—	—	(6.4)	—	1/4	2.5Y3/1	黒褐	2.5Y4/1	黄灰

120・121は広口壺Aに分類される。いずれも、体部外面に縦方向のヘラミガキを施し、当遺跡出土の広口壺Aに通有な、丁寧なつくりである。120は、内面底部付近に縦方向のハケメが、体部中位にはユビナデが施されている。121は内面にヘラケズリが残る。

土壌16

III区中央の、17層上面で検出された長方形の土壌である。東端は調査区外に続く。中央やや西寄り、江戸時代の柱穴により損壊している。

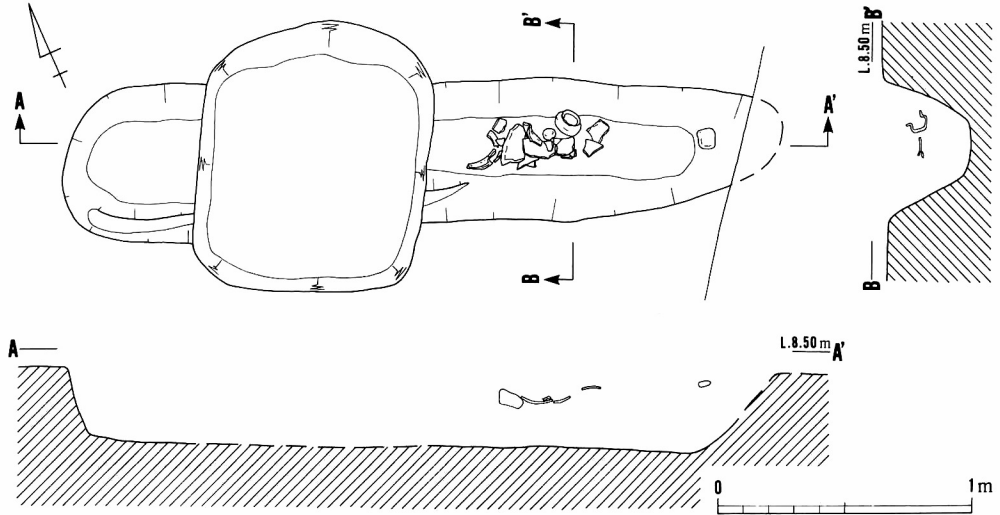
推定される長軸の長さは約2.8m、短軸の長さは50～60cm程度である。約60°と、比較的急な角度をもって壁が落ち、平坦な壙底にいたる。壙底の長さは2.45m、幅は西端で33cm、東端で20cmを測る。検出面からの深さはほぼ均一で、約35cmを測る。

遺物には土器、石器があり、中央やや東寄り上層の、20×50cmほどの範囲からまとめて出土している。

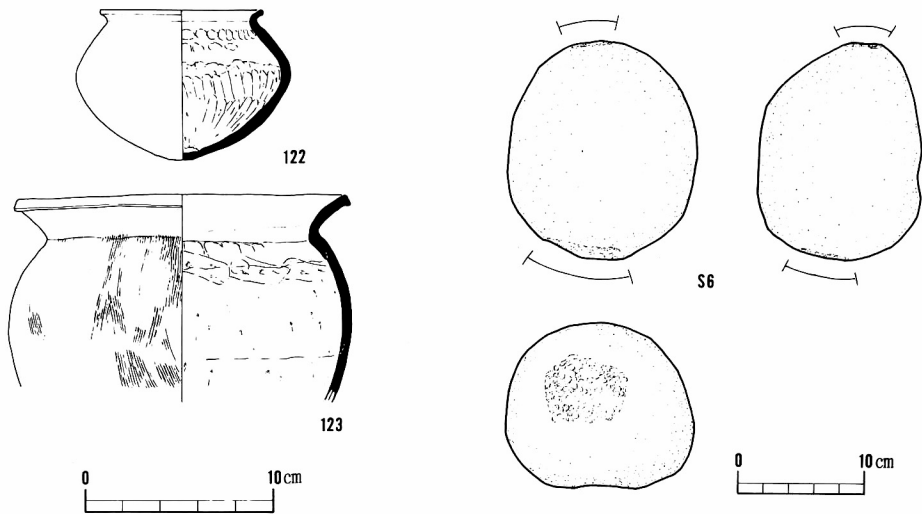
図化できた土器は2点である。122は広口壺Aに分類されるもので、わずかな平底、偏球形の体部、短く斜め外方に伸びる口縁部をもつ。内面は下半に縦方向のユビナデ、上半にはユビオサエの痕跡をとどめている。123は甕A₂に分類できる。体部は、外面に縦方向のハケメ、内面にヘラケズリを施す。ヘラケズリの方向は肩部付近を逆時計回り横方向、それ以下は下から上で

ある。

敲石が1点出土している(S6)。円形の自然礫を素材にしたもので、上下両端に敲打痕が残る。重量は約620gである。石材は花崗閃緑岩であり、千種川流域に産するものである。



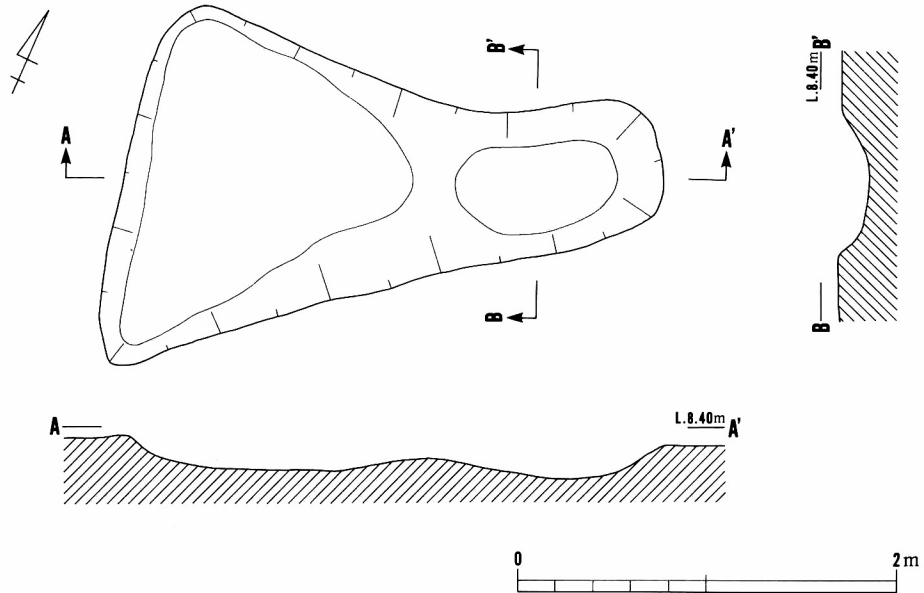
第57図 土壌16



第58図 土壌16出土遺物

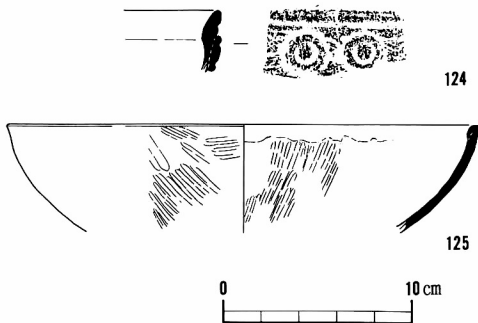
番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調			
		A	B	C	D	E		内面		外面	
122	壺	8.5	7.8	11.3	1.5	7.7	ほぼ完形	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙
123	甕	17.2	14.2	18.1	—	—	体部上半以上は完形	2.5Y8/3	淡黄	2.5Y8/3	淡黄

土壌17



第59図 土壌17

III区南寄りの14層上面で検出された不整形の土壌である。この土壌は竪穴住居4に近接するが、住居の壁体の外縁に上屋の接地部を想定しなければならないため、この二者が同時に存在したとは考えられない。上面における長さは約2.8m、幅は西端部で約1.9m、東端では約0.8mを測る。検出面からの深さは約15cmである。



図化できた遺物は、壺、鉢Aのみである。

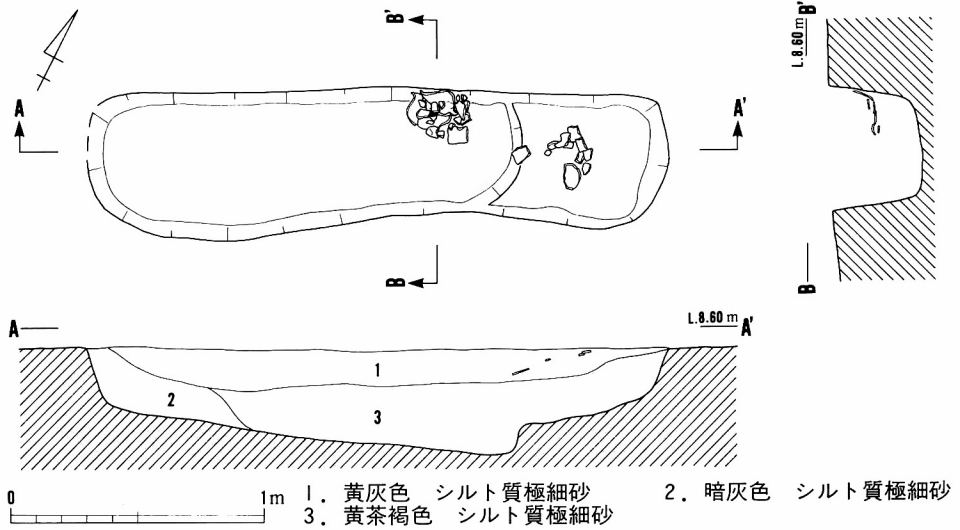
124は壺の口縁部である。内外面とも横方向のナデを施し、外面には凹線の下に3本単位の波状文を施文し、その上に2個単位の円形竹管浮文を配している。

125は鉢Aに分類される。内外面とも縦方向のヘラミガキを施している。

第60図 土壌17出土遺物

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面	外 面		
124	壺	—	—	—	—	—	小片	7.5YR6/2	灰褐	2.5YR6/6	橙
125	鉢	(24.7)	—	—	—	—	1/4	7.5YR5/1	褐灰	7.5YR5/1	褐灰

土壌18



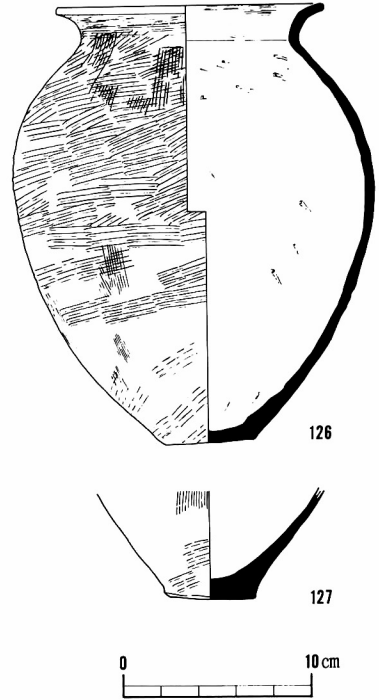
第61図 土壌18

III区南半において竪穴住居4、掘立柱建物4に近接して検出された土壌である。14層上面から掘りこまれている。

長方形の平面形をもち、その規模は長軸で約2.3m、短軸では西端で60cm、東端で50cmを測る。東端から約60cmまでは墳底がやや高くなっており、縦断面には段がつくことになる。その段の下にあたる部分が最も深くなっており、検出面から約40cmの深さがある。横断面では壁が垂直に近い角度をもつ。

埋土は大きく2層に分かれ、上層、下層からそれぞれ甕が1点ずつ出土している。

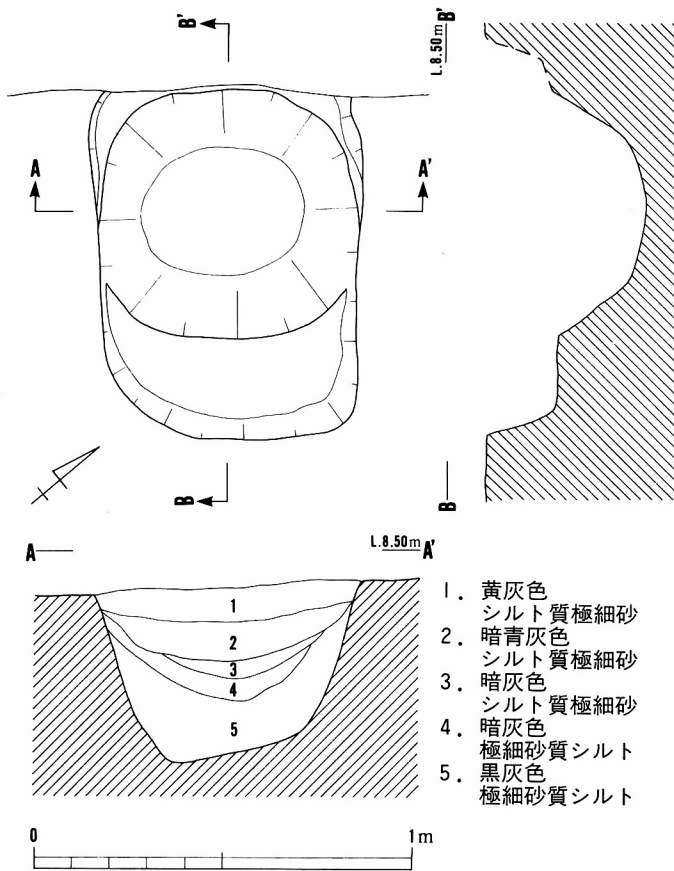
下層から出土した126は甕B₁に分類される。体部の分割成形が確認でき、それを境にタタキ主軸の方向が異なっている。126・127とも外面にはタタキののちハケを施している。126の内面にはハケメが観察できる。



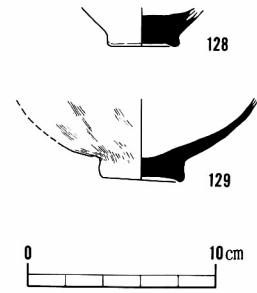
第62図 土壌18出土遺物

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
126	甕	13.9	11.6	19.2	4.7	23.1	ほぼ完形	2.5Y2/1	黒	2.5Y8/2	灰白
127	甕	—	—	—	4.8	—	底部完形	5Y6/1	灰	10R6/6	赤橙

土壌19



第63図 土壌19



第64図 土壌19出土遺物

III区南寄りの17層上面で検出された長方形の土壌である。畝状遺構1に北接する。上面における規模は、長さ約1.0m、幅0.7mを測る。長軸の両端にある長さ約20cm程度の平坦面の内に直径約65cmの円形の落ちがある。検出面からの深さは、平坦面までが約20cm、円形の落ち込みの底までが約45cmである。遺物の量は少なく、壺の底部が2点出土したのみである。

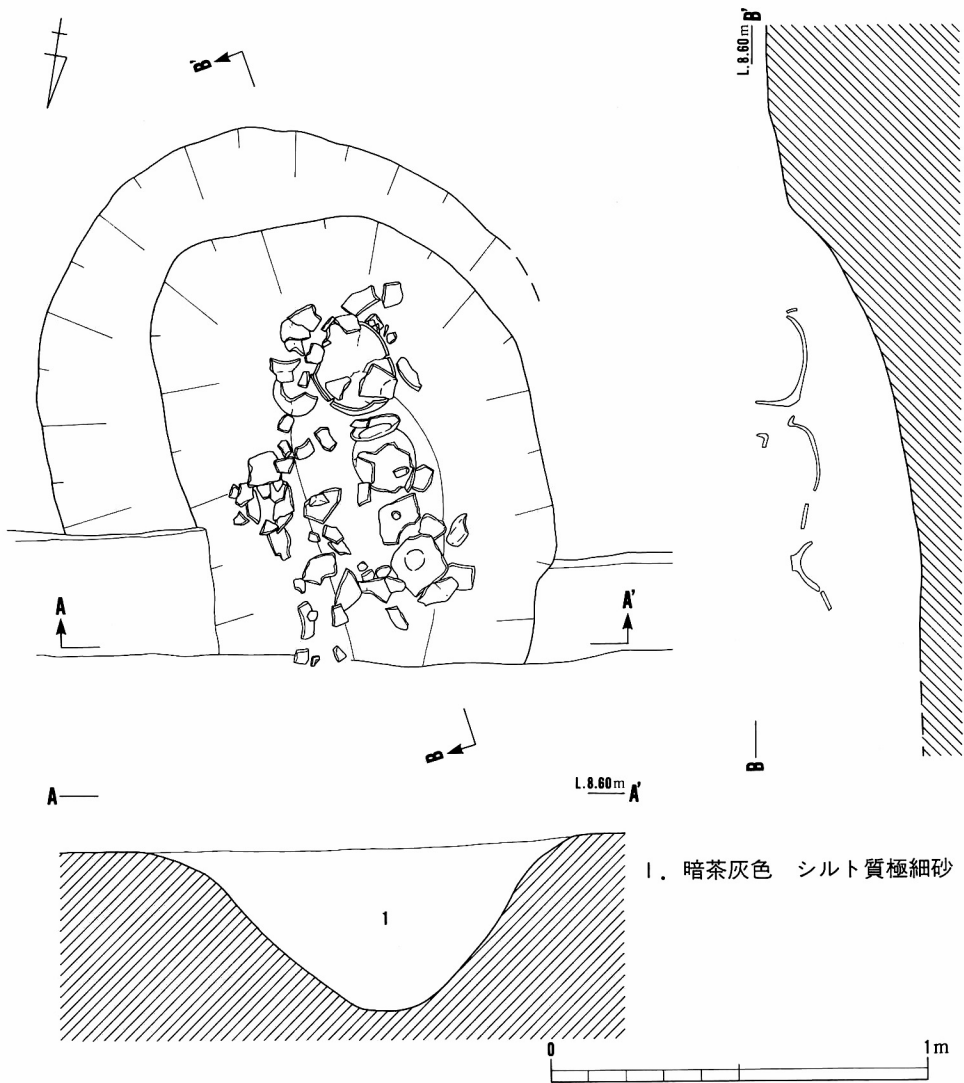
128は磨滅が著しく、調整などの観察は不可能である。甕の底部の可能性もある。129はやや厚い底部をつくりだしている。底部外側面にはユビオサエの痕跡が観察できる。

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
128	壺	—	—	—	3.5	—	底部完形	10YR6/3 にふい黄橙		2.5YR7/6	橙
129	壺	—	—	—	4.1	—	底部完形	10YR8/2	灰白	10YR8/2	灰白

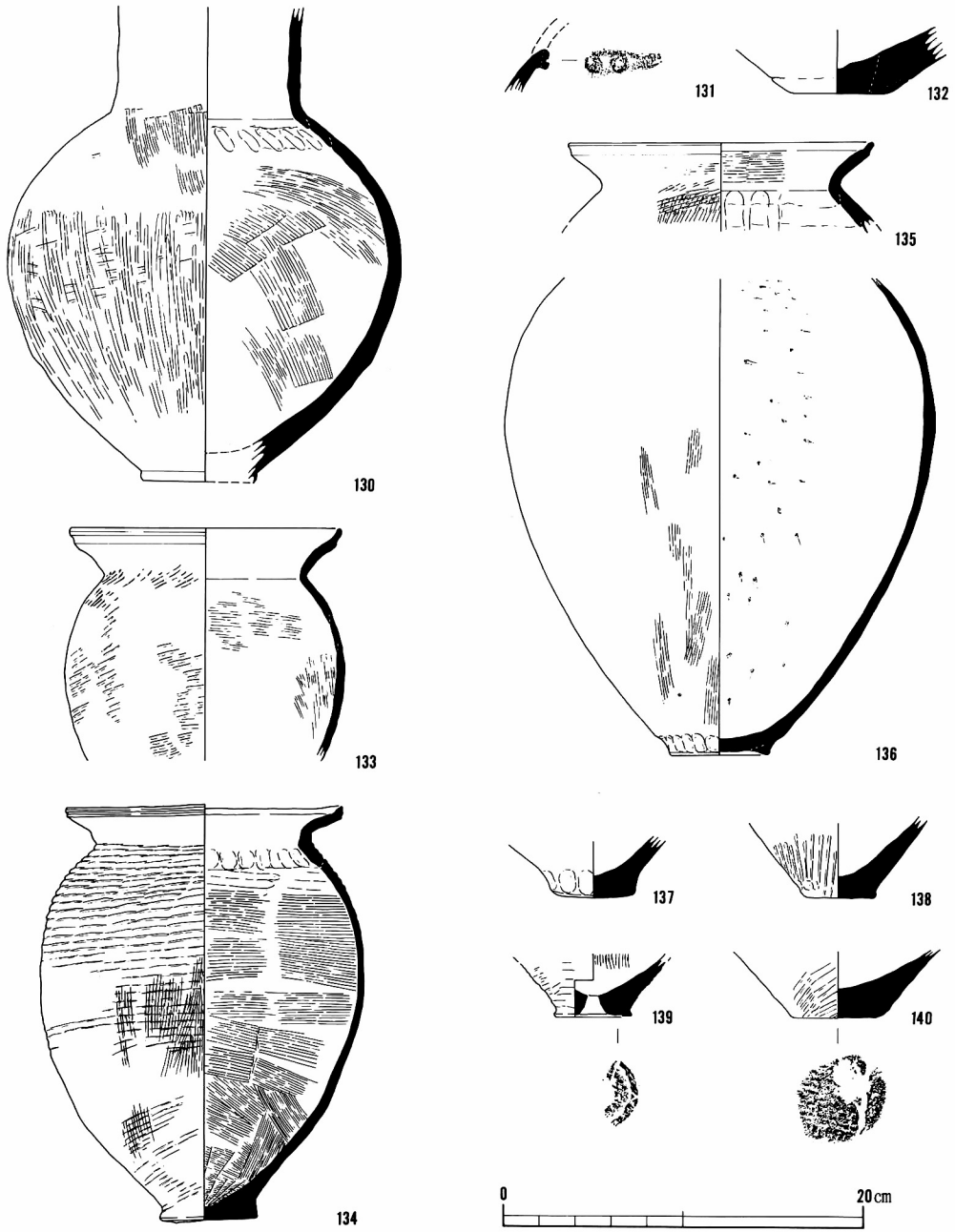
土壌20

IV区北端の14層上面で検出された土壌である。北半が調査区域外に続くため断定はできないが、長方形に近い平面形をとるものと思われる。検出面での長さは、長軸方向が120cm以上、短軸方向が約90cmである。最も深い箇所での深さは約40cmである。横断面の観察によれば、壁面の角度は約45°であり、幅の狭い壙底にいたる。長軸方向の壁面はこれよりも緩やかな傾斜をもつ。壙底の形状は長円形であり、幅は20~30cmである。

埋土は1層であり、この中位以上より、まとまった形で土器の破片が出土した。



第65図 土壌20

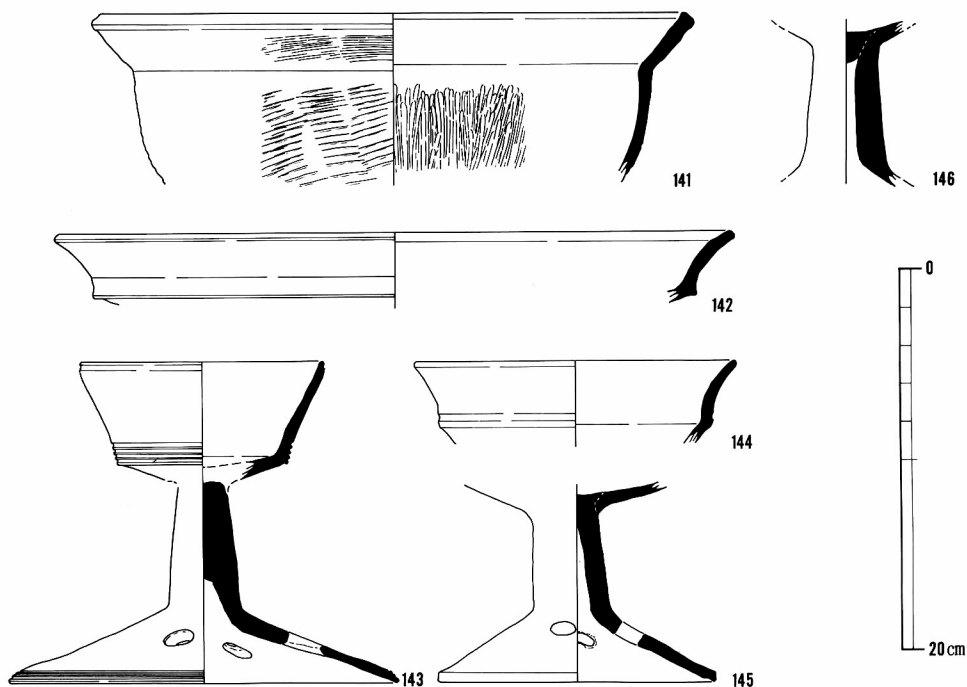


第66图 土壤20出土遗物(1)

出土土器には、長頸壺A、甕A・B、鉢C、高坏A・Cがある。

長頸壺A (130) は口縁部を欠失する。底部はやや突出するものと思われる。頸腹指数(頸部径/体部径×100)は46である。体部の成形にあたっては、外面にタタキを用いる。調整には下半に縦方向のヘラミガキを、上半にハケメを施しており、後述する土壙22の長頸壺Aとは、底部の形状だけでなく、外面の調整手法の点においても異なっている。内面には、体部にハケメ、肩部に頸部との接合の痕跡であるユビオサエが観察できる。131は、壺口縁部の小片であり、器形については詳細が不明である。二重口縁壺の可能性も考えられる。頸部との境に円形の浮文を貼り付け、その中心に棒状工具による刺突を行っている。円形浮文は2個が残存している。

甕にはA・Bの2者が存在する。136は甕A₁に分類される。体部外面には縦方向のハケメが、内面下半には下から上方向のヘラケズリ、内面上半には横方向逆時計回りのヘラケズリが施される。底部の外縁には粘土紐を貼り付けているため、上げ底状を呈している。133は甕B₁に、134・135は甕B₂に分類される。これらとともに、口唇部に強い、あるいは数度の横方向のナデを行うことによって、上方につまみ上げる形態をとっている。土壙6・9・21出土の甕にも口唇部につまみ上げは認められるが、それがより強調されているものである。体部の成形・調整については、133が外面をタタキ、内面をハケメで仕上げている。134の外面にはタタキののち、縦方向のハケメを施し、内面もハケ仕上げである。135は肩部外面にハケメ、口縁部内面に横方



第67図 土壙20出土遺物(2)

向のハケメがみられる。いずれの甕も、肩部内面にはユビオサエが認められ、口縁部は貼り付け手法によっている。134は底部が突出した形態を示している。138には縦方向のタタキが施される。甕の底部片が出土しており、139には葉脈の圧痕が、140にはタタキメが観察される。

141は鉢Cの破片である。口唇部には面を形成する。体部外面にはタタキが、内面には縦方向のヘラミガキが施されている。口縁部外面には横方向のハケメが観察される。

143は高坏Aに分類される。口縁部上端外面にはナデによる浅い凹みが認められ、下端外面には4条の沈線が巡る。柱状部は中実であり、裾部には4個の円孔が穿たれている。裾部の下端外面には3条の沈線が巡っている。坏部の容量は0.5ℓである。高坏Cには大小の142・144が出土しており、144は口縁部下端に1条の凹線を巡らせている。坏部の傾指数は142が89.9、144は85.7である。145の柱状部は中空である。146には円盤充填手法による接合が認められる。

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調	
		A	B	C	D	E		内 面	外 面
130	壺	—	10.2	22.1	(6.2)	—	1/2	10R6/4 におい赤橙	10R6/4 におい赤橙
131	壺	—	—	—	—	—	小片	2.5Y8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙
132	壺	—	—	—	5.2	—	底部完形	10YR8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白
133	甕	(14.9)	(11.2)	(15.5)	—	—	1/2	10R6/8 赤橙	10R6/8 赤橙
134	甕	15.4	12.0	(18.1)	(5.5)	23.2	体部2/3、他は完形	10R5/8 赤	10R5/8 赤
135	甕	(16.8)	(13.2)	—	—	—	口縁部1/4	5YR7/4 におい橙	5YR7/4 におい橙
136	甕	—	—	(23.7)	(5.3)	—	1/3	2.5YR6/8 橙	5YR5/6 明赤褐
137	壺	—	—	—	4.5	—	底部完形	2.5YR6/6 橙	5YR5/1 褐灰
138	甕	—	—	—	(4.0)	—	底部3/4	10YR6/2 灰黄褐	2.5YR6/6 橙
139	鉢	—	—	—	(4.2)	—	底部1/4	10YR7/2 におい黄橙	5YR7/4 におい橙
140	甕	—	—	—	4.4	—	底部ほぼ完形	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐
141	鉢	30.6	(27.4)	—	3.3	—	1/8	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y8/3 淡黄
142	高坏	(35.6)	(32.0)	—	—	—	口縁部1/10	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙
143	高坏	12.7	9.0	2.6	(20.3)	(16.9)	裾部1/4	5YR8/3 淡黄	10YR8/3 浅黄橙
144	高坏	(16.8)	(14.4)	—	—	—	1/8	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙
145	高坏	—	—	3.5	(14.6)	—	1/2	2.5YR6/8 橙	10R5/8 赤
146	高坏	—	—	3.5	—	—	柱状部のみ	10R6/8 赤橙	10R6/8 赤橙

土壌21

IV区北端の14層上面で検出された土壌である。土壌20に近接している。土壌西端は調査区外にある。

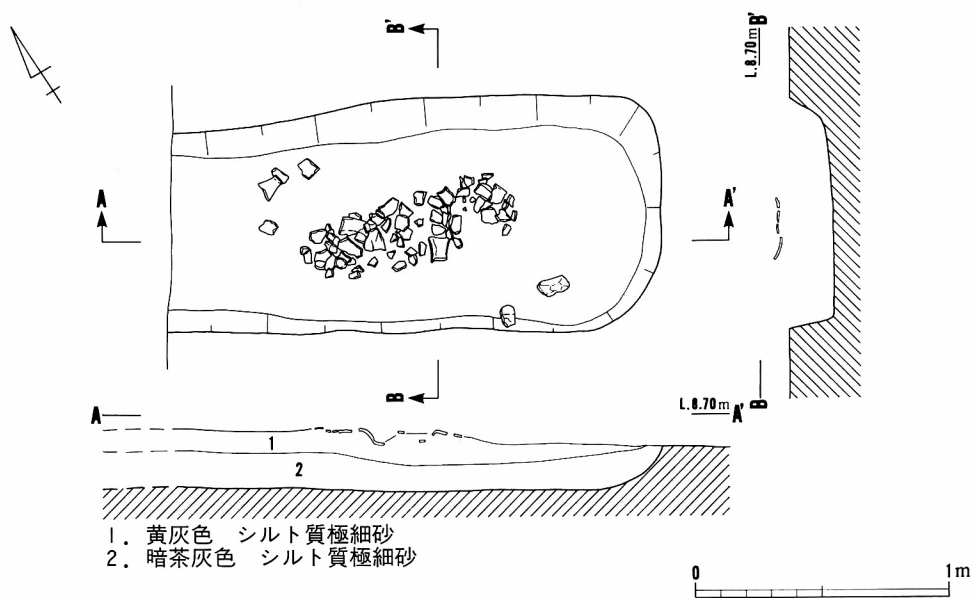
平面形は長方形になるものと思われ、上面における長軸の長さは195cm以上、短軸の長さは80～90cmである。検出面から壙底までの深さは、約20cmである。壙底はほぼ平坦であり、幅は60～70cmを測る。

埋土は2層に分かれている。遺物は下層からは出土せず、土壌の検出面くらの高さに集中していることから、土壌上面が削平されていることが判る。

出土遺物には、甕、高環、敲石がある。

147は甕の肩部以上の破片である。斜め上方に直線的に伸びる口縁部をもち、口縁部径は体部径を下回る。口唇部は丸くおさめている。調整手法は不明瞭である。148・149はともに口唇部に横方向のナデを加え、上方につまみ上げている点で共通する。148は、体部径が口縁部径を上回るものである。体部外面には右上がりのタタキののち、縦方向にハケメを施し、これを切る形で口縁部外面に横方向のハケメが施されている。内面の調整は不明である。149は甕B₂に分類される。内面の横方向のハケは逆時計回りに施されている。口縁部の成形は貼り付け手法によっており、内外面は横方向のナデ仕上げである。

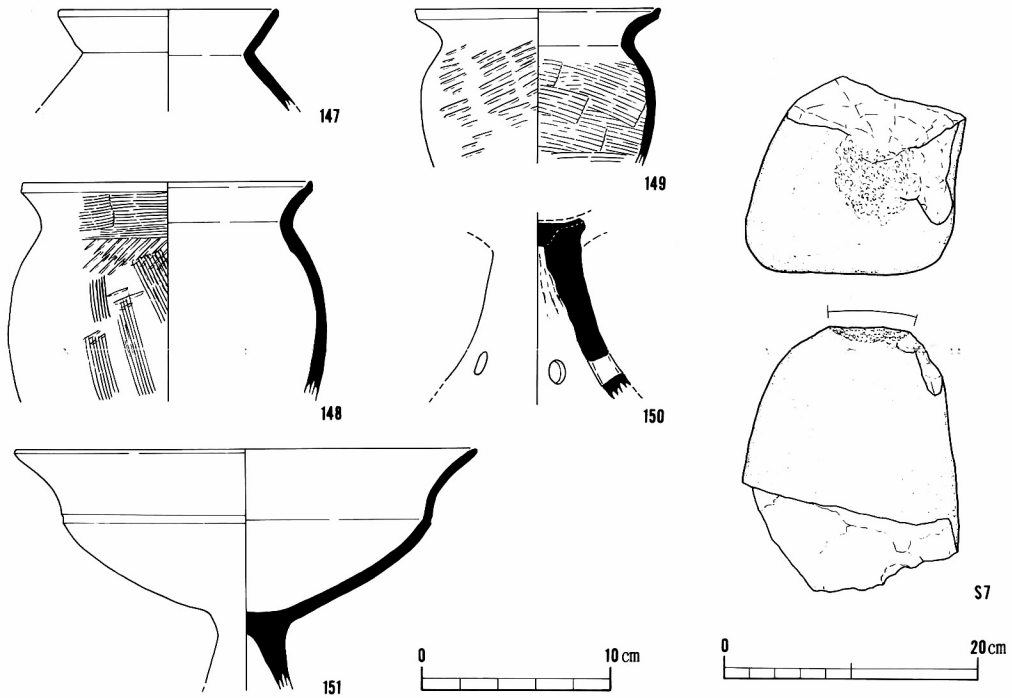
150は高環の柱状部の破片である。坏部との接合は、いわゆる円板充填法によっており、柱状部内面には絞り目が観察される。裾部への移行はなだらかであり、明瞭な境をもたない。3箇



第68図 土壌21

所に円形の穿孔が認められる。151は高坏Cに分類される。比較的深い体部に緩く外反する口縁部をもつもので、体部と口縁部の境には1条の凹線を巡らせている。坏部の外傾指数は73.8である。

敲石が1点出土している。長円形の礫を利用したもので、下端を欠失するが、上端には敲打痕が観察できる。この敲打痕は、剥離面上にも認められることから、使用前あるいは使用中に剥離したことが分かる。現在の重量は約700gである。



第69図 土壌21出土遺物

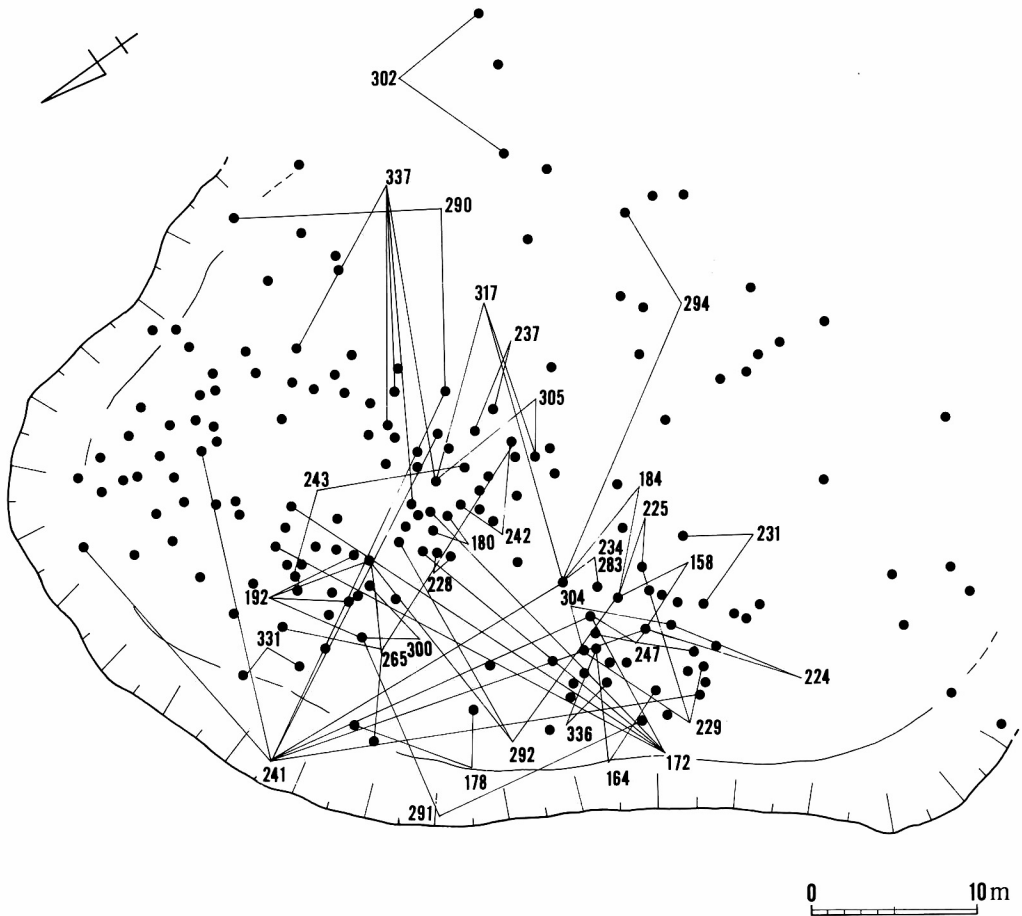
番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面	外 面		
147	甕	(11.4)	(9.0)	—	—	—	1/4	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙
148	甕	(15.2)	(13.3)	(16.8)	—	—	1/3	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR5/4	にぶい褐
149	甕	(12.8)	(10.0)	(12.4)	—	—	1/4	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙
150	高坏	—	—	(4.6)	—	—	1/2	5YR8/2	灰白	5YR8/3	淡橙
151	高坏	(26.3)	(19.4)	(3.6)	—	—	口縁部1/3	5YR6/8	橙	7.5YR7/6	橙

土壙22

IV区東寄りの17層上面で検出された土壙であり、畝状遺構1・2に近接する位置にある。

検出面から壙底までの深さは5 cm程度と浅いため、肩の位置が不確かな部分がある。この平面形を不整形と捉え、その規模を示せば、短軸の長さ約5.1m、長軸の長さは約8 mとなる。

埋土中より200個体近くの土器が出土している。土器は、大形の破片が多く、いくつかのまとまりがみられるため、流入してきたのではなく、廃棄された状態を示すと考えるのが妥当である。このまとまりの評価のため、試みに土器の取り上げ地点をドットし、その接合関係を示した(第70図)。同一取り上げ番号内での接合は当然認められるが、離れている場所同士と比較的大きな破片であっても接合しており、廃棄後の小破片の動きを示すとは考えられない。また土器の観察から、この集中地点間での大きな時期差が認められないことが判明した。このため、



第70図 土壙22出土土器の接合関係

厳密な意味での一括性を問題にした場合には適当でないかもしれないが、これらの集中地点をそれぞれに捉えることをせず、同一土壌内の出土遺物として扱うこととする。

出土した土器には壺・甕・鉢・高坏・器台がある。器種の内容・点数は、実測した土器に基づくものであるが、小片まで実測の対象としたため、その示すところは大きく実際と掛け離れることはないと判断する。図化した土器の総数は146点である。器種ごとの内訳は第71図に示すとおり、壺と甕の比率がほぼ等しく、鉢、高坏、器台の順に少なくなっている。

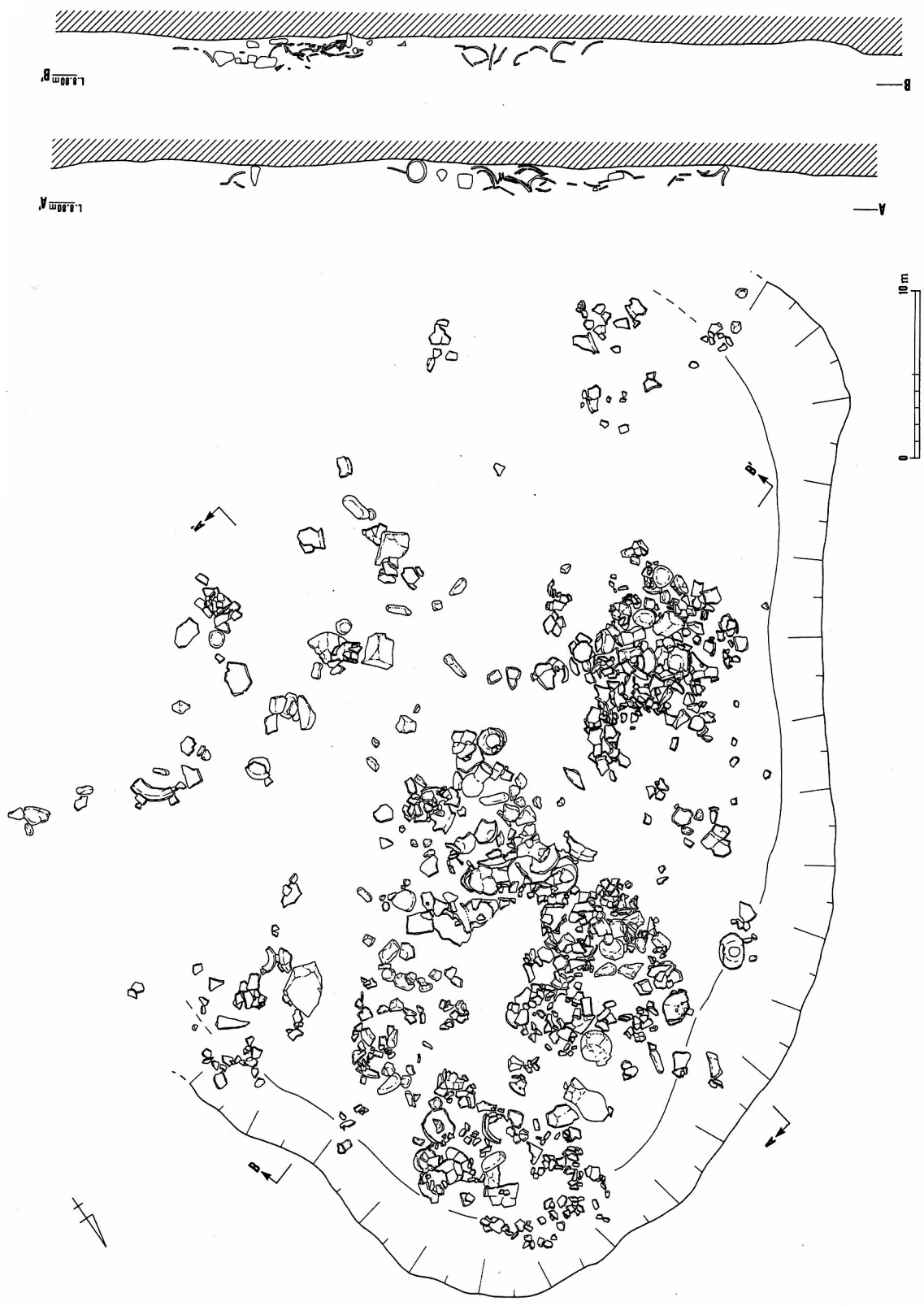
壺には、広口壺A（11点）・広口壺B（5点）・広口壺C（5点）・広口壺D（3点）・ミニチュア壺（3点）・長頸壺A（12点）・長頸壺B（2点）・短頸壺A（2点）・短頸壺B（4点）・短頸直口壺（1点）・その他底部の破片がある。

広口壺Aは、口縁部の形態の判明するものが少ないため確実ではないが、11点出土している。体部最大径から底部へ直線的にすばまるもの（153・154・158）と、全体に丸みをもつもの（155・156・157・159・160・161・162）の二者に分けられる。器高によっても、10cm程度（155・156）、14cm程度（152・153・154・158）、16cm程度（157・159・161・162）のものに三分される。体部外面の調整は縦方向のヘラミガキが施されるものが殆どで、縦方向のハケメ仕上げのものもある。体部内面の調整は、横あるいは斜め方向のヘラケズリを施すもの、縦方向のユビナデを行うもの、ハケメ仕上げのものなどがある。器形や器高との相関関係は認められない。153は底部成形にあたり、絞ったのちに底部外面から粘土塊を充填している。また、底部外面にはヘラ状工具による線刻が認められる。

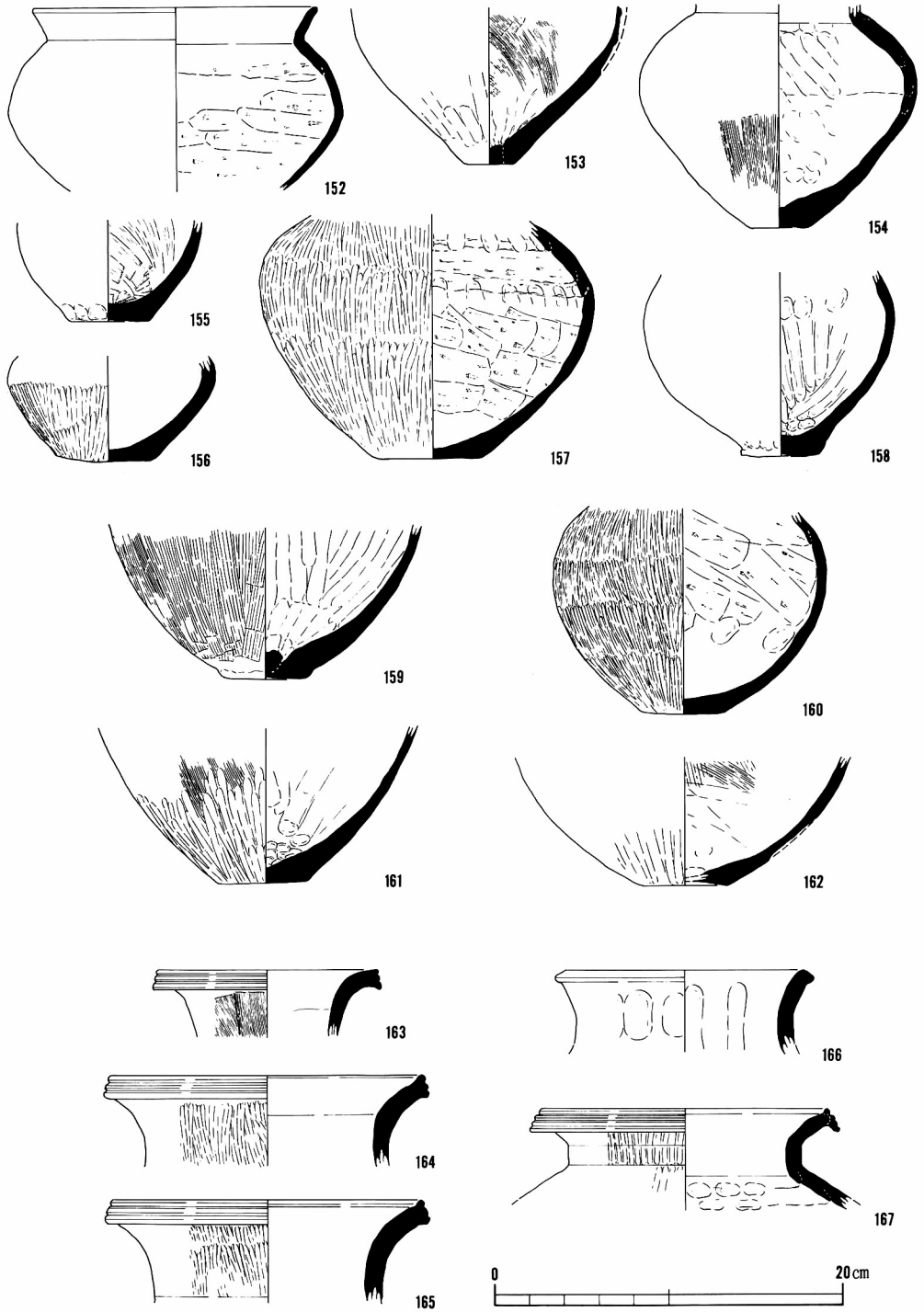
広口壺Bに分類されるものは169・170・176・177・178の5点である。169は口縁部が僅かに肥厚する。170は、肩部から頸部にかけての外面を縦方向のハケメで仕上げ、内面には粘土紐接合のためのユビオサエののち、体部下半を横方向逆時計回りにヘラケズリしている。176は口縁部の破片である。口唇部下方に粘土帯を継ぎ足して端面を形成するものである。この端面上に3条の凹線を施し、その上に円形竹管浮文を貼り付け、さらに口縁部内面に竹管文を施している。177も同様の器形であり、端面に4条の凹線と円形竹管浮文、さらに端面上下端に刺突文を巡らしている。頸部内外面には縦方向のヘラミガキがみられる。178は、突出する底部と球形の体部をもつ。外傾する口頸部の端に粘土紐を継ぎ足すことによって、下方に拡張する端面を形成している。内外面の調整は不明である。肩部外面にも円形の刺突文を巡らしている。これら176・177・178は河内地方に多くみられる器形である。胎土もいわゆるチョコレート色であり、一見して当遺跡の他の土器と異なっていることが分かる。

壺 32.9%	甕 32.2%	鉢 15.1%	高坏 13.7%	器台 6.1%
---------	---------	---------	----------	---------

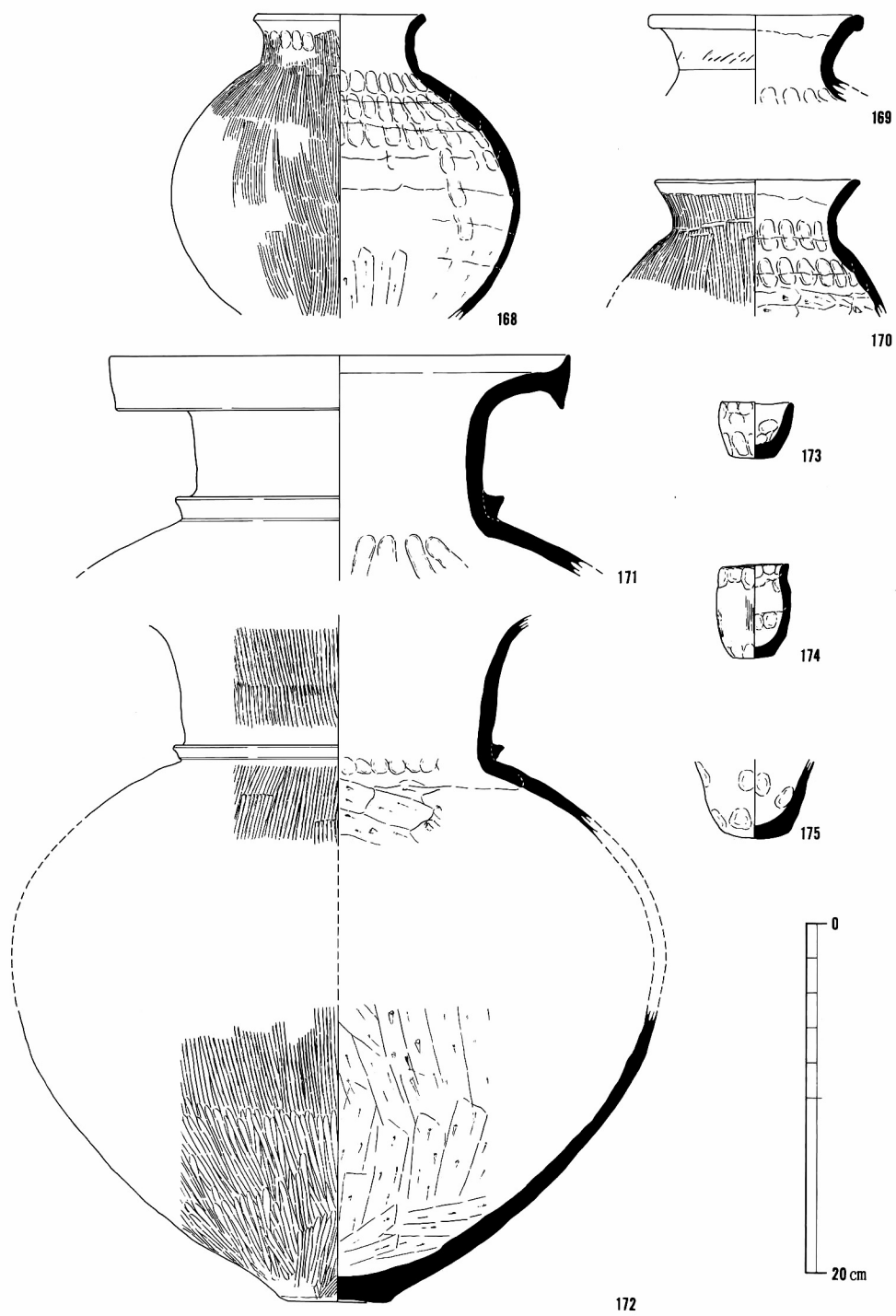
第71図 土壌22出土土器の器種構成



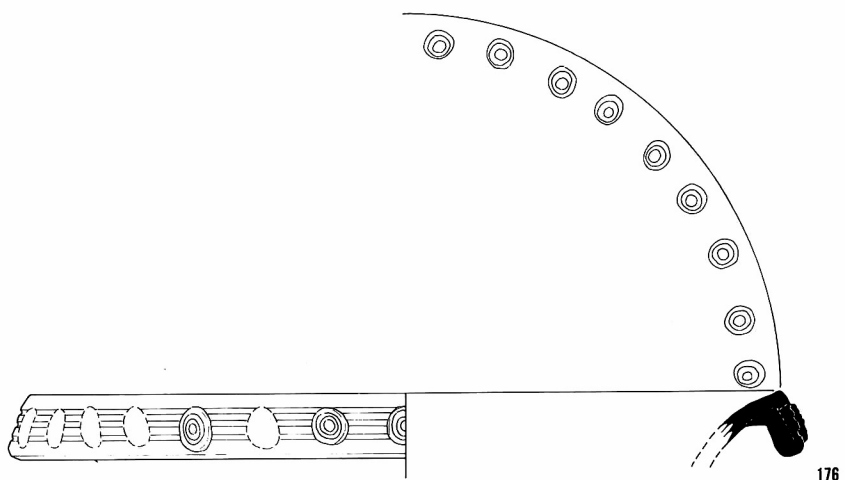
第72図 土壌22



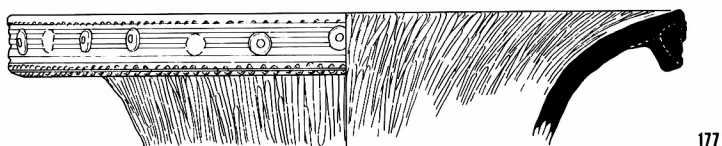
第73图 土壤22出土遗物(1)



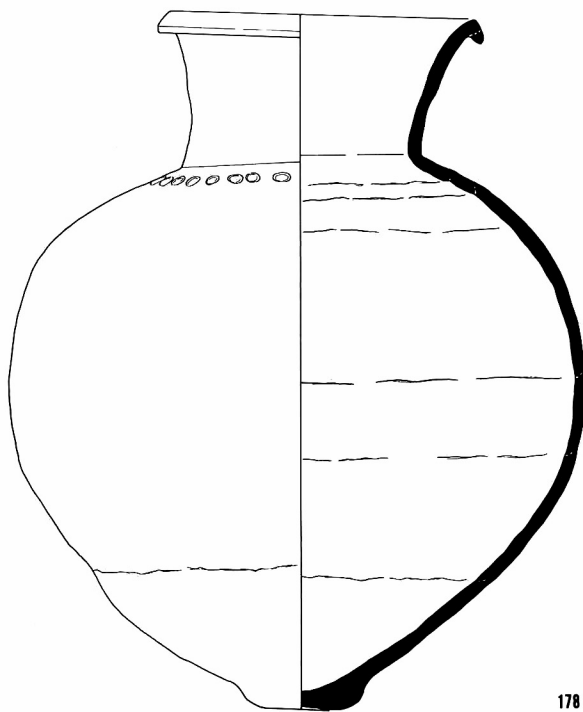
第74図 土壙22出土遺物(2)



176

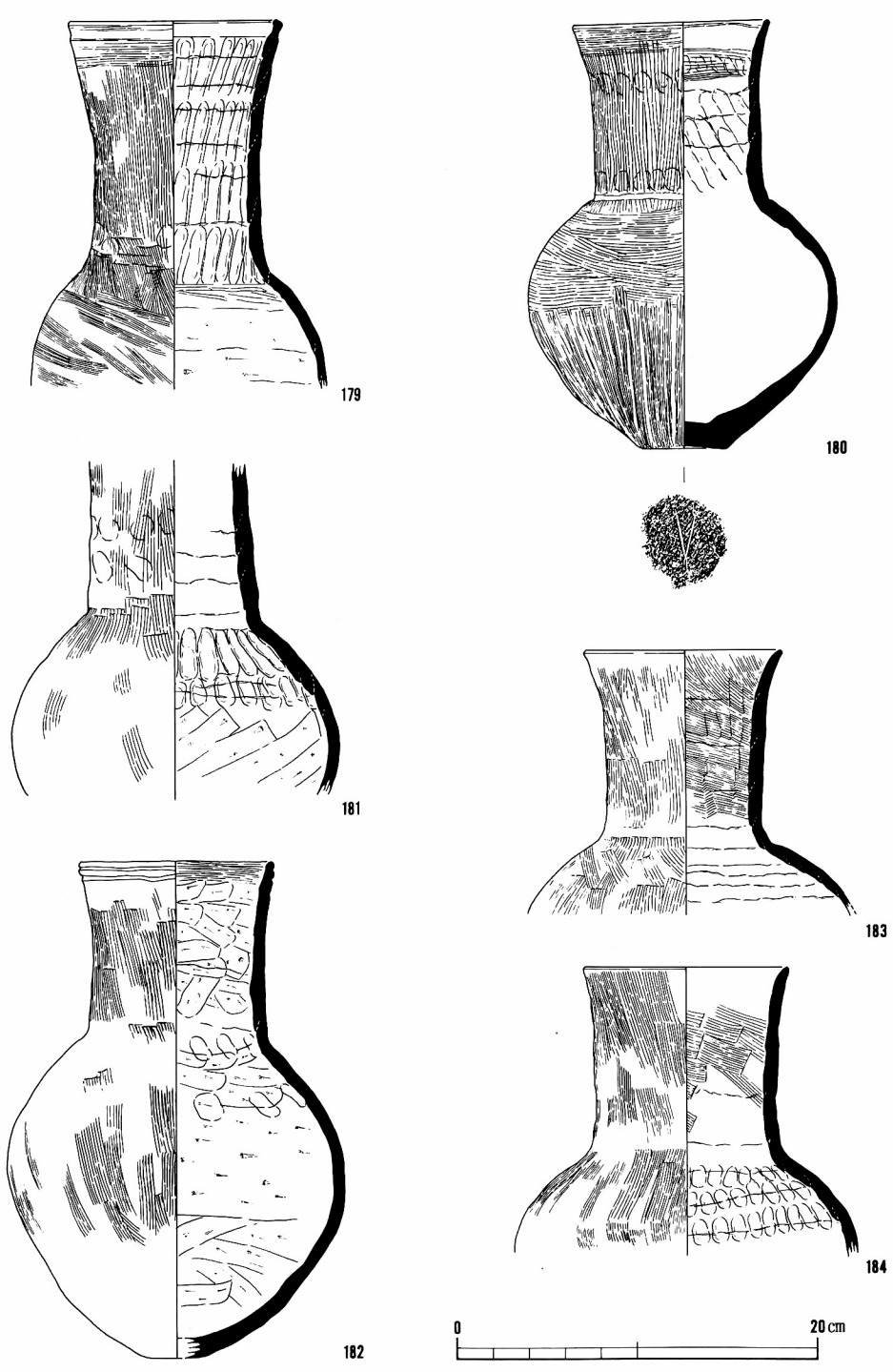


177

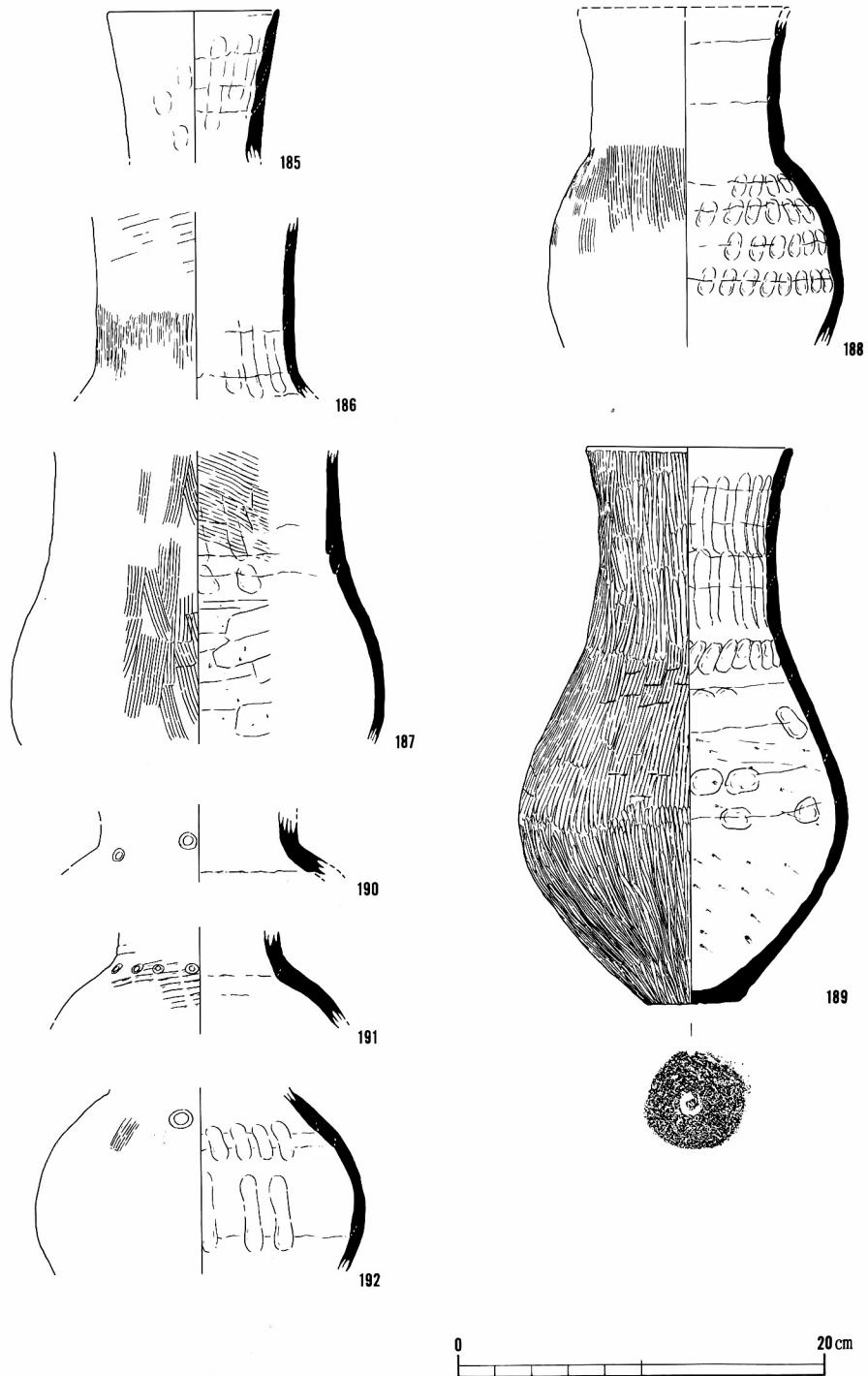


178

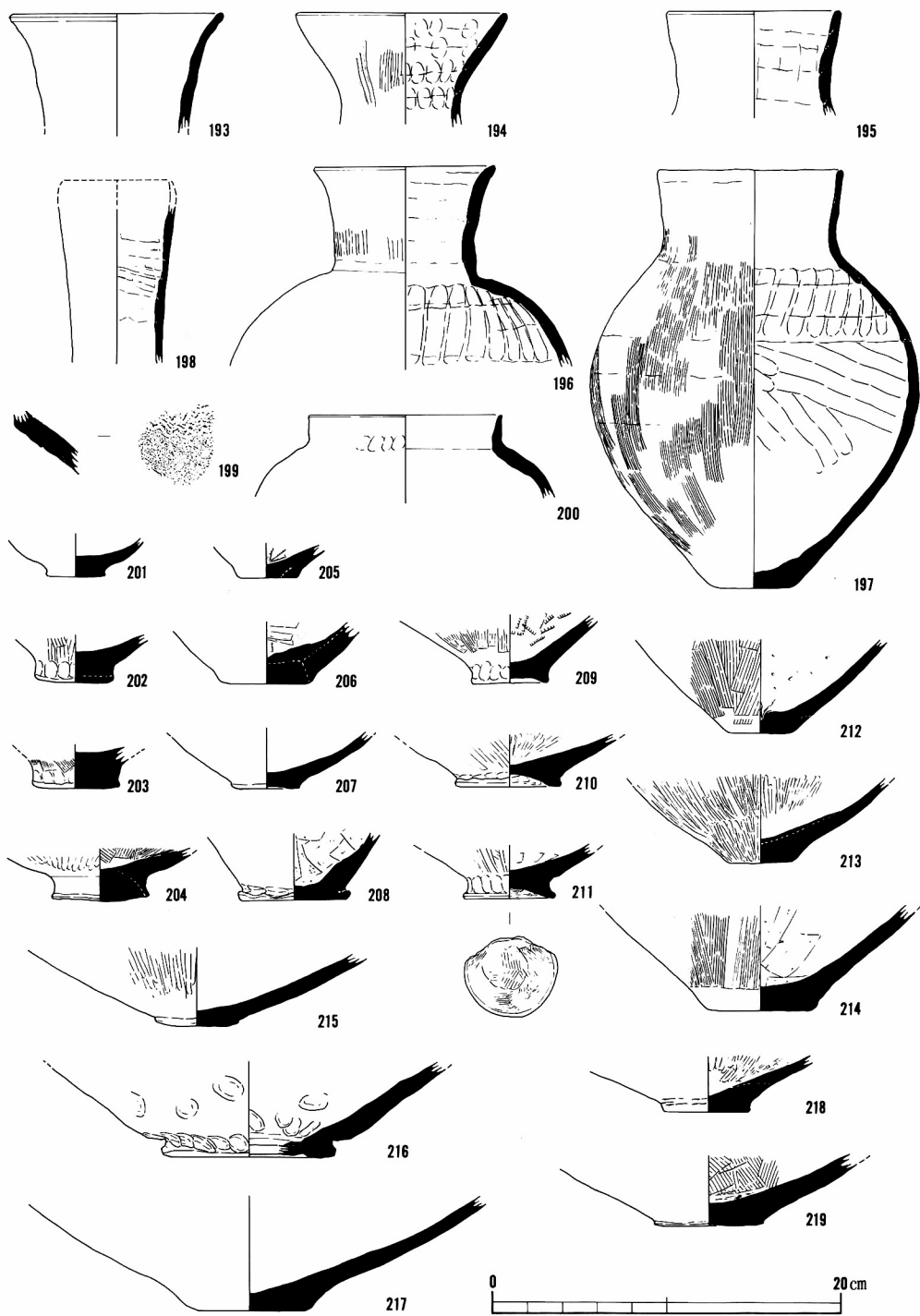
第75図 土壙22出土遺物(3)



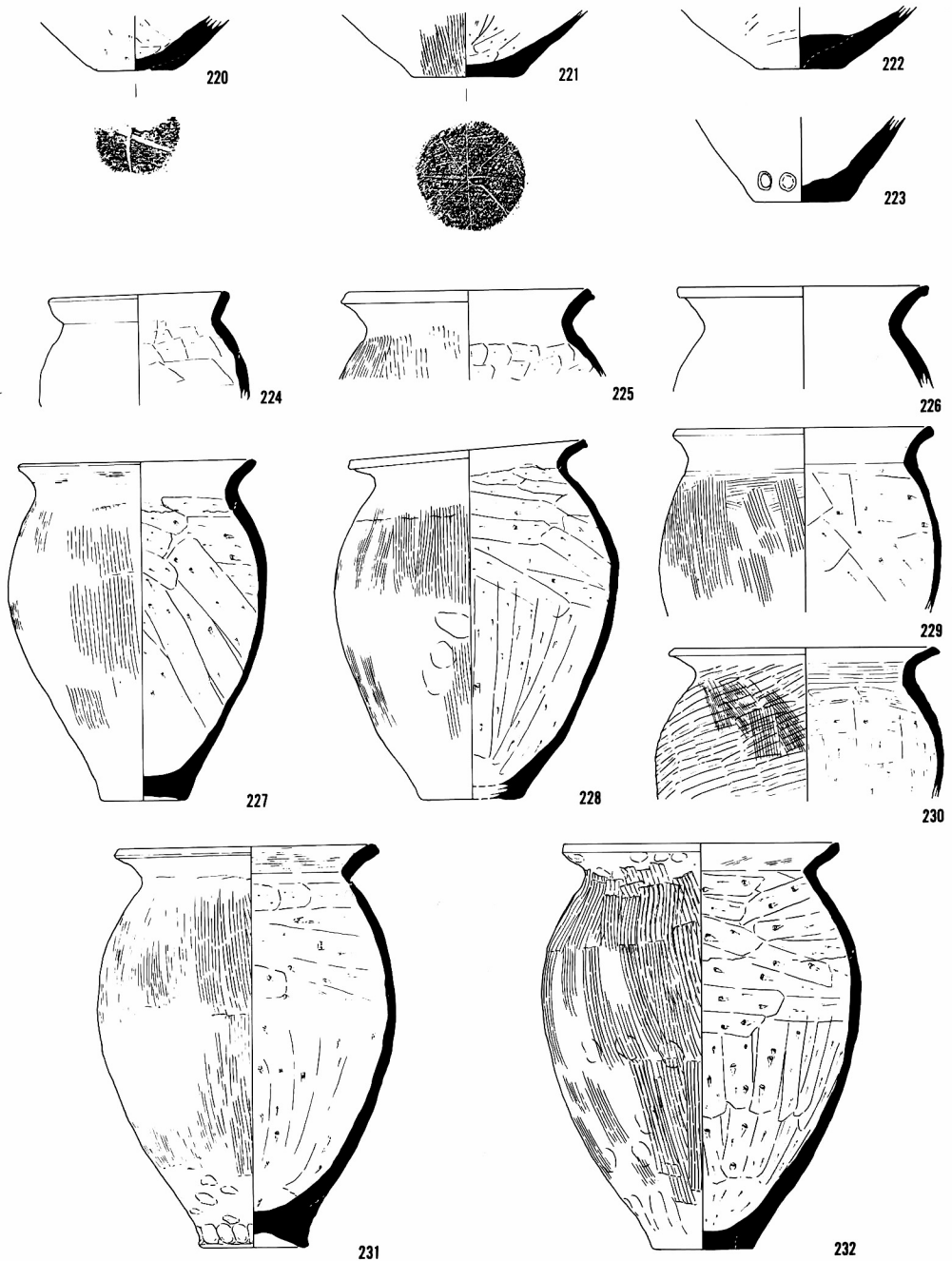
第76図 土壙22出土遺物(4)



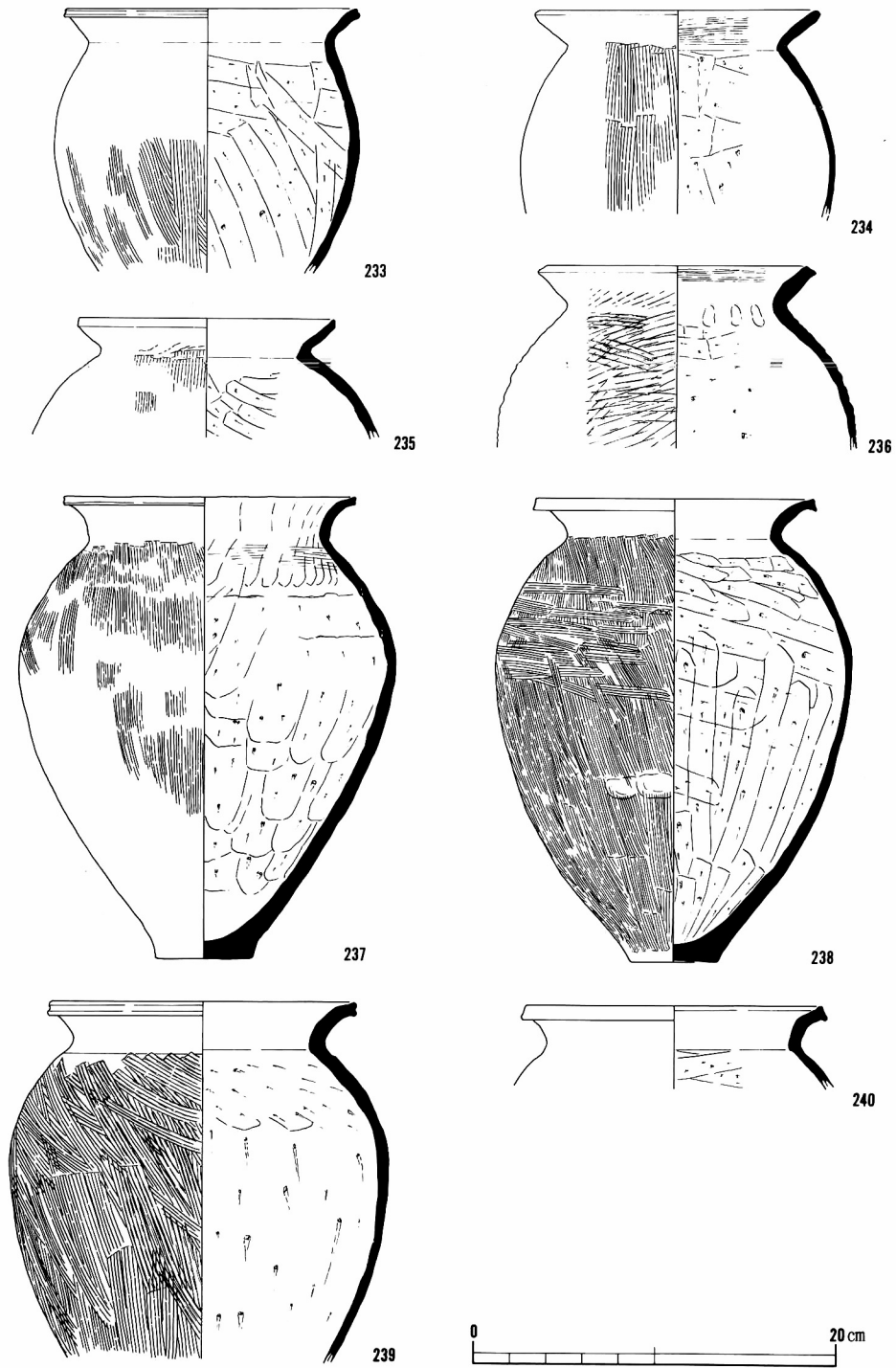
第77图 土壤22出土遺物 (5)



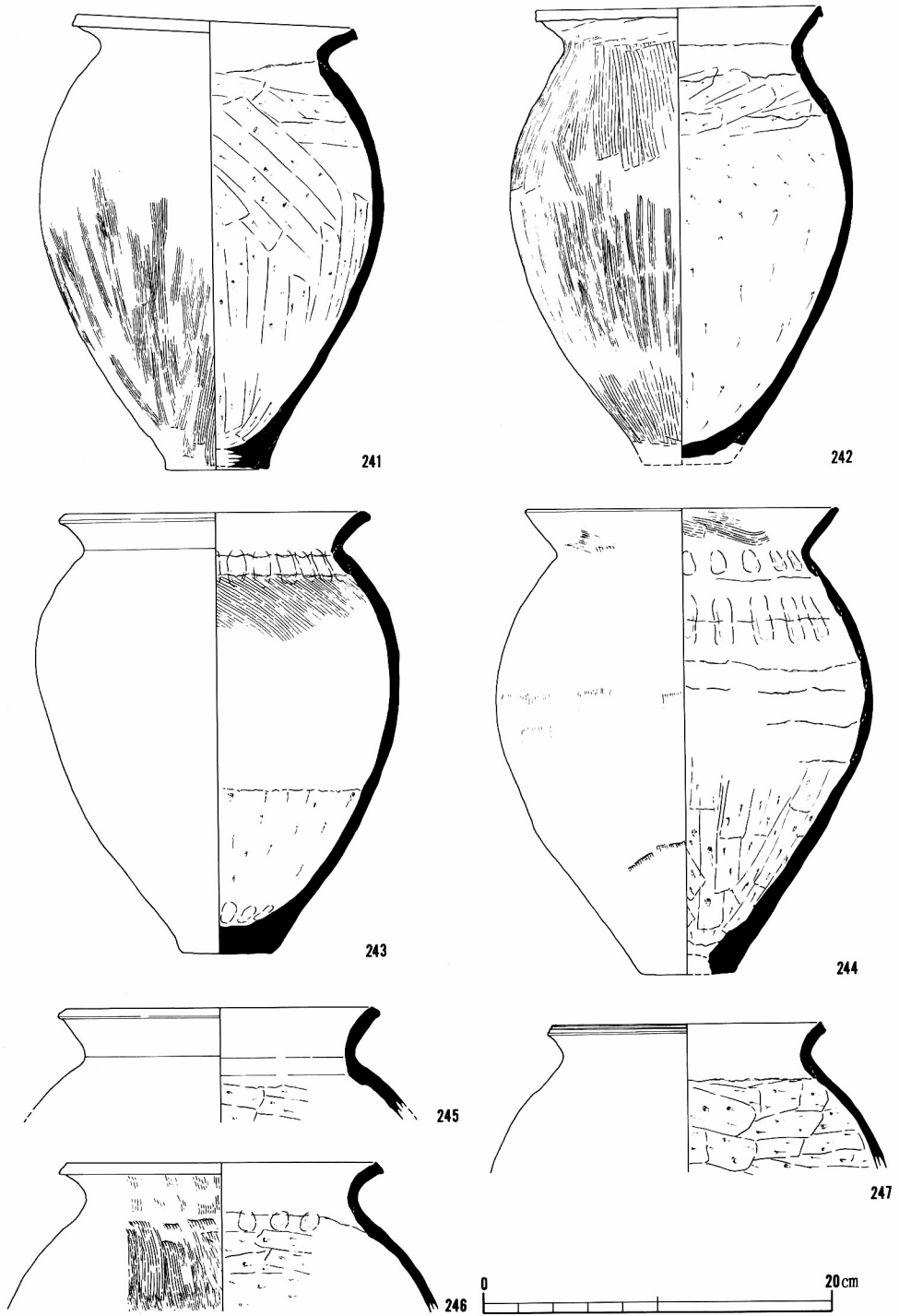
第78图 土壤22出土遺物(6)



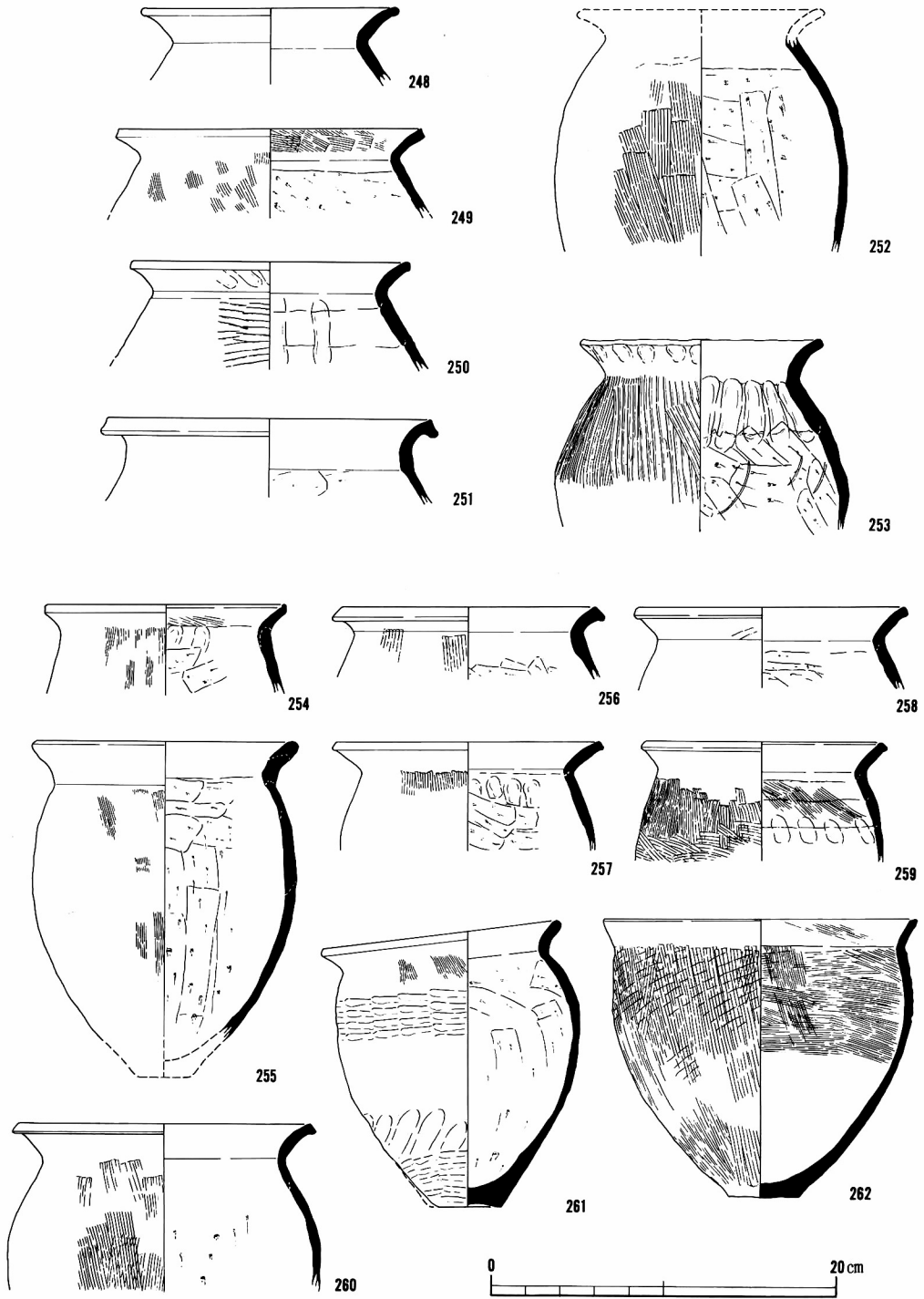
第79図 土壙22出土遺物(7)



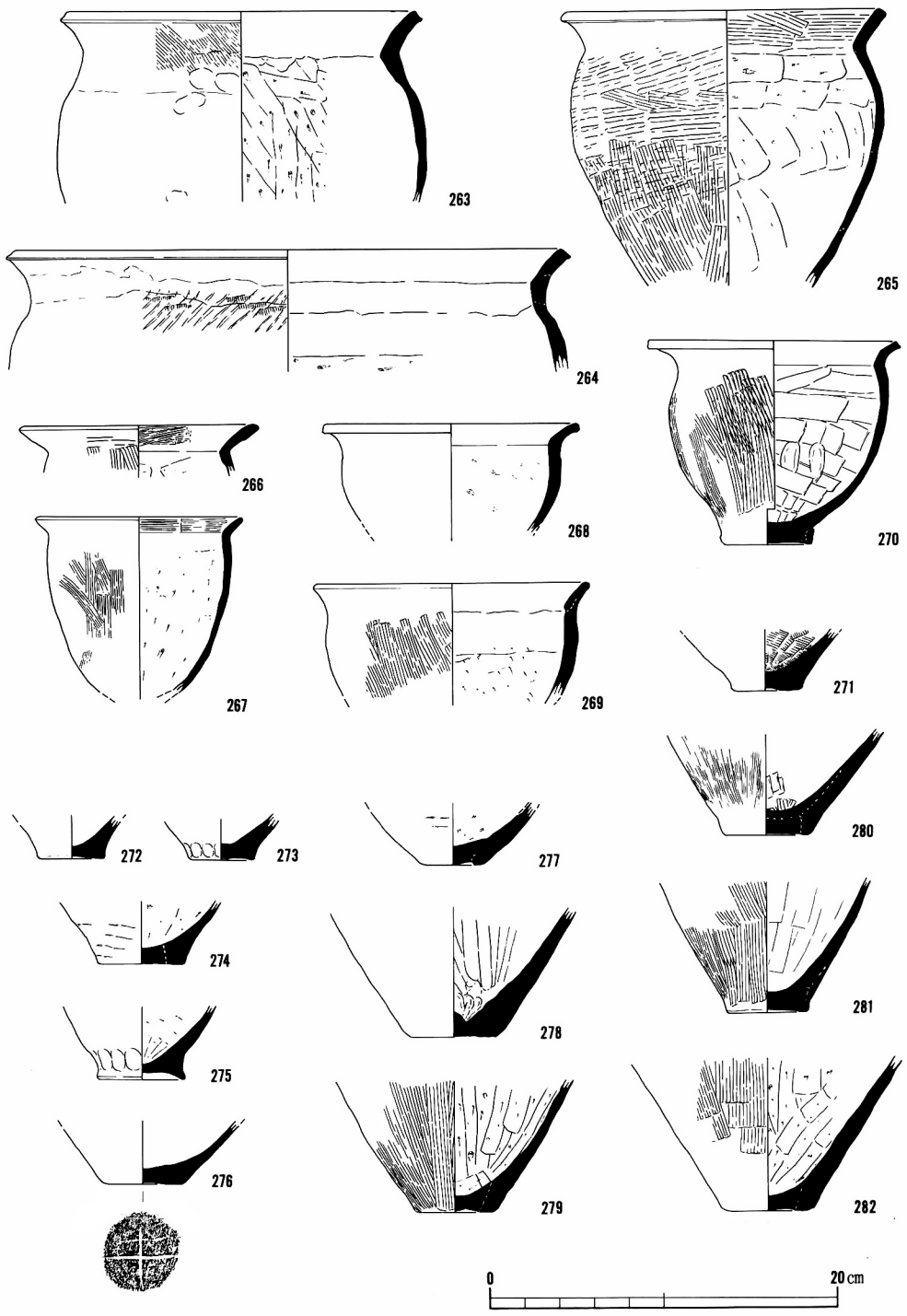
第80图 土壤22出土遺物(8)



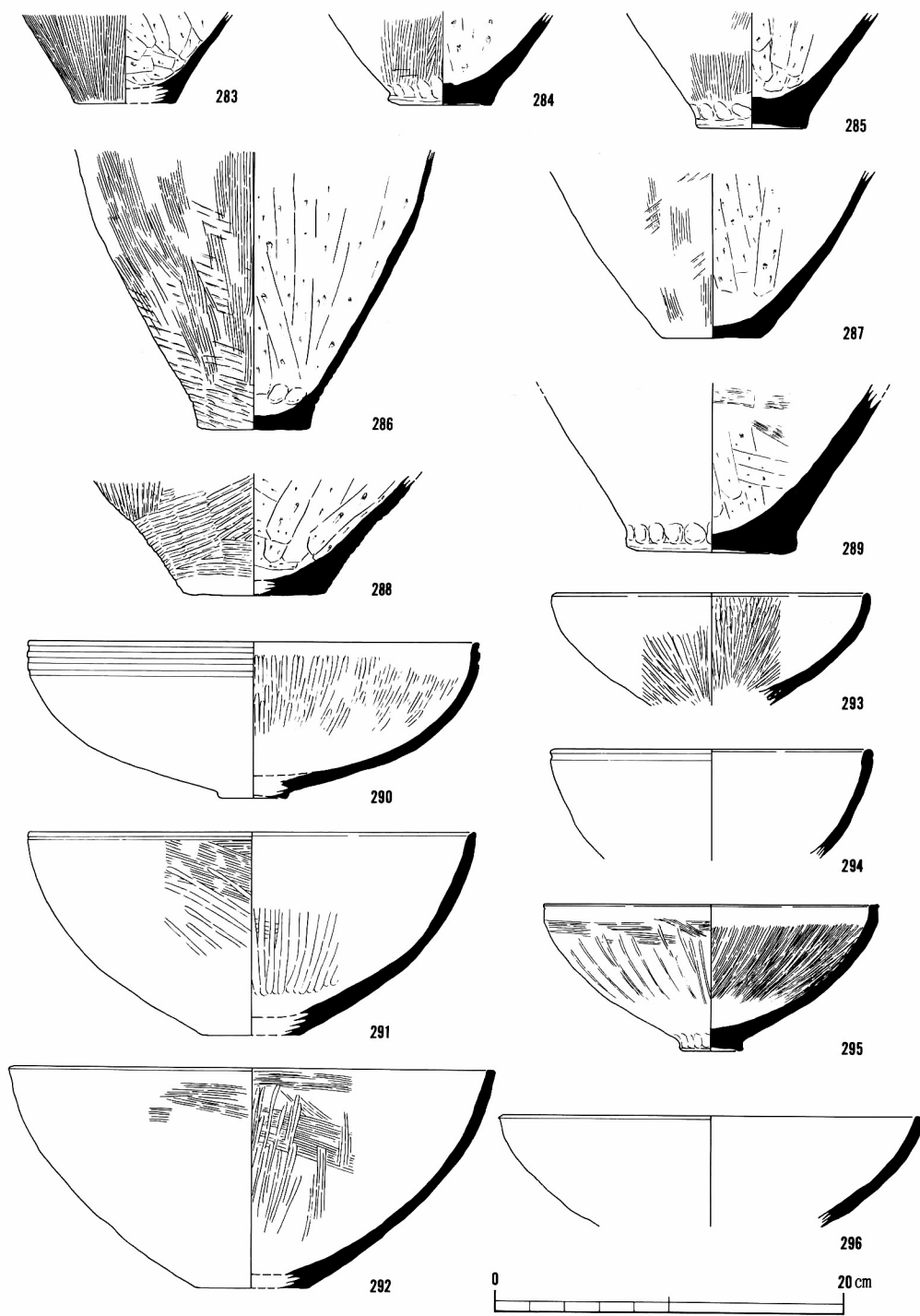
第81図 土壙22出土遺物(9)



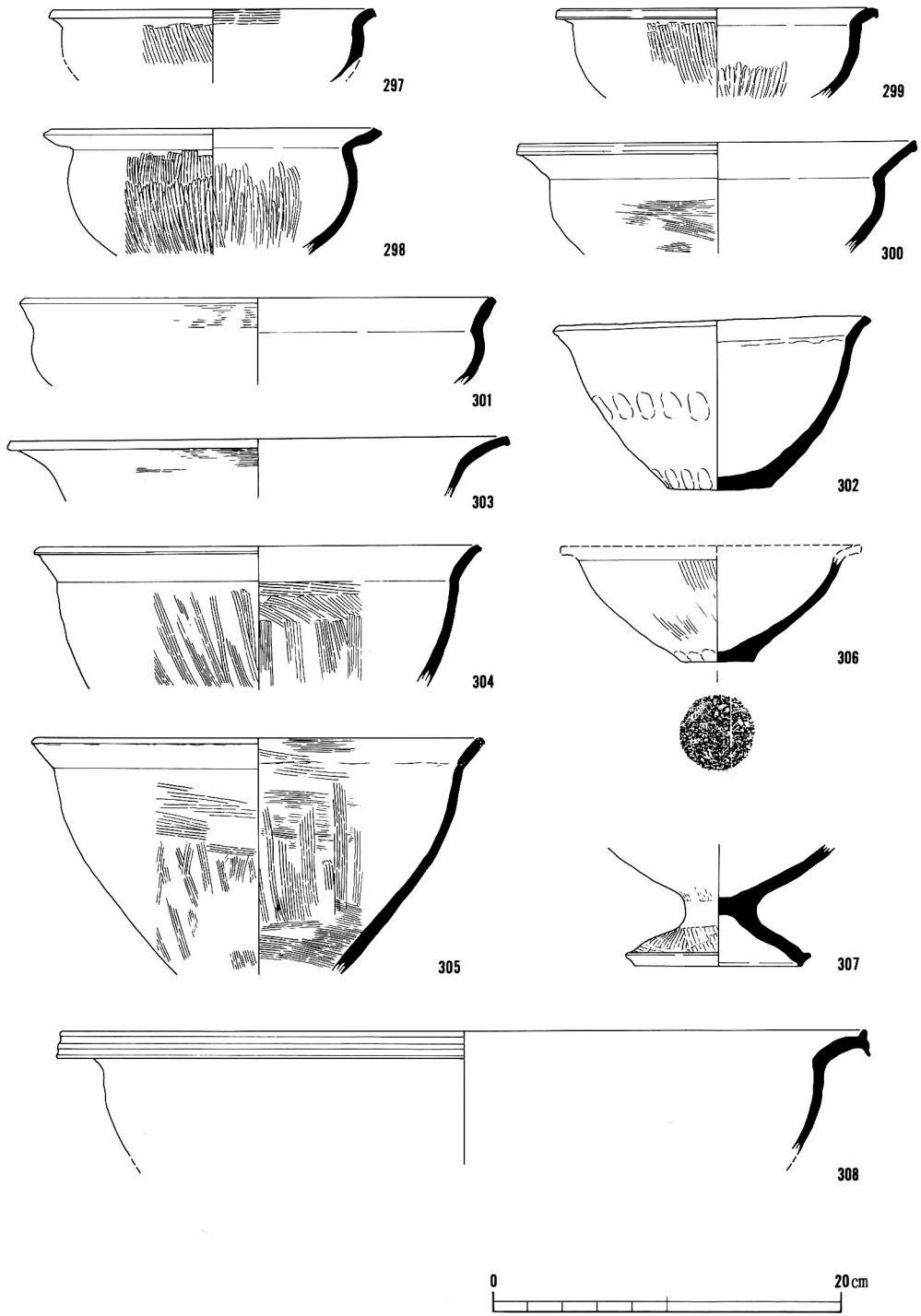
第82図 土坑22出土遺物(10)



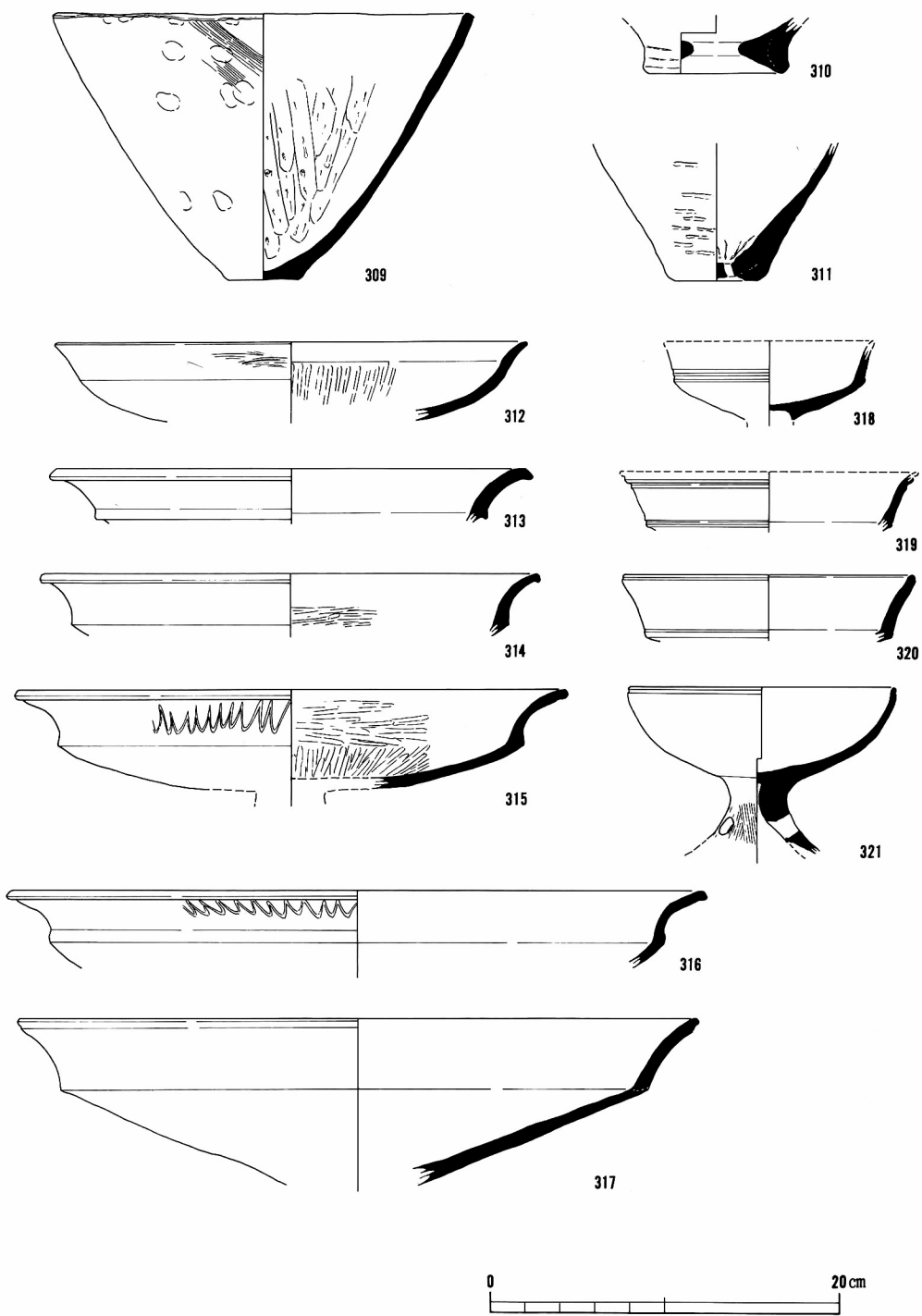
第83图 土壤22出土遺物 (11)



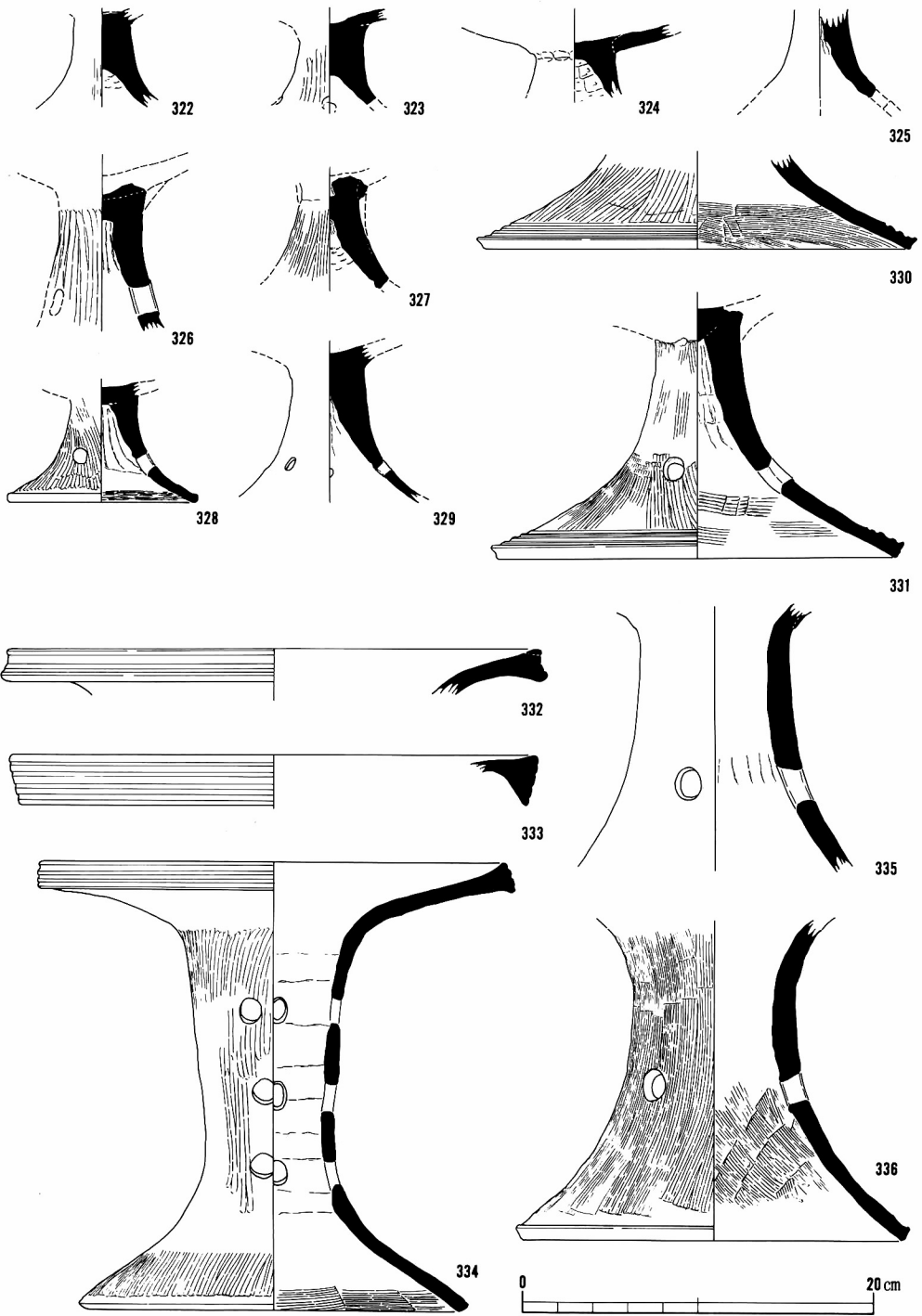
第84図 土壙22出土遺物(12)



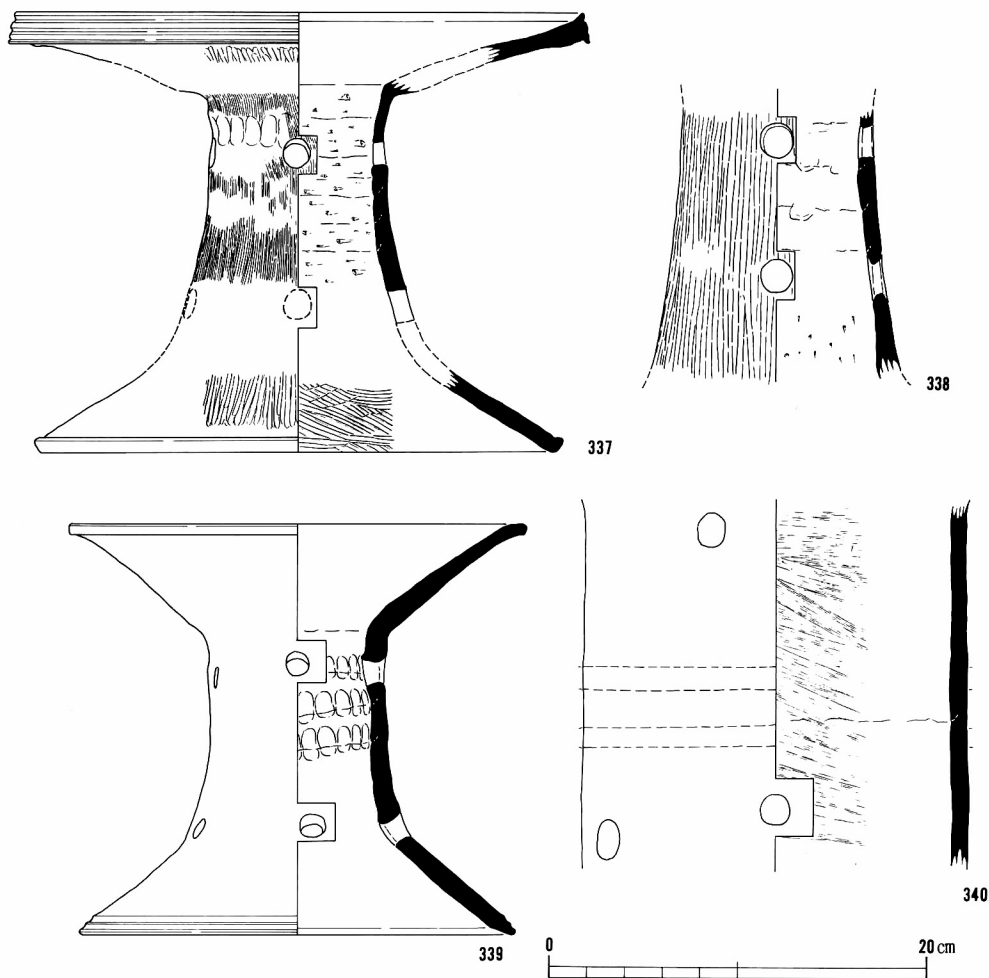
第85図 土壙22出土遺物 (13)



第86図 土庫22出土遺物 (14)



第87图 土壤22出土遺物 (15)



第88図 土壌22出土遺物 (16)

広口壺Cは口唇部に端面をもつが、端面に凹線をもつものともたないものに分かれる。前者は163・164・165の3点であり、後者に比べて口縁部が強く外反する。いずれも凹線は2条である。凹線をもつもののうち、163は口縁部の外反が強い点、頸部外面がハケメ仕上げである点において、外面をヘラミガキする164・165と異なる。また、164・165は後述する167とともに、口縁部に赤色顔料が残存する。これに対して、166・168は広口壺Cのなかでも装飾性に乏しい土器である。頸部内外面にはユビオサエがみられ、168の体部には外面にハケメ、内面上半にユビオサエ、内面下半に縦方向のヘラケズリが認められる。

167は口唇部に粘土を加えることにより、上下に拡張した端面を形成する広口壺Dである。端面に3条の凹線を巡らす。外面の調整は頸部・肩部ともにヘラミガキである。凹線内に赤色顔料が部分的に残存している。内面は肩部にユビオサエ、頸部以上にナデが観察される。171・172

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
152	壺	(16.4)	(14.9)	(19.4)	—	—	口縁、体部1/3	2.5Y8/3	淡黄	10YR7/4	にふい黄
153	壺	—	—	—	(2.8)	—	体部1/2、底部1/4	10YR4/1	褐灰	10YR7/2	にふい黄橙
154	壺	—	(9.5)	(16.0)	3.3	—	体部1/4	10YR7/3	にふい黄	10YR7/3	にふい黄
155	壺	—	—	—	4.4	—	体部1/2	10YR7/4	にふい黄	10YR8/3	浅黄橙
156	壺	—	—	(11.8)	5.3	—	体部1/2	5Y7/1	灰白	10YR8/2	灰白
157	壺	—	—	19.1	(5.8)	—	体部完形、底部1/2	2.5Y8/2	灰白	2.5Y3/1	黒
158	壺	—	—	(14.5)	4.8	—	体部1/6、底部完形	7.5YR7/4	にふい橙	7.5YR7/4	にふい橙
159	壺	—	—	—	(4.6)	—	体部完形、底部1/2	5YR8/4	淡橙	5YR7/4	にふい橙
160	壺	—	—	15.6	4.8	—	体部1/3、底部完形	2.5Y7/3	浅黄	7.5YR7/6	橙
161	壺	—	—	—	5.0	—	体部1/2	10YR5/1	褐灰	10YR8/2	灰白
162	壺	—	—	—	(5.0)	—	体部1/4、底部1/2	2.5Y3/1	黒	5YR7/5	にふい橙
163	壺	(12.4)	(8.2)	—	—	—	口縁1/4	10YR8/1	灰白	10YR6/3	にふい橙
164	壺	(17.8)	(14.1)	—	—	—	口縁1/2	5YR6/6	にふい橙	2.5YR7/4	淡赤橙
165	壺	(17.8)	(13.2)	—	—	—	口縁1/3	7.5YR8/4	浅黄橙	5YR8/4	淡橙
166	壺	(13.5)	(12.5)	—	—	—	口縁1/4	10YR7/2	にふい黄橙	10YR8/3	浅黄橙
167	壺	(16.4)	(13.4)	—	—	—	口縁1/3	2.5Y8/3	淡黄	2.5Y8/3	淡黄
168	壺	9.5	8.8	20.0	—	—	口縁3/4、体部完形	2.5Y7/1	灰白	2.5Y8/3	淡黄
169	壺	12.0	8.8	—	—	—	口縁ほぼ完形	2.5Y8/3	淡黄	2.5Y8/3	淡黄
170	壺	11.3	8.3	—	—	—	口縁ほぼ完形	10YR7/2	にふい黄橙	10YR7/3	にふい黄
171	壺	(26.6)	(16.4)	—	—	—	口頸部1/2	2.5Y8/2	灰白	2.5Y5/1	黄灰
172	壺	—	(18.0)	—	5.8	—	頸部1/2、体部1/4	5YR7/6	橙	5YR7/6	橙
173	壺	(3.9)	—	—	2.6	3.2	ほぼ完形	7.5YR6/4	にふい橙	10YR6/2	灰黄褐
174	壺	3.7	—	4.3	2.4	5.4	完形	10YR8/2	灰白	5Y8/2	灰白
175	壺	—	—	—	3.8	—	底部完形	2.5Y8/3	淡黄	2.5Y8/3	淡黄
176	壺	(11.8)	(8.3)	—	—	—	体部上半ほぼ完形	10YR7/2	にふい黄橙	10YR8/4	浅黄橙
177	壺	10.7	9.2	17.1	4.5	23.5	ほぼ完形	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙
178	壺	—	9.4	(18.1)	—	—	体部下半2/3	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/3	にふい橙
179	壺	10.6	9.6	18.8	(3.2)	27.3	口縁2/3、体部2/3	5YR8/2	灰白	7.5YR7/3	にふい橙
180	壺	(10.7)	8.6	—	—	—	口縁端部欠く	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	灰白
181	壺	(11.2)	9.9	—	—	—	口頸部1/4、体部1/2	7.5YR7/4	にふい橙	7.5YR7/6	橙
182	壺	(9.2)	7.2	—	—	—	口縁1/2	7.5YR7/4	にふい橙	7.5YR7/4	にふい橙
183	壺	—	(10.7)	—	—	—	口縁1/2	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	灰白
184	壺	—	(15.4)	(20.3)	—	—	1/2	10YR4/1	褐灰	7.5YR6/4	にふい橙

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
185	壺	(11.6)	(10.3)	16.1	—	—	端部欠く、口頸部1/2	5YR7/6	橙	2.5Y8/2	灰白
186	壺	11.0	10.2	17.2	5.1	30.0	完形	5YR6/6	橙	5YR7/6	橙
187	壺	—	—	—	—	—	1/2	5YR7/6	橙	5YR7/6	橙
188	壺	—	—	—	—	—	口頸部、体部欠く	5YR7/6	橙	2.5Y2/1	黒
189	壺	—	—	(17.9)	—	—	体部1/2	10YR8/2	灰白	10YR7/1	灰白
190	壺	(39.8)	—	—	—	—	口縁部1/5	7.5YR4/2	灰褐	7.5YR4/2	灰褐
191	壺	(35.5)	—	—	—	—	口縁部1/3	10YR5/6	黄褐	10YR4/6	褐
192	壺	(15.8)	(12.6)	(30.4)	(4.9)	(36.4)	口縁部1/6、体部完形	7.5YR5/6	明褐	7.5YR5/4	褐
193	壺	(12.0)	(8.1)	—	—	—	口頸部1/4	2.5Y8/3	淡黄	5YR8/4	淡橙
194	壺	(11.7)	(6.8)	—	—	—	口頸部1/4	2.5Y8/2	灰白	10YR8/2	灰白
195	壺	(9.7)	(8.6)	—	—	—	口頸部1/2	5YR7/6	橙	7.5YR8/3	浅黄橙
196	壺	10.2	8.2	—	—	—	体部1/2	5YR6/6	橙	5YR7/4	にぶい橙
197	壺	(10.3)	(9.8)	18.7	(4.5)	23.6	1/2	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	灰白
198	壺	—	(5.1)	—	—	—	端部欠く、口頸部1/4	2.5Y8/3	淡黄	2.5Y8/2	灰白
199	壺	—	—	—	—	—	肩部小片	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/2	灰黄褐
200	壺	(11.0)	(11.0)	—	—	—	端部欠く、1/8	5YR8/2	灰白	7.5YR8/3	浅黄橙
201	壺	—	—	—	3.3	—	底部完形	2.5Y8/2	灰白	10YR8/3	浅黄橙
202	壺	—	—	—	4.4	—	底部完形	10YR2/2	黒褐	2.5Y5/1	黄灰
203	壺	—	—	—	4.8	—	底部完形	10YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙
204	壺	—	—	—	15.6	—	底部完形	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y7/2	灰黄
205	壺	—	—	—	3.4	—	底部3/4	2.5YR4/1	黄灰	2.5Y5/2	暗灰黄
206	壺	—	—	—	(5.0)	—	底部1/4	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR5/1	褐灰
207	壺	—	—	—	3.8	—	底部完形	5YR7/4	にぶい橙	5YR7/6	橙
208	壺	—	—	—	(5.9)	—	底部2/3	2.5Y5/1	黄灰	7.5Y4/1	灰
209	壺	—	—	—	4.2	—	底部完形	7.5YR7/4	にぶい橙	2.5Y7/2	灰黄
210	壺	—	—	—	5.7	—	底部完形	7.5YR7/2	明褐灰	10YR4/1	褐灰
211	壺	—	—	—	5.0	—	底部完形	7.5YR8/6	浅黄橙	7.5YR8/6	浅黄橙
212	壺	—	—	—	(3.6)	—	底部1/2	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR4/1	褐灰
213	壺	—	—	—	3.3	—	底部完形	7.5YR7/2	明褐灰	7.5YR7/4	にぶい橙
214	壺	—	—	—	6.0	—	底部完形	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙
215	壺	—	—	—	4.8	—	底部完形	2.5Y8/3	淡黄	2.5YR6/8	橙
216	壺	—	—	—	(9.8)	—	底部1/5	10YR6/3	にぶい黄褐	10YR5/2	灰黄褐
217	壺	—	—	—	6.1	—	底部完形	2.5YR7/4	淡赤橙	2.5YR5/1	赤灰

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
218	壺	—	—	—	4.8	—	底部完形	10YR4/1	褐灰	2.5YR6/6	橙
219	壺	—	—	—	6.2	—	底部ほぼ完形	10YR7/3	にふい黄橙	7.5YR6/6	橙
220	壺	—	—	—	(4.0)	—	底部1/2	2.5Y6/1	黄灰	10YR5/2	灰黄褐
221	壺	—	—	—	6.1	—	底部完形	2.5Y8/2	灰白	2.5YR7/4	淡赤橙
222	壺	—	—	—	(4.4)	—	底部1/2	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y5/1	黄灰
223	壺	—	—	—	(5.2)	—	底部2/3	10YR7/3	にふい黄橙	2.5YR7/4	淡赤橙
224	甕	(9.6)	(8.8)	11.7	—	—	口縁部完形	10YR8/2	灰白	10YR8/2	灰白
225	甕	13.4	11.5	—	—	—	口縁部完形、肩部2/3	2.5Y8/3	淡黄	10YR8/3	浅黄橙
226	甕	(12.8)	(10.9)	—	—	—	口縁部1/4	5YR7/6	橙	5YR7/6	橙
227	甕	13.0	10.6	15.9	5.7	19.9	体部1/2	10YR6/1	褐灰	10YR7/2	にふい黄
228	甕	12.9	11.2	(14.4)	4.4	18.7	口縁・体部1/2	5YR7/4	にふい橙	5YR7/4	にふい橙
229	甕	13.9	12.6	(15.6)	—	—	口縁・体部3/4	10YR7/2	にふい黄	10YR7/2	にふい黄
230	甕	14.5	12.3	—	—	—	口縁・体部3/4	10YR8/2	灰白	10YR7/3	にふい黄
231	甕	14.1	11.7	16.7	5.7	22.4	体部・底部1/2	10YR8/2	灰白	10YR8/1	灰白
232	甕	(15.1)	(12.7)	(17.6)	5.3	22.3	口縁・体部1/2	7.5YR7/3	にふい橙	7.5YR7/3	にふい橙
233	甕	(16.1)	(13.7)	(17.0)	—	—	口縁3/4、体部1/2	2.5Y7/3	灰黄	2.5Y7/3	灰黄
234	甕	(15.3)	(12.1)	(17.5)	—	—	1/2	10YR7/2	にふい黄	2.5Y7/2	灰黄
235	甕	(14.0)	(11.4)	—	—	—	1/8	2.5Y7/3	灰黄	7.5YR8/3	浅黄橙
236	甕	(14.4)	(12.2)	—	—	—	1/2	10YR7/3	にふい黄	7.5YR7/4	にふい橙
237	甕	(16.0)	(13.2)	(20.8)	(5.4)	25.1	1/2	2.5Y5/2	暗灰黄	2.5Y8/3	淡黄
238	甕	(15.1)	(11.7)	(19.4)	4.8	25.2	体部1/4、底部完形	7.5YR7/4	にふい橙	10YR6/3	にふい黄
239	甕	(16.7)	(13.8)	(20.8)	—	—	体部1/3	5YR5/4	にふい赤褐	5YR5/4	にふい赤褐
240	甕	(16.2)	(14.0)	15.6	4.8	—	1/4	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙
241	甕	(15.9)	(13.2)	(19.8)	(5.9)	(26.2)	底部1/2、口縁部1/8	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙
242	甕	(16.3)	(13.6)	(19.7)	—	—	体部1/2、底部欠く	10YR7/3	にふい黄橙	10YR4/2	灰黄褐
243	甕	16.8	14.2	20.7	5.0	24.8	ほぼ完形	2.5Y8/2	灰白	5YR7/6	橙
244	甕	(17.8)	(14.6)	(21.8)	5.3	(24.8)	1/2	7.5YR3/1	黒褐	7.5YR7/3	にふい橙
245	甕	(17.4)	(15.4)	—	—	—	口縁1/4	7.5YR7/6	橙	10YR8/4	浅黄橙
246	甕	(17.9)	(15.8)	—	—	—	口縁1/4	7.5YR7/6	橙	7.5YR8/3	浅黄橙
247	甕	(15.2)	(14.1)	—	—	—	口縁1/2	5YR7/6	橙	2.5Y8/2	灰白
248	甕	(14.4)	(11.3)	—	—	—	口縁1/4	5YR6/8	橙	5YR8/3	淡橙
249	甕	(17.5)	(15.0)	—	—	—	口縁1/4	5YR7/4	にふい橙	5YR7/4	にふい橙
250	甕	(15.7)	(13.5)	—	—	—	1/8	5YR8/3	淡橙	7.5YR3/1	黒褐

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
251	甕	(18.6)	(16.5)	—	—	—	1/8	5YR8/4	淡橙	5YR8/4	淡橙
252	甕	—	(11.0)	(14.0)	—	—	1/4	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	灰白
253	甕	13.5	11.2	16.8	—	—	体部下半欠く	2.5Y3/2	黒褐	2.5YR7/8	橙
254	甕	(13.8)	(12.0)	—	—	—	1/4	10YR8/2	灰白	5Y8/2	灰白
255	甕	(15.2)	(12.8)	(15.5)	—	—	1/4	2.5Y8/3	淡黄	2.5Y8/3	淡黄
256	甕	(14.6)	(13.2)	—	—	—	1/2	10YR3/1	黒褐	10YR7/2	にふい橙
257	甕	(15.1)	(12.2)	—	—	—	1/4	2.5Y8/2	灰白	10YR7/3	にふい橙
258	甕	(15.3)	(13.0)	—	—	—	1/4	2.5Y6/1	黄灰	10YR8/2	灰白
259	甕	(13.6)	(12.2)	—	—	—	1/2	10YR7/2	にふい橙	10YR8/3	浅黄橙
260	甕	(16.9)	(14.1)	—	—	—	1/2	10R6/6	赤橙	10R6/6	赤橙
261	甕	13.6	12.0	14.1	3.8	16.4	完形	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y4/2	暗灰黄
262	甕	18.2	16.8	17.4	4.1	16.1	完形	10YR7/3	にふい黄橙	10YR5/8	赤
263	甕	(20.0)	(18.2)	(21.4)	—	—	口縁1/2	7.5Y7/6	橙	2.5Y7/6	灰橙
264	甕	(31.7)	(29.8)	—	—	—	1/8	10YR7/1	灰白	10YR7/2	にふい黄
265	甕	(18.5)	(16.0)	18.0	—	—	底部欠く	10YR5/2	灰黄褐	2.5YR5/6	明赤褐
266	甕	(13.2)	(10.4)	—	—	—	1/4	10YR4/1	褐灰	10YR4/1	褐灰
267	甕	(11.7)	(10.6)	(10.7)	—	—	1/2	10YR7/4	にふい黄橙	10YR8/3	浅黄橙
268	甕	(14.5)	(12.6)	(12.6)	—	—	1/4	2.5Y8/3	淡黄	2.5Y8/3	淡黄
269	甕	(15.6)	(14.4)	(14.6)	—	—	1/2	2.5Y8/1	灰白	10YR8/3	浅黄橙
270	甕	(14.0)	11.8	12.5	4.9	11.7	口縁3/4	10YR3/1	黒褐	10YR7/4	にふい黄
271	甕	—	—	—	4.0	—	底部完形	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/2	灰白
272	甕	—	—	—	3.6	—	底部完形	10YR7/2	にふい黄	10YR8/3	浅黄橙
273	甕	—	—	—	3.8	—	底部完形	10YR7/3	にふい黄橙	10YR7/4	にふい黄
274	甕	—	—	—	(5.0)	—	1/3	5YR5/1	褐灰	5YR5/1	褐灰
275	甕	—	—	—	5.0	—	底部完形	7.5YR7/6	橙	5YR6/8	橙
276	甕	—	—	—	4.5	—	底部完形	7.5Y8/1	灰	2.5Y8/4	淡黄
277	甕	—	—	—	(3.2)	—	1/4	7.5YR6/3	にふい褐	10YR6/6	赤褐
278	甕	—	—	—	(4.9)	—	1/2	10YR2/2	黒褐	2.5Y8/3	淡黄
279	甕	—	—	—	4.4	—	底部完形	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y4/1	黄灰
280	甕	—	—	—	4.6	—	底部完形	10YR6/3	にふい黄橙	10YR6/4	にふい黄
281	甕	—	—	—	4.4	—	底部完形	10YR2/2	黒褐	2.5YR5/3	赤褐
282	甕	—	—	—	(4.8)	—	底部1/4	5YR6/2	灰褐	5YR7/4	にふい橙
283	甕	—	—	—	(5.7)	—	底部1/2	10YR7/3	にふい黄橙	7.5YR7/3	にふい橙

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調	
		A	B	C	D	E		内 面	外 面
284	甕	—	—	—	5.9	—	底部完形	7.5Y8/1 灰白	2.5YR7/4 淡黄橙
285	甕	—	—	—	(6.0)	—	底部1/2	2.5Y8/3 淡黄	5YR7/4 にふい橙
286	甕	—	—	—	(6.6)	—	底部2/3	10YR2/2 黒褐	5YR6/6 橙
287	甕	—	—	—	(5.4)	—	底部1/4	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄
288	甕	—	—	—	(8.2)	—	底部1/2	105YR7/3にふい黄橙	7.5YR5/6 明褐
289	甕	—	—	—	9.8	—	底部完形	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙
290	鉢	(26.0)	—	—	(3.9)	(8.9)	1/2	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙
291	鉢	(25.4)	—	—	(5.7)	(11.5)	1/4	10YR5/2 灰黄褐	2.5YR6/4 にふい橙
292	鉢	(28.0)	—	—	(6.2)	(12.5)	1/4	2.5YR7/8 橙	7.5R5/3 にふい赤
293	鉢	(17.8)	—	—	—	—	1/8	7.5YR5/1 褐灰	10YR6/1 褐灰
294	鉢	(16.0)	—	—	—	—	1/8	7.5YR5/4 にふい橙	7.5YR7/6 橙
295	鉢	(19.0)	—	—	(3.0)	8.3	1/2	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙
296	鉢	(23.8)	—	—	—	—	1/8	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/3 浅黄
297	鉢	(18.3)	(17.1)	(17.3)	—	—	1/3	10YR4/1 褐灰	10YR5/1 褐灰
298	鉢	(18.4)	(15.9)	(15.6)	—	—	1/3	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/4 にふい橙
299	鉢	(18.3)	(16.5)	—	—	—	1/4	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰
300	鉢	(22.8)	(19.4)	—	—	—	1/4	2.5YR6/6 橙	10YR5/6 赤
301	鉢	(26.8)	(25.2)	(26.0)	—	—	1/4	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙
302	鉢	(15.8)	(16.0)	—	5.7	9.8	口縁部2/3、底部完形	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙
303	鉢	(32.4)	(23.4)	—	—	—	1/4	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/3 にふい橙
304	鉢	(25.0)	(23.0)	—	—	—	1/2	10YR8/4 浅黄橙	2.5Y8/3 淡橙
305	鉢	(25.6)	(23.5)	(22.8)	—	—	1/4	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/2 にふい橙
306	鉢	—	—	—	4.2	—	底部完形	7.5YR7/4 にふい橙	7.5YR7/4 にふい橙
307	鉢	—	—	—	9.6	—	脚部完形	7.5YR7/4 にふい橙	7.5YR7/4 にふい橙
308	鉢	(45.8)	(41.2)	—	—	—	1/2	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白
309	鉢	(23.5)	—	—	(4.0)	(15.0)	口縁部1/7	10YR7/4 にふい黄橙	7.5YR7/4 にふい橙
310	鉢	—	—	—	(7.7)	—	1/2	10YR6/3 にふい黄橙	10R6/6 赤橙
311	鉢	—	—	—	(4.6)	—	1/2	10Y5/1 灰	10YR8/3 浅黄橙
312	高坏	(26.8)	(24.4)	—	—	—	1/2	2.5Y8/3 淡黄	10YR8/4 浅黄橙
313	高坏	(26.9)	(22.5)	—	—	—	坏部1/2	7.5YR7/4 にふい橙	10YR8/2 灰白
314	高坏	(28.0)	(25.0)	—	—	—	坏部1/8	5YR6/3 にふい橙	5YR4/1 褐灰
315	高坏	(31.6)	(26.9)	—	—	—	坏部1/4	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y7/1 灰白
316	高坏	(39.2)	(35.2)	—	—	—	坏部1/8	7.5YR6/6 橙	7.5YR8/3 浅黄橙

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調	
		A	B	C	D	E		内 面	外 面
317	高坏	(38.6)	(33.5)	—	—	—	坏部1/2	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白
318	高坏	—	(11.0)	—	—	—	坏部1/2、口縁欠く	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙
319	高坏	—	(14.0)	—	—	—	1/8	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄
320	高坏	(16.4)	(14.0)	—	—	—	1/4	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙
321	高坏	(15.2)	—	3.2	—	—	坏部1/2、脚部1/2	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙
322	高坏	—	—	3.2	—	—	柱状部のみ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐
323	高坏	—	—	3.6	—	—	柱状部のみ	2.5YR7/8 橙	2.5YR7/8 橙
324	高坏	—	—	4.5	—	—	柱状部のみ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい橙
325	高坏	—	—	3.1	—	—	柱状部1/2	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい橙
326	高坏	—	—	4.7	—	—	柱状部のみ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄
327	高坏	—	—	3.8	—	—	柱状部のみ	7.5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙
328	高坏	—	—	3.8	10.5	—	柱状部完形	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白
329	高坏	—	—	4.1	—	—	柱状部のみ	10YR8/1 灰白	10YR6/3 にぶい橙
330	高坏	—	—	—	24.0	—	1/2	10YR8/2 灰白	5YR8/4 淡橙
331	高坏	—	—	4.7	22.5	—	脚部のみ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙
332	器台	(30.0)	—	—	—	—	口縁1/4	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙
333	器台	(29.7)	—	—	—	—	口縁1/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白
334	器台	(26.1)	—	(7.2)	(21.0)	25.3	1/2	5YR7/6 橙	7.5YR8/3 淡黄
335	器台	—	—	8.5	—	—	筒部ほぼ完形	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙
336	器台	—	—	9.1	(21.4)	—	脚部1/2	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白
337	器台	(29.9)	—	9.5	(27.2)	(23.4)	1/2	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄
338	器台	—	—	(10.0)	—	—	筒部ほぼ完形	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄
339	器台	(23.7)	—	9.3	(22.5)	(21.4)	筒部ほぼ完形	5YR7/4 にぶい橙	2.5Y8/2 灰白
340	器台	—	—	(20.2)	—	—	筒部1/2	7.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白

も広口壺Dに分類される。171は、直立する頸部と水平方向に伸びる口縁部をもち、口唇部に粘土を加えることによって上下に拡張する端面を形成する。肩部と頸部の境には1条の突帯を巡らす。肩部内面にユビオサエがみられるほかは調整手法の観察が不可能である。172は、偏球形の体部と緩く外反する頸部をもつ。肩部と頸部の境に突帯を巡らす。外面の調整は頸部・肩部を縦方向のハケメ、体部下半はハケメののち縦方向のヘラミガキが認められる。内面は下半をヘラケズリ、上半をユビオサエののち逆時計回りにヘラケズリしている。

長頸壺Aは12点出土している。うち3点は肩部のみの破片であるが、竹管文を施していることから、ここに含めることとする。ほぼ直立する頸部に緩く外反する口縁部をもつものが多い。頸腹指数（頸部径／体部径×100）は、179が57.3、180が55.6、181が51.6、182が53.0、188が

65.0である。181は内傾する頸部をもつ。口唇部に面をもつものはない。成形の段階でタタキを行ったもの(186・191)がある。調整にヘラミガキを用いるものは顕著でなく、180の体部下半、186の頸部下半外面にみられる程度である。外面調整に縦方向のハケメを使うものが一般的で、体部上半に横方向のハケメを施すもの(179・180)は、口縁部外面にも横方向のハケメを施している。内面の調整は、体部下半をヘラケズリ、肩部にユビオサエ、頸部には縦方向のユビナデあるいはハケメを施す。口縁部外面にナデによる浅い凹線状のくぼみをもつもの(179)や、2条の沈線を巡らすものがある。180は、底部にハケメを施したあと、ヘラ状工具によるV字形の線刻を印し、190・191・192は肩部に竹管文を施している。

長頸壺Bには、187と189がある。189の頸腹指数は53.1である。調整は長頸壺Aと基本的に同じであるが、189は外面に縦方向のハケメを施したのちに、体部下半および頸部に縦方向のヘラミガキを行っている。189の底部には竹管文が1個印されている。

短頸壺Aには、195と197がある。197の体部外面の調整は縦方向のハケメである。内面には、肩部と体部の境に接合痕があり、体部の成形・ユビナデののち、肩部以上の粘土紐の巻き上げを行い、縦方向のユビナデを施したことが分かる。

短頸壺Bには193・194・196がある。194は口頸部が内湾しつつ外方に開くものである。

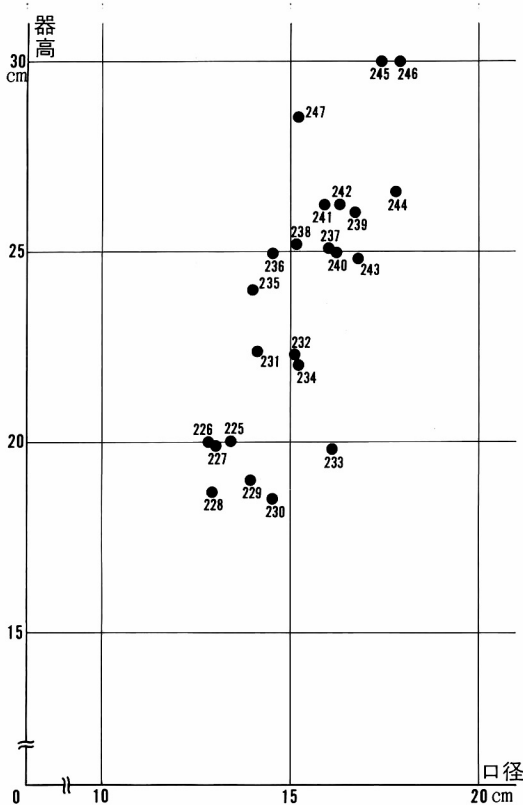
198は頸部と考えられる小片である。199は肩部の小片で、5本単位の波状文がみられる。

200は短頸直口壺に分類される。頸部外面のユビオサエ以外には調整は観察できない。

201～223は、体部の角度などから壺と判断した底部片である。突出した形態をもつもの、上げ底状を呈するものなどいくつかの形態がある。223は2個の竹管文を施文している。

224～253は甕A₁に分類されるものである。

甕A₁は、法量により、いくつかのタイプに分類が可能である。第89図に甕A₁の口縁部径と器高の関係を示した。器高により、①13cm・②19cm・③22cm・④26cm・⑤30cmを各々中心とするグルーピングができる。因みにそれぞれについて、残りのよいものの容量を計算すると次のようになる。②16.5ℓ(228)・③31.8ℓ(232)・④42.3ℓ(238)。形態をみれば、241・242は、体部最大径が肩部以下のやや下がった位置に求められ、その張り具合も比較的小さいものである。また、243・244は明瞭な口唇部の端面を形成しないことで他の土器と区別されるものである。251は口唇部下方に粘土紐を加えることにより、端面を形成するものである。岡山県南部地方で散見されるものに類似した形態である。口縁部の成形は叩き出し手法によるものが散見される(235・236・266)。体部外面の調整には、すべて縦方向のハケメが用いられる。体部内面については、口縁部と肩部の境あるいはそれよりやや下までヘラケズリが認められるが、243・244は、ヘラケズリが体部下半にとどまっている。243は肩部内面にユビオサエののちハケメが施され、244は粘土紐のユビナデ・ユビオサエを行うのみである。内面ヘラケズリの方向は下半部は上から下へ、肩部付近は逆時計回りのものが多い。口縁部はナデ仕上げのものが殆どであ



第89図 土壌22出土甕A₁の法量

るが、内面に横方向のハケメを施すものも存在する (230・231・232・234・236・244・249)。このタイプは比較的小形のものに多く、甕A₂・A₃にもあてはまるようである。甕A₂ (254~265)・甕A₃ (266~270) の出土量は少ない。成形・調整の手法は甕A₁と変わるところはないが、体部内面の調整にハケメを用いるものが存在する (259・262)。底部の破片のなかでも271・280・289には内面にハケメが認められる。

底部の成形にあたっては、都出のいう底部輪台技法により、上方から粘土塊を充填するもの、成形の際に底部外側に粘土紐を継ぎ足すものなどがみられる。

鉢には、鉢A (7点)・B (5点)・C (6点)・D (1点)・F (2点)・G (1点)がある。

鉢Aは、口縁部径により、①19cm程度 (293・294・295)・②24cm程度 (296)・③28cm程度 (290・291・292) に三分される。底部には、平底のもの (291・292)、やや突

出するもの (290・295) がみられる。口唇部に端面をもつものには292・295・296があり、面を形成しないものには口縁部直下に凹線をもつ例が多い (290・291・294)。内外面の調整は縦方向のヘラミガキあるいはハケメのちヘラミガキを施している。

鉢Bは、いずれも口唇部に端面を形成しており、298は口唇部を僅かに上方につまみ上げている。体部外面の調整はハケメを施すものが殆どであり、298・301には縦方向のヘラミガキが観察される。体部内面は縦方向のヘラミガキを行うものが多い。口縁部内面にハケメを施すもの (297)、口縁部外面をハケメで仕上げるもの (301) がある。

鉢Cは、口縁部径が25cm程度のものが多いが、小形のもの (302・306) もある。口唇部は端面を形成し、308は上下に拡張した端面に2条の凹線が巡る。内外面の調整はハケメ仕上げである。306には底部外面にヘラ状工具による線刻が1本認められる。

鉢Dは309の1点が出土しているのみである。口唇部には端面をもつ。体部外面には斜め方向のハケメが、体部内面には下から上方向にヘラケズリが施されている。

鉢Fは2点出土している。310・311は底部の遺存がよくないため、穿孔の個数・孔径については不明である。311には底部内面に絞り目がみられる。

307は鉢Gであり、体部および脚部外面にハケメを施す。

高坏には、高坏A(3点)・B(1点)・C(6点)がある。

高坏Aは、口縁部径が15cm前後のものに限られ、口縁部の上下端に1条あるいは2条の沈線が巡っている。

321は高坏Bに分類される。口唇部直下外面に1条の沈線が巡る。なだらかに広がる脚部を持ち、3箇所の子孔が穿たれている。坏部の容量は、約0.6ℓである。

高坏Cには、体部と口縁部の境があまり明瞭でないもの(312)、やや突出するもの(313・316)がある。口縁部の外傾指数は、312が89.1、313が81.1、314が87.5、315が84.1、316が88.0、317が86.0である。内面の調整は、体部が縦方向、口縁部が横方向のヘラミガキである。315・316の口縁部外面には、ヘラミガキを波状に連続して施している。坏部の法量は、312が1.8ℓ、315が2.7ℓ、317が5.7ℓである。

他に高坏の脚部片が出土しているが、坏部との対応関係は明らかでない。柱状部は中実・中空の二者がある。中空のものについては、内面をヘラケズリする324を除き、絞り目が残存している。柱状部から裾部にかけては、大きく屈曲するものはなく、なだらかに裾部へ移行する。裾部端には面をもつものが多く、330・331は裾部下端に4条の沈線を巡らしている。裾部の子孔は、323のみが4箇所の穿孔であるが、それ以外に確認できるものはすべて3箇所に穿孔を行うものである。外面の調整は縦方向のハケメおよびヘラミガキであり、裾部の内面には横方向のハケメを施している。

器台には、A(4点)・B(2点)の二者がある。

器台Aは1段に4箇所の子孔を穿つ。337・338はこの穿孔を2段にわたって行うが、器の高い334については、3段4孔になっている。器形、調整については差異がみられる。口唇部の形態については、拡張して端面に3条の凹線を巡らすもの(334・337)、丸くおさめるもの(339)がある。334は体部外面に縦方向のヘラミガキを、裾部外面には縦方向のハケメを施す。裾部内面は横方向のハケメ仕上げである。337は口縁部外面に縦方向のヘラミガキ、体部外面には縦方向のハケメ、裾部外面には縦方向のヘラミガキが施される。338は体部外面に縦方向のヘラミガキを施し、内面下半には縦方向のヘラケズリがみられる。339は裾部下端に2条の沈線を巡らし、体部内面にはユビオサエが残る。

器台Bは、4箇所の子孔を穿つ器台Aと異なり、1段に3箇所、円形の穿孔を行う。336の体部外面・裾部内面はハケメ仕上げである。口縁部の形態は不明である。

340も器台として扱う。体部には3箇所の子孔が残存するが、その配列は規則的でない。外面に突帯の剥離痕と思われる部分がある。内面はハケメ仕上げである。

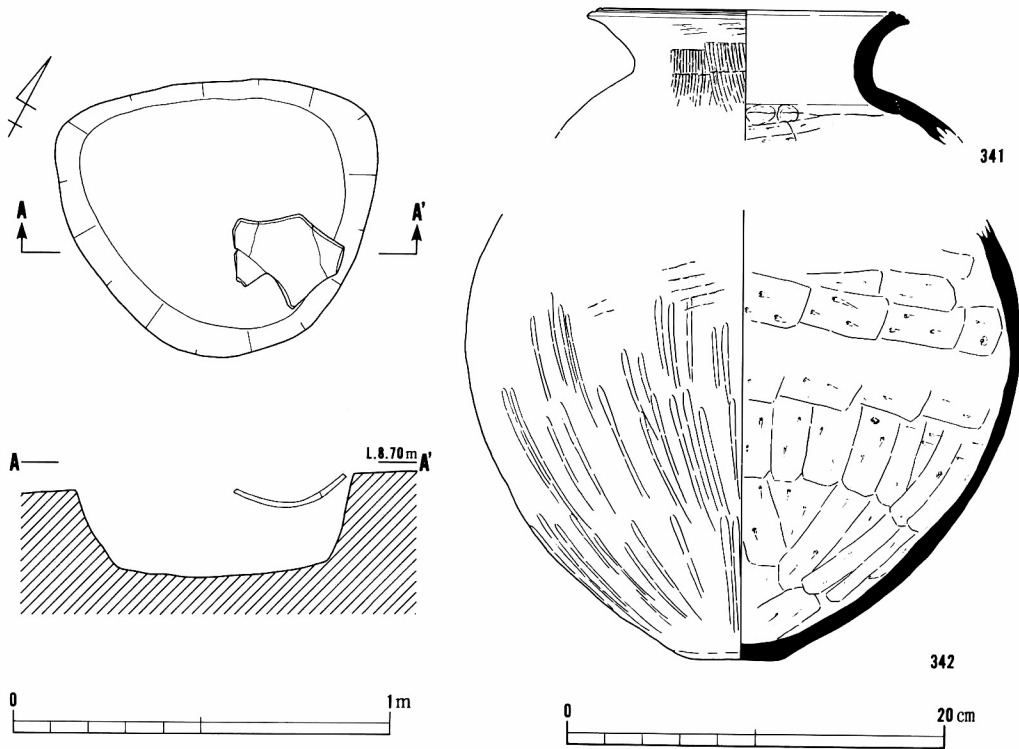
土壌23

IV区中央やや西寄りで検出された楕円形の土壌である。14層上面から切り込まれている。

規模は、長軸の長さ約85cm、短軸の長さ約75cmを測る。断面形は台形を呈し、検出面から壙底までの深さは25cm程度である。壙底は平坦であり、その規模は長軸の長さ約65cm、短軸の長さ約60cmである。壁面は約70°の角度をもつ。

埋土中より、壺が2個体出土している。

341は広口壺Aに分類される壺である。体部外面には、タタキののち頸部にかけて縦方向のハケメを施す。体部内面上半にはユビオサエのあと、逆時計回り横方向のヘラケズリを施す。口唇部に2条の凹線をめぐらす。342は、わずかな平底と球形の体部をもつ壺である。体部外面にはタタキのあと縦方向のヘラミガキを施し、内面は下半に縦方向、上半に逆時計回り横方向のヘラケズリを行っている。



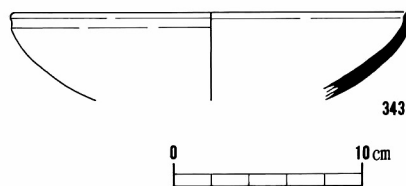
第90図 土壌23

第91図 土壌23出土遺物

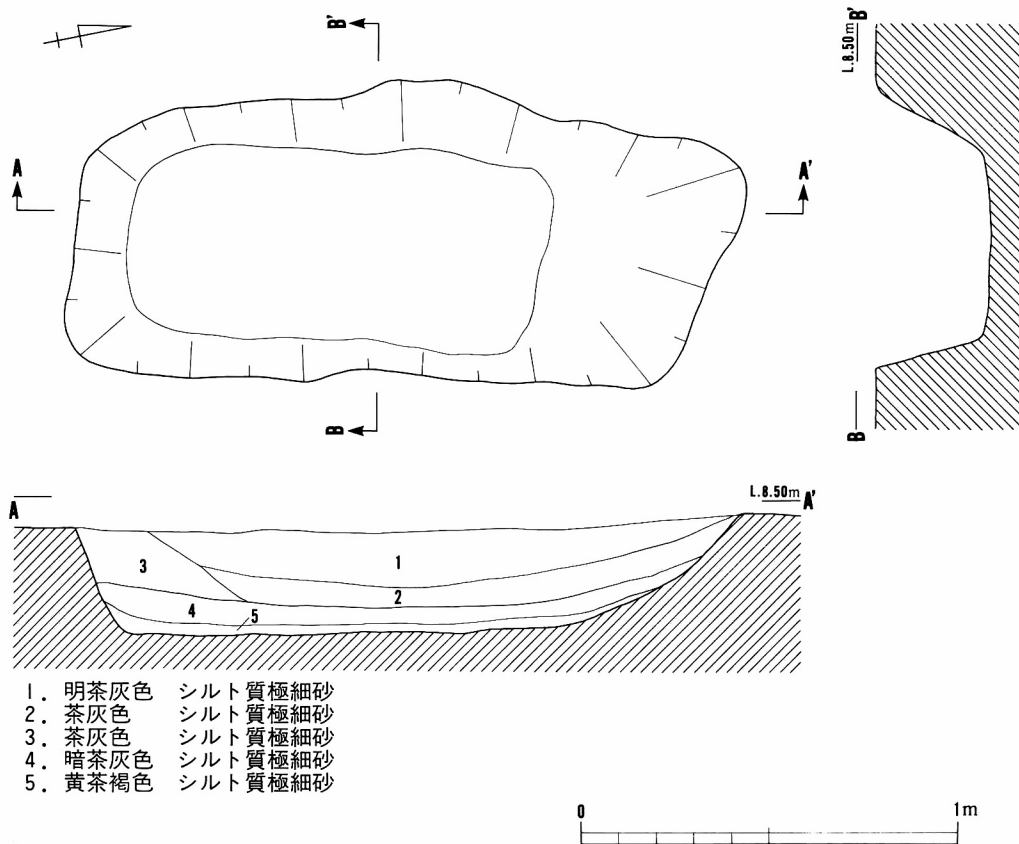
番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
341	壺	(15.2)	(12.5)	—	—	—	1/2	10YR7/4 にぶい黄橙		10YR8/3	浅黄橙
342	壺	—	—	(29.3)	(4.3)	—	1/4	7.5YR5/1	褐灰	7.5YR5/1	褐灰

土壌29

IV区の南端、17層上面で検出された長方形の土壌である。上面における長さ1.8m、幅0.7~0.8m、検出面からの深さは約25cmである。壁面の立ち上がりは約60°であるが、長軸方向の北壁のみが約40°と緩くなっている。墳底はほぼ平坦であり、平面形は長方形を呈し、長さ1.15m、幅48cmを測る。遺物量は少なく、図化できた土器は1点のみであった。343は、鉢Aあるいは高坏Bであり、口縁部直下には1条の凹線がめぐる。



第92図 土壌29出土遺物



第93図 土壌29

番号	器種	法量 (cm)					残存率	色調	
		A	B	C	D	E		内面	外面
343	鉢	(20.8)	—	—	—	—	1/4	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰

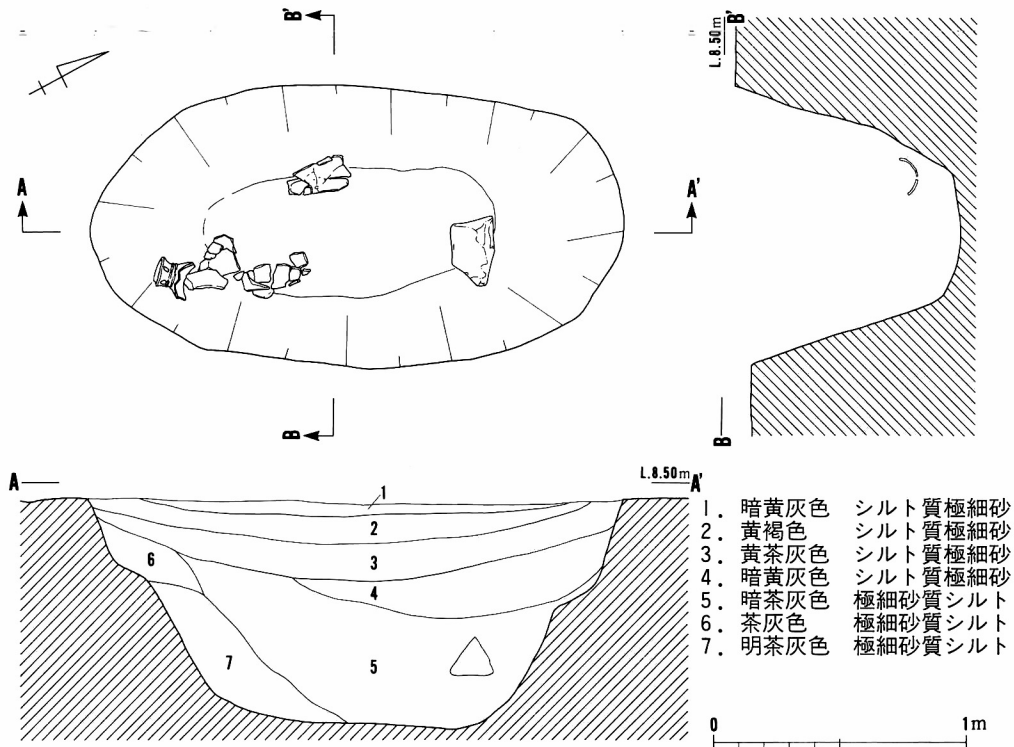
土壌30

IV区南端、17層上面で検出された長楕円形の土壌である。検出面における長軸の長さは2.15m、短軸の長さ1.10mを測る。検出面からの深さは約90cmである。壙底は比較的平坦であり、長軸の長さは約1.0m、短軸の長さは約50cmである。壁面の傾斜は約70°と急である。長軸方向の両肩に段がつくことが観察されるが、この段は部分的にしかみられず、また土層の堆積状況の観察からも、意識的な造作とは捉えず、崩壊によるものと判断した。

土層断面からは、まず壁面が崩落した後、徐々に埋積していった状況が判る。出土遺物は、中層以下の5・6・7層から出土しており、図化した土器がすべてである。甕、鉢、台付鉢がある。

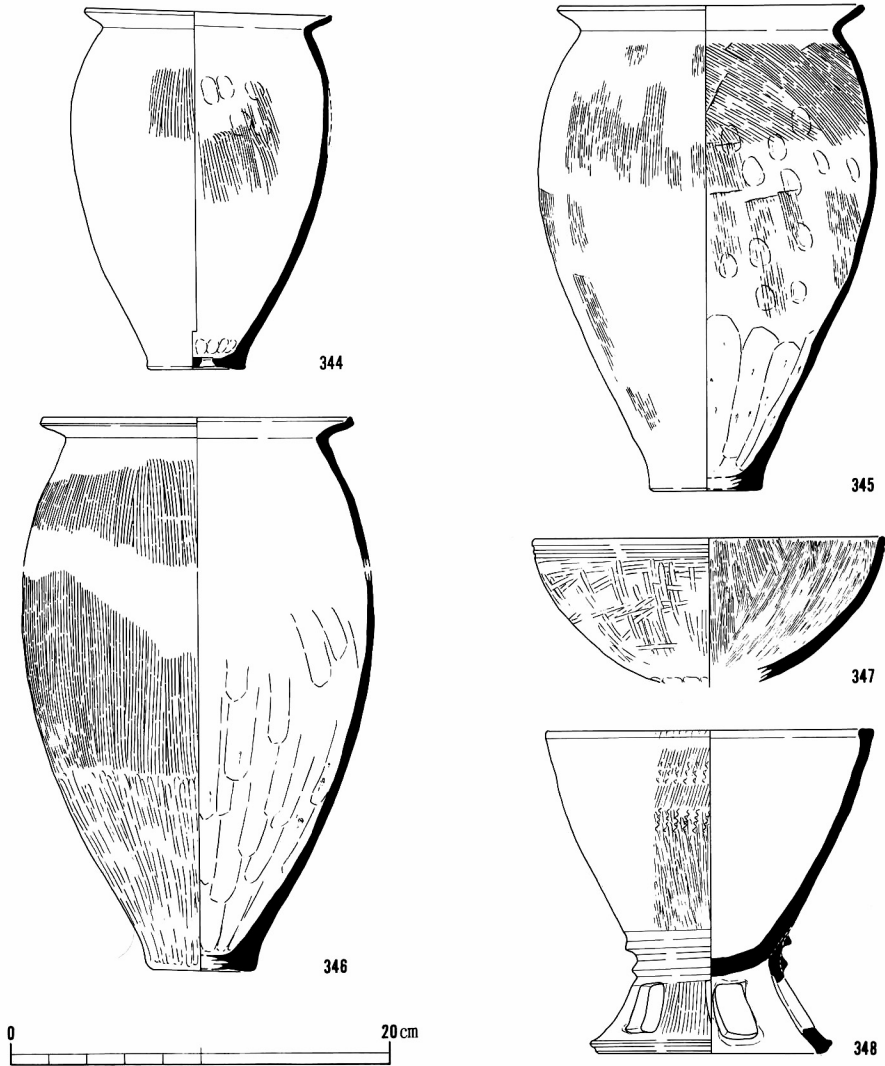
甕は、法量の異なる3種類のもので出土している。容量は344が27ℓ、345・346がそれぞれ49ℓ、60ℓである。甕のうち、344は底部に1孔を有するもので、345・346の両者は口唇部を上方向につまみあげている。外面の調整については、345・346には縦方向のハケののち、下半部にヘラミガキが施されている。内面は、345においては下半部をヘラで削ったあと、上半部にハケメを施している。346は全面にユビナデが顕著に残る。

347は鉢Aに分類される。口唇部直下に2条の凹線をめぐらす。内外面はともに丁寧なヘラミ



第94図 土壌30

ガキを施す。底部近くの外面にユビオサエの痕跡が残るため、底部は単純な平底ではなく、やや突出したものになろう。348は台付鉢である。播磨地方に特有な器形であるが、通常みられるものと若干様相を異にする。直線的にのびる体部は、口縁部で内側に屈曲せずに、水平な端面をもっておわる。脚台部に穿たれた孔は通常の三角形ではなく、方形を呈するもので、4方向に設けられている。体部と脚台部の接合部には2条の断面三角形の突帯を付加する。外面の調整はハケメを施した後、体部下半をヘラミガキしている。口唇部には刻目文が、体部上半には2段にわたる二枚貝の腹縁による施文がみられる。



第95図 土壙30出土遺物

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面	外 面		
344	甕	(13.0)	(11.1)	13.8	5.0	19.0	口縁1/6、体部完形	2.5Y2/1	黒	2.5Y7/3	淡赤橙
345	甕	15.9	13.7	18.0	6.0	25.5	ほぼ完形	2.5Y8/2	灰白	2.5Y6/2	灰黄
346	甕	16.1	13.8	18.5	5.8	29.0	口縁1/2、体部1/2	7.5YR2/1	黒	10YR5/2	灰黄褐
347	鉢	(18.4)	—	—	—	—	口縁1/2	2.5YR4/1	赤灰	5YR6/6	橙
348	台付鉢	(17.3)	—	—	11.5	16.9	口縁1/2、体部完形	10RY4/1	褐灰	10YR6/8	赤橙

7. 溝とその遺物

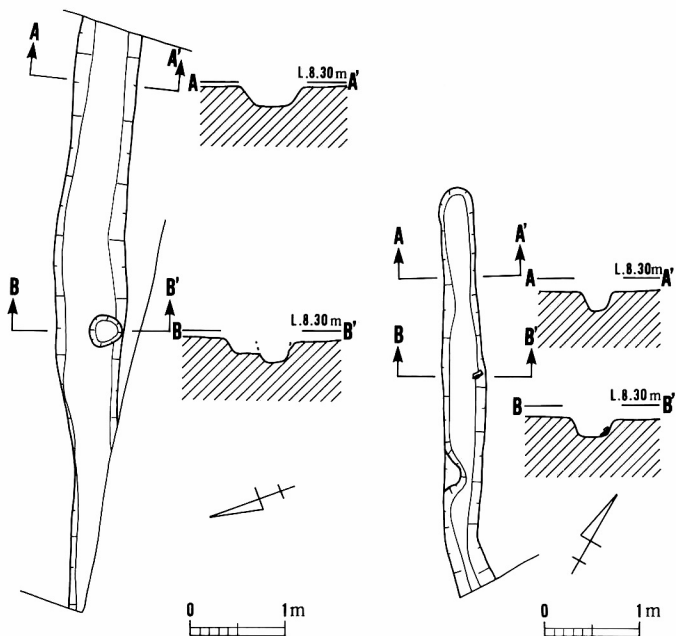
溝 1

I区土壙群の南で検出された。土壙3に切られることから、土壙3以外の遺構と同時併存していたかもしれない。

主軸はN-65°-Wと地形とほぼ直交する。西側はやや南方向へ弧状に曲がっている。西側は浅くなり、終結している。深さは、最深部で0.25mである。深さも東側は深くなっており、地形に則して西から東に向かって機能したと思われる。

幅は中央が最も広く、0.8mで、東側では0.7m前後を測

る。断面は逆台形を呈し、底面は比較的平坦である。弥生土器の小片しか出土していない。



第96図 溝 1

第97図 溝 2

溝 2

I区南側で確認された溝で、周囲に掘立柱建物が存在している。

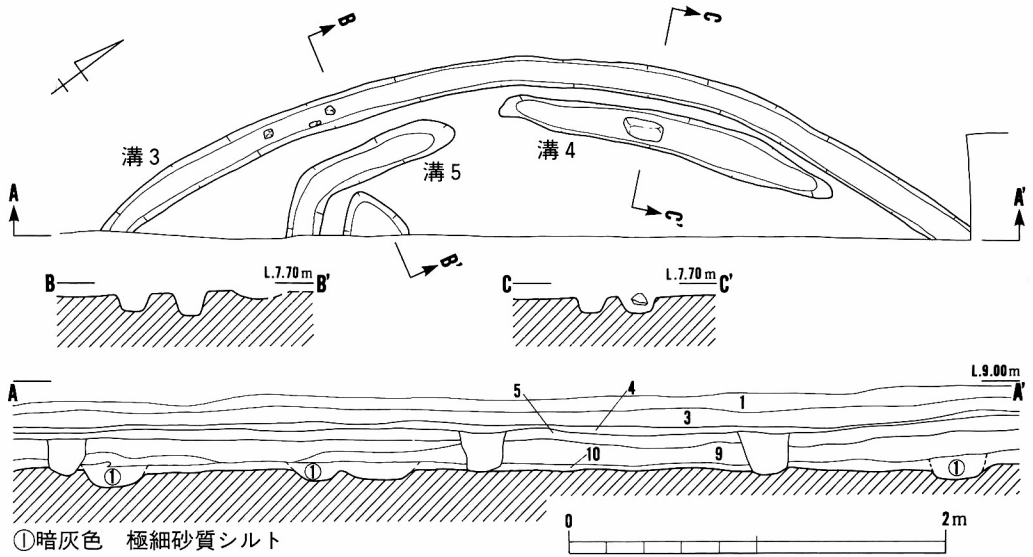
主軸はN-28°-Wで、西側は調査区内から始まっている。東側へは調査区外へ続いている。調査区東端近くまで直線に延び、そこで僅かに北側へ曲がっている。残存長は4.3mで、幅は最大幅0.5m、平均幅0.4mを測る。底面は平坦で、断面は逆台形である。

溝 3・4・5

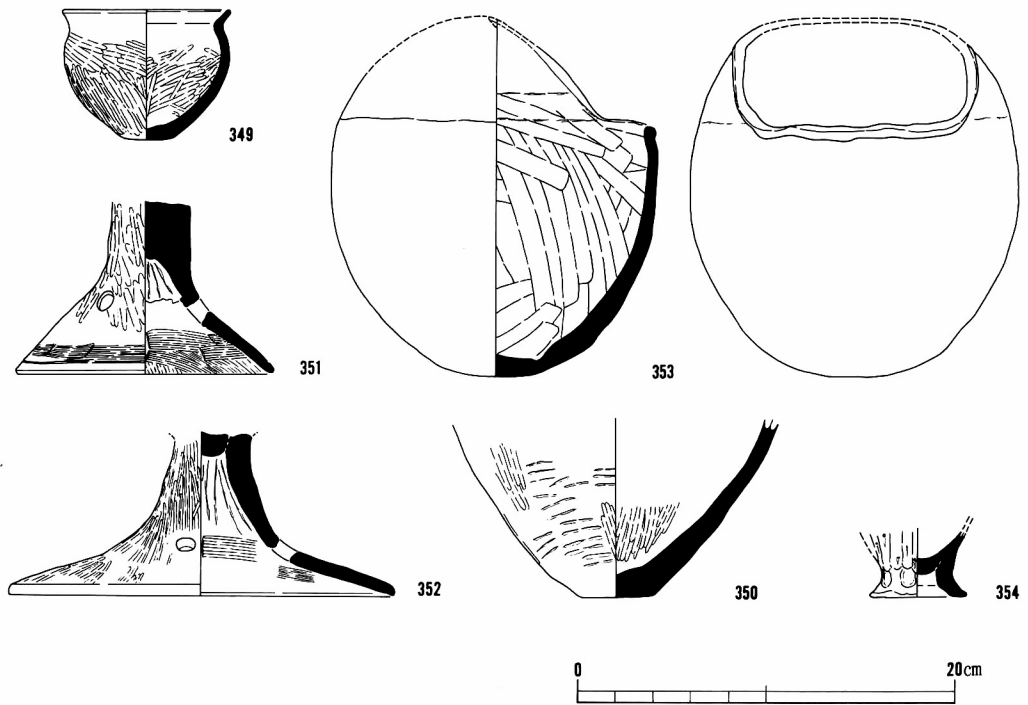
溝3・4・5はI区西側に位置し、10層上面より検出した。溝3は溝4・5を弧状に取り囲む形で検出した。幅は30~35cmを測り、検出面からの深さは12cm前後と比較的浅い。溝の断面

形はU字状を呈する。埋土は黒褐色シルト層で10cm大の垂角礫を含む。

溝4は溝3の内側に位置し、長さ1.8mを測る。検出面からの深さは10cm前後である。埋土は



第98図 溝3・4・5



第99図 溝3出土遺物

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
349	壺	8.6	8.1	8.7	2.6	6.8	完形	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙
350	甕	—	—	—	3.8	—	底部完存	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/2	灰黄
351	高坏	—	—	4.1	(13.4)	—	柱状部以下完存	10YR7/2	にふい橙	2.5Y7/1	灰白
352	高坏	—	—	(4.1)	(20.4)	—	柱状部以下1/4	10R6/3	にふい赤	10YR4/2	灰黄褐
353	手焙り		16.7	17.4	2.0	(19.0)	覆部は1/2欠く	7.5YR6/4	にふい橙	5YR7/3	にふい橙
354	製塩	—	—	—	5.2	—	脚台部完存	2.5Y7/3	浅黄	10YR6/2	灰黄褐

暗灰色シルトで炭片を含む。溝のほぼ中央、埋土上層より10×20cm大の河原石が検出された。

溝5はL字状に屈曲し、掘立柱建物2のP6・7を切って掘り込まれている。検出面からの深さは10cm前後で、埋土は溝4と同じである。溝4・5は同一の溝と考えられる。

溝3からは、広口壺A、甕、高坏、手焙形土器、製塩土器が出土している。

349は小形の広口壺Aである。体部の内外面に細かなヘラミガキが認められる。口縁部は横方向のナデ仕上げである。350は底部の破片である。外面にタタキののち縦方向のヘラミガキ、内面にも縦方向のヘラミガキが施されていることから、壺の底部としておく。

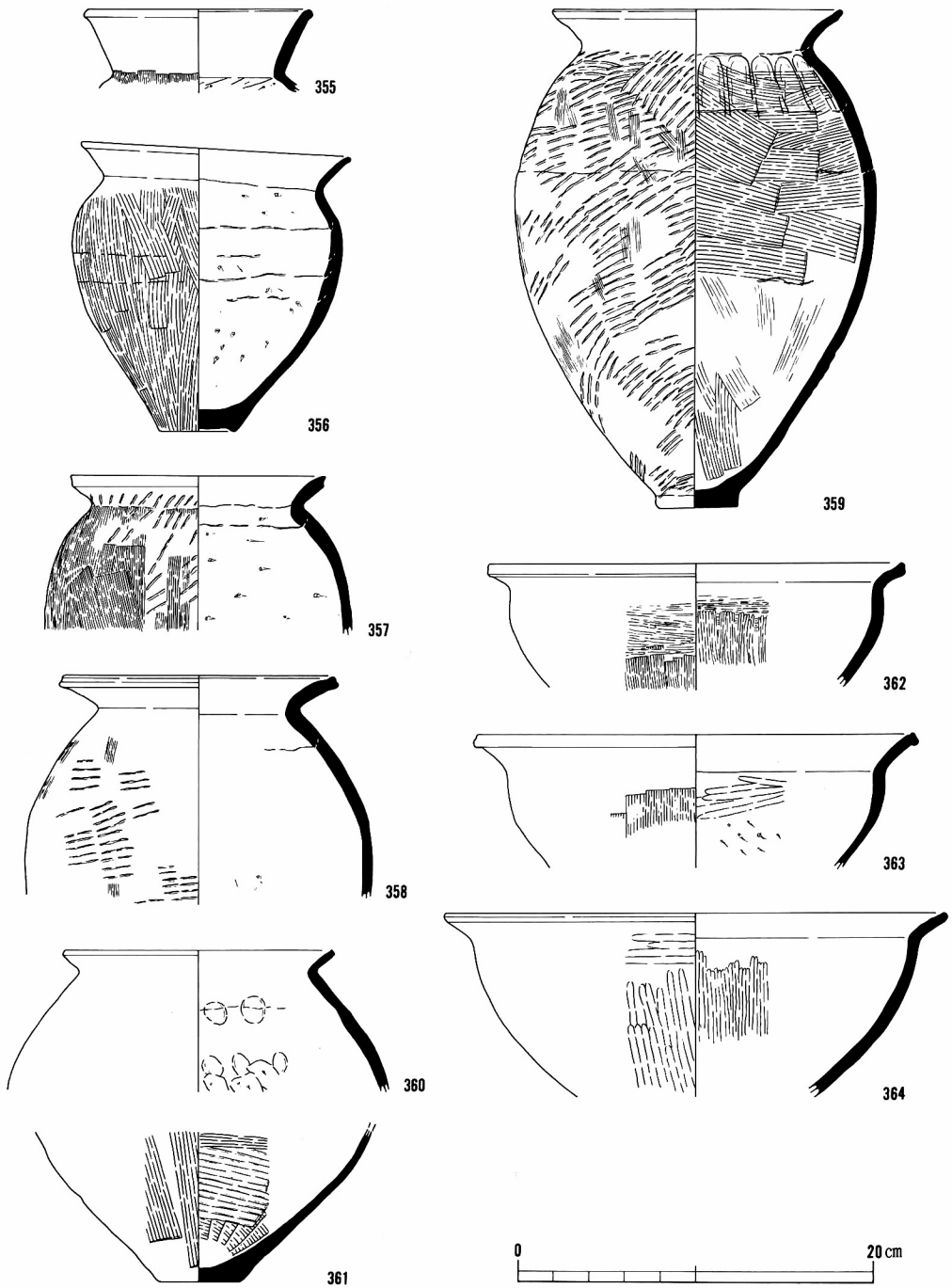
351は中実の柱状部から短くハの字形に開く裾部をもつ。裾部に3孔を穿つ。外面の調整は縦方向のヘラミガキ、裾部端には1本の沈線の上に横方向のハケメがみられる。柱状部内面には絞りが残り、裾部内面には横方向のハケメが観察される。352は大きく開く裾部と中空の柱状部をもつ。裾部には351と同様3孔を穿つ。成形にあたっては、いわゆる円板充填手法を採っている。調整は351と大差ないが、外面のヘラミガキは裾部まで及んでいる。

353は手焙形土器であり、球形の体部に、ドーム状の蔽部を付けるものである。蔽部は一方に向かって口を開き、開口部は約45°の傾斜をもつ。蔽部と体部との高さの比率は1：3である。底部はほぼ丸底である。調整は、体部内面を下から上に強いユビナデを施し、蔽部との接合部分に及ぶ。外面の調整は不明瞭であるが、一部にハケメが認められる。

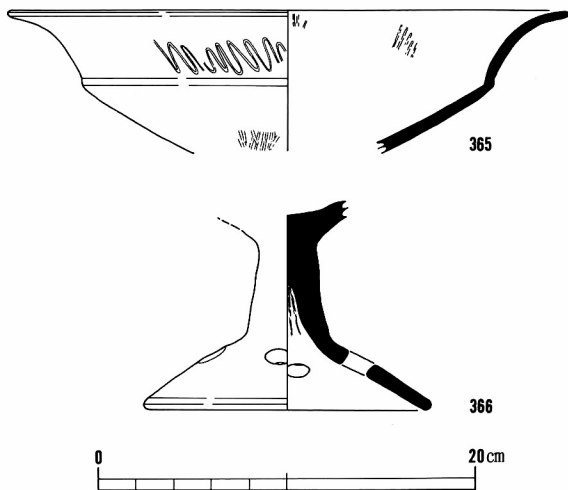
354は製塩土器の脚台部である。脚台部は厚く、端部は丸くおさめない。体部と脚台部の成形後、上方からの粘土塊充填により底部を形づくる。体部外面には縦方向のヘラケズリが施される。二次的な加熱は受けていない。

溝4の出土遺物には、甕A・B、鉢B・C、高坏Cがある。

358は甕A₁である。他の甕A₁と異なり、体部の最大径が体部中位にある。甕A₂には、356・357の二点がある。ともに体部内面上半には横方向の逆時計回りのヘラケズリが施される。356は底部外面にヘラケズリがみられる。359は甕B₁である。口縁部は上方につまみ上げる。360は短く斜め上方に伸びる口縁部と大きく開く体部をもつ。外面の調整が不明瞭である。内面にはユビオサエの痕跡が確認でき、それを下から上方向のヘラケズリが切っている。



第100図 溝4 出土遺物(1)



第101図 溝4出土遺物(2)

鉢Bには362・363がある。外面の調整は、縦方向のハケメののち肩部付近を横方向にヘラミガキしている。体部内面下半に縦方向、上半に横方向のヘラミガキが施される。363の外面には縦方向のハケメが、内面には体部下半にヘラケズリがみられる。

365は高坏Cである。口縁部径は不確定である。坏部外面には暗文風の波状ヘラミガキがみられる。体部外面には縦方向のヘラミガキが認められる。366は裾部に4個の円孔をあける。

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面	外 面		
335	壺	(12.6)	(9.8)	—	—	—	1/4	2.5Y7/2	灰黄	5Y4/1	灰
356	甕	(15.2)	12.5	15.3	4.3	15.9	口縁部のみ1/4	10YR7/3	にぶい橙	10YR7/3	にぶい橙
357	甕	(14.4)	(11.9)	(17.4)	—	—	1/2	10YR7/3	にぶい橙	10YR7/3	にぶい橙
358	甕	(15.3)	(11.5)	(19.8)	—	—	口縁部1/8、胴部1/2	2.5Y5/1	黄灰	10YR7/3	にぶい橙
359	甕	(16.2)	(13.1)	(20.4)	4.7	27.9	1/2、底部完形	10YR7/1	灰白	10YR7/2	にぶい橙
360	甕	(15.0)	(13.3)	—	—	—	1/6	7.5YR4/2	灰褐	7.5YR4/1	褐灰
361	甕	—	—	—	(4.7)	—	1/2	2.5Y7/2	灰黄	10YR5/2	灰黄褐
362	鉢	(23.1)	(21.0)	—	—	—	1/8	10YR5/2	灰黄褐	5YR6/6	橙
363	鉢	(24.6)	(21.3)	—	—	—	1/3	10YR8/2	灰白	10YR8/2	灰白
364	鉢	(28.4)	(25.3)	—	—	—	1/4	7.5YR7/4	にぶい橙	10YR7/3	にぶい橙
365	高坏	(29.7)	(22.0)	—	—	—	1/4	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/3	にぶい橙
366	高坏	—	—	3.1	(14.6)	—	脚柱部完形、裾部1/2	7.5YR6/3	にぶい褐	10R5/6	赤

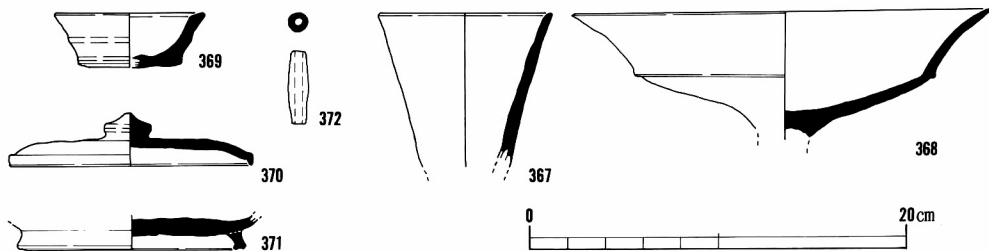
溝6

II区北端で検出された幅約35cm、深さ約18~25cmの溝である。断面は箱形となる。また、溝7・17・18・19と並行する。暗灰色シルトが堆積し、弥生土器の小片が出土している。

溝7

竪穴住居2を切って検出された、調査区を斜めに横断する溝である。幅は約1.2m、深さ約40cmを測り、南壁は2段に掘り込まれていた。最下層からは弥生土器が出土している。

弥生土器には、細頸壺と高坏がある。367は細頸壺の口頸部である。368は高坏Cである。



第102図 溝7出土遺物

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
367	壺	(9.0)	—	—	—	—	1/4	10YR6/1	褐灰	2.5YR5/8	明赤褐
368	高坏	—	—	—	—	—	1/4	5YR7/6	橙	5YR7/6	橙

土錘が1点出土している。側縁部は中央がやや太くなる曲線を描く。長さは3.8cm、中央部の直径は1.1cm、孔径は0.4cmを測る。重量は11.2gである。

369は口径7.8cmを測る土師器の皿である。内外面とも回転ナデ調整が丁寧に施され、平底の底部はヘラ切り手法の痕跡が残っている。370は宝珠形つまみをもつ坏蓋である。外面は回転ナデ、内面はナデ調整を施している。口径12.7cmを測る。371は底端部に高台を貼り付けた坏である。高台は比較的高く、11.3cmを測る。接地面は内側である。

溝11・12

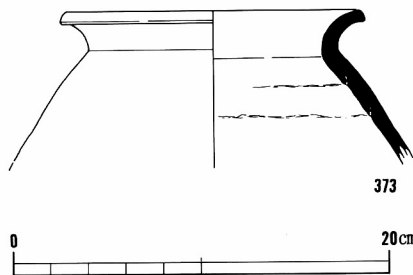
溝11は幅19cm以上、深さ約15cmの溝であるが、東肩部は調査区外となり検出されていない。

溝12は、幅約80cm以上、深さ約30cmの溝で、溝11と同様、東肩部は調査区外にあり、検出されていない。この2本の溝は、その方向からみて、調査区外で1本につながる可能性がある。

溝15

IV区南端の17層上面で検出された溝である。南へ向かう傾斜をもち、南端は17層上面の傾斜に伴って消失する。北端部は暗渠により削平されているが、暗渠より北には伸びていない。幅は170~180cm、深さは12~25cmを測る。埋土から弥生土器が出土している。

出土遺物は、甕の体部上半の1点のみである。口縁部は緩く外反する。調整は観察不可能であるが、体部内面に粘土紐の接合痕が残っている。



第103図 溝15出土遺物

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
373	甕	(15.5)	(13.2)	—	—	—	1/4	10YR5/2	灰黄褐	7.5YR7/6	橙

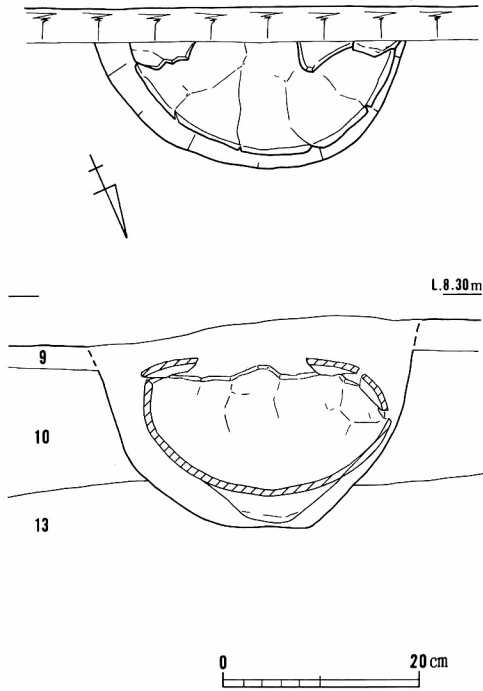
8. 土器棺

土器棺 1

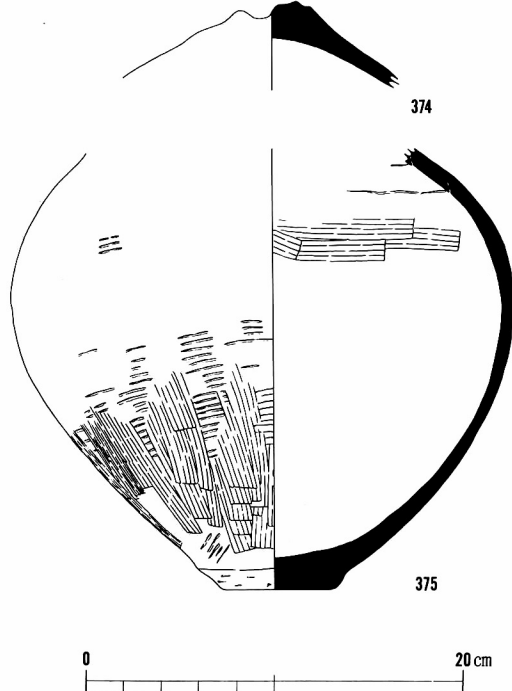
I区南端に位置し、調査区の南西隅、壁際で土器棺の北側半分を検出した。検出面は10層上面である。土器棺の掘り方は直径32cmの円形を呈している。検出面からの深さは17cmを測る。掘り方内には頸部を打ち欠いて棺身とした壺が北側に若干傾いた状態で埋置されていた。身の内部には棺蓋に転用した高環が落ち込んでいた。

374は、脚部および口縁部を打ち欠いて土器棺の蓋に転用している高環である。体部は直線的に伸びる。成形にあたっては、坏部と脚部を接合する手法を採っている。

375は、身に用いられていた壺である。口頸部以上を打ち欠いている。成形、調整手法は、突出する底部外面をヘラケズリしており、体部外面は右上がりのタタキののち、縦方向のハケで仕上げる。肩部内面には粘土紐の接合痕と、それを切る横方向のハケメが観察できる。



第104図 土器棺 1 出土状況



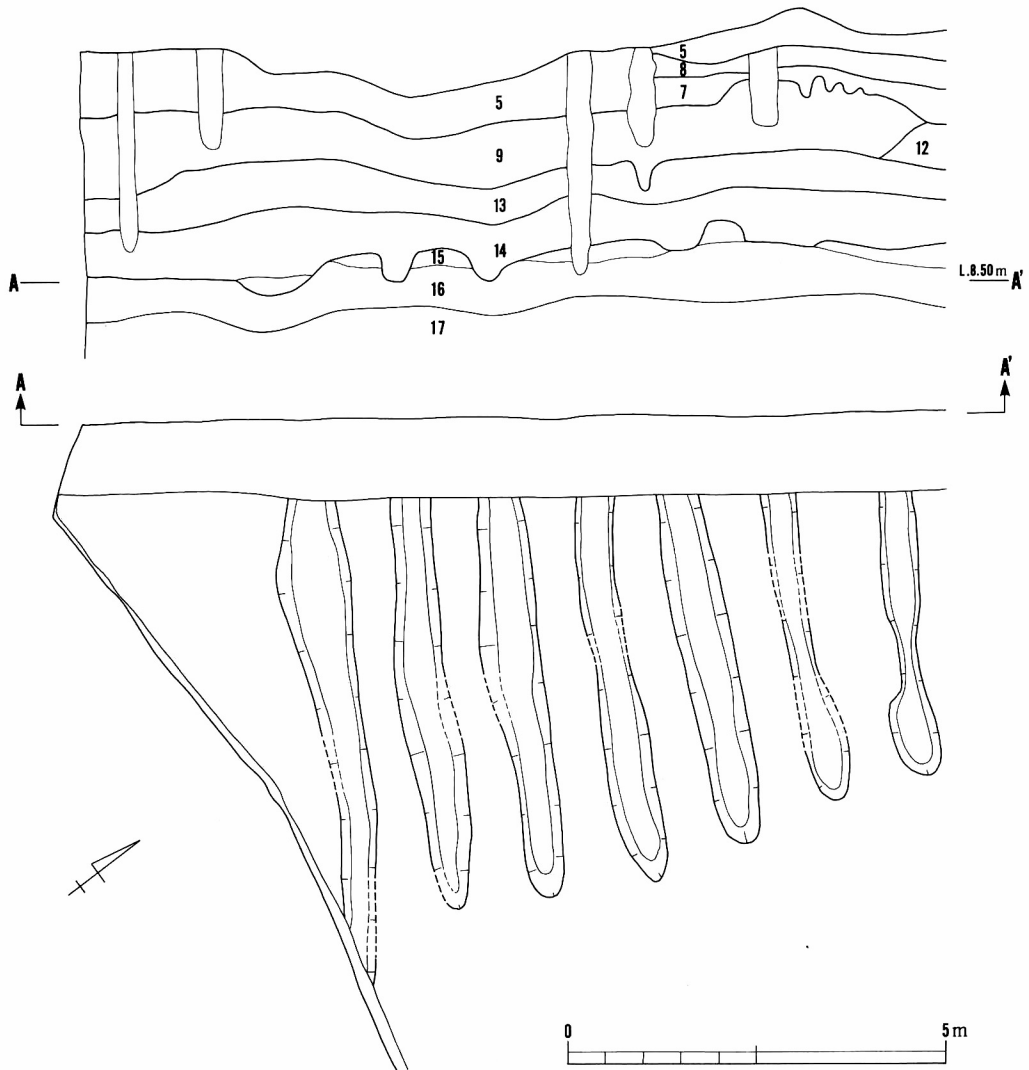
第105図 土器棺 1

番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
374	高環	—	—	—	—	—	坏部下半完存	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙
375	壺	—	—	25.8	6.2	—	肩部以下完存	10YR7/2	にぶい橙	2.5Y7/1	灰白

9. 畝状遺構

畝状遺構 1

III区の西端、微高地の中央付近の15層上面で検出された。平行する7本の溝状の落ちに囲まれた部分を、畑の可能性の高い遺構として畝状遺構と呼称する。畝間の溝は、最も長いもので長さ約6.7m、北端の最も短いもので約4.8mが残存する。南北両端の溝間の距離は約8.5mを測る。7本の溝はほぼ平行しており、その方位は磁北から約50°西へ振っている。畝の高さは壁面で約10cmを測り、標高8.54~8.60m付近が畝の上面である。畝部の幅は、45~110cmである。壁



第106図 畝状遺構 1

面の15層中より、土壌サンプルを煉瓦状（10×10×20cm）に採取し、水洗選別を行って種子資料の有無の確認に努めた。包含されていた有機物は、1mm目の篩および、さらに微細な目の網にかけて得られたものである。この包含物からは、アカザ属*Chenopodium*・カタバミ属*Oxalis*の種子が各1点、昆虫片2点が検出されたのみである。アカザ属・カタバミ属は、ともに畑雑草あるいは路傍の雑草であるが、点数が少なく、自然科学的な観点から積極的に畑作を証明する資料は得られなかった。

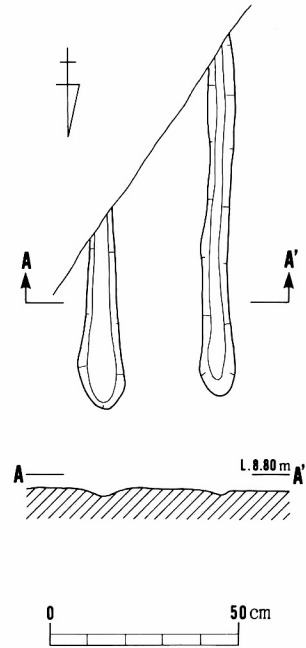
畝状遺構 2

IV区南寄りの16層上面で検出された。切り込み面は畝状遺構1と同じく15層上面であろう。畝状遺構1の南側、土壌22の東側に位置している。

畝間の溝が2本検出されたのみであるが、この溝が平行すること、溝内の堆積物が畝状遺構1のそれと同一と認められたことによって、これも畑の可能性の高い遺構であると考えた。

畝の方向は、磁北にほぼ合致しており、畝状遺構1とは斜交している。

溝の長さは97cmが遺存しており、畝部の幅は100～120cmを測る。畝上面の標高は、8.57mである。畝の高さは約5cmが残存しており、畝状遺構1よりも低い数値を示す。これは、上述したように15層上面での検出ができなかったのが原因である。



第107図 畝状遺構 2

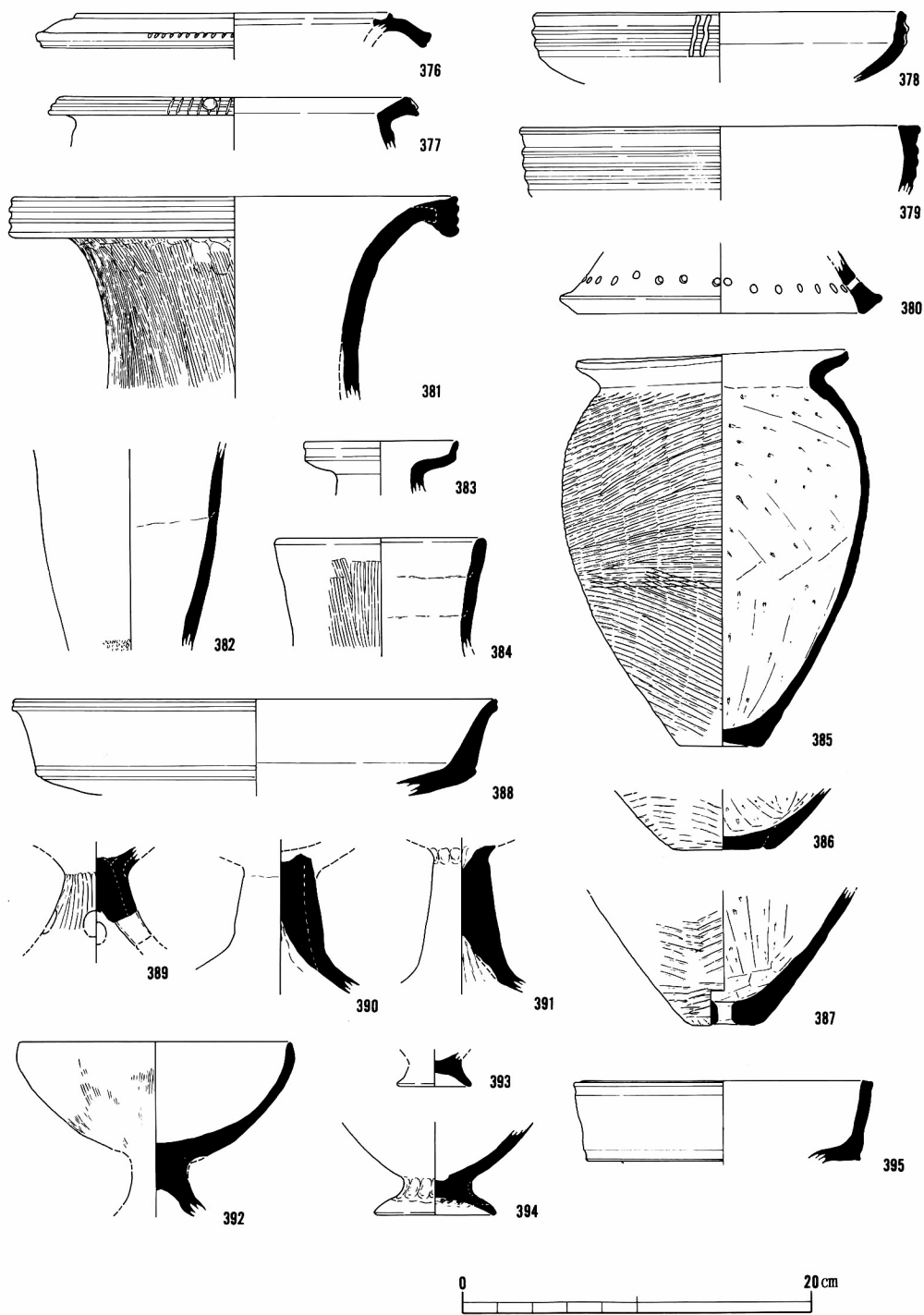
10. 遺構に伴わない遺物

16層出土遺物

376・378・388・391・392・397は16層からの出土である。

このうち、376・378は、それぞれ中期に属する壺と高坏である。376は口唇部に刻目文を施し、口縁内突帯が2条巡っている。378は口縁部直下に3条の凹線を巡らし、その上に棒状浮文を施す。

388は高坏Cの坏部である。坏部の外傾指数は90.8である。口唇部には端面を形成し、1条の凹線を施す。口縁部と体部の境にも、浅い凹線が2条巡っている。391は、高坏の中実の柱状部である。接合部および裾部への移行部に絞目が残る。392は高坏Bである。外面はハケメ仕上げである。397は、鉢Cであり、口唇部を上方につまみあげ、底部は窪んでいる。



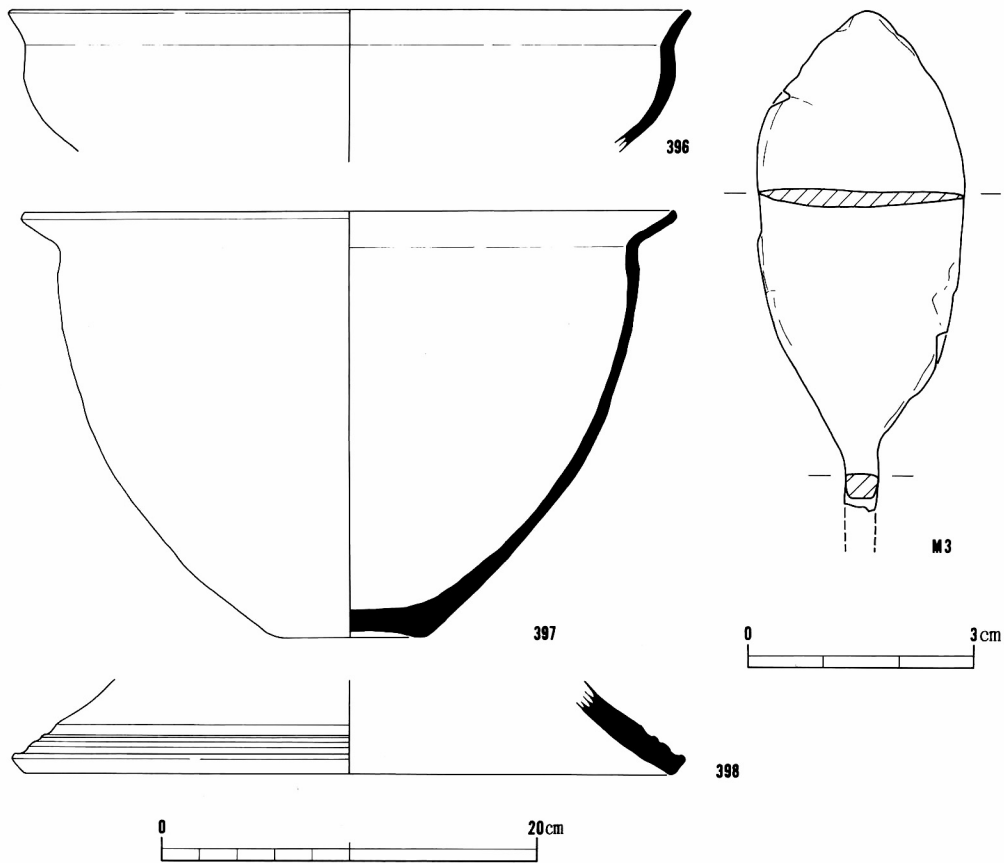
第108図 遺構に伴わない遺物（1）

14層出土遺物

14層から出土した遺物には、中期に属するものに377・379・380の3点があり、後期のものに381・382・384・385・387・389・390・392・394・397・398がある。

377は、甕の口縁部の破片であり、口唇部端面に2条の凹線を巡らしたあと、円形浮文とヘラ描き斜線文の加飾がみられる。379は、高坏である。口唇部には水平な端面を形成する。380は高坏の脚部片であり、円形の穿孔がみられる。

後期に属するもののうち、381・385・343はNo.11杭東付近でまとまった形で出土したものであるが、遺構の掘り方は検出されなかった。381は広口壺Bである。擬口縁に粘土を加えることによって、広い端面を形成するもので、3条の凹線が巡る。頸部外面には縦方向のハケメを施している。385は甕であり、口唇部をつまみあげている。体部外面には方向の異なるタタキが施されており、分割成形手法のうかがえる例である。体部内面には、ヘラケズリが施される。387は鉢Fである。底部外面にはタタキが施され、内面にはヘラケズリが行われる。



第109図 遺構に伴わない遺物(2)

382は細頸壺に分類される。下端には櫛状工具による列点文が巡る。384は短頸壺Aである。頸部外面はハケメ仕上げである。高坏の脚部には、柱状部から裾部に向かってなだらかに開くもの(389)、明瞭な稜をもつもの(390)がある。394は、鉢Gである。398は、土壇22の330・331と似た器形であることから、高坏裾部の破片と考える。3条の凹線が巡っている。

12層出土遺物

383は二重口縁を呈する小形の壺の口縁部である。386は底部輪台技法による甕である。393は製塩土器である。器壁の剥落のため調整等は不明である。395は、当地方であまり類例がない。口縁部の長さが4.5cmと長く、また口縁部径が小さいため疑問は残るが、美作地方の壺あるいは甕である可能性も考えられる。口縁部の上下端に浅い凹線が巡る。396は鉢Cである。

12層から鉄鏝が出土している。鏝身部は、長さ5.6cm、幅2.8cm、茎の幅0.5cmを測る。

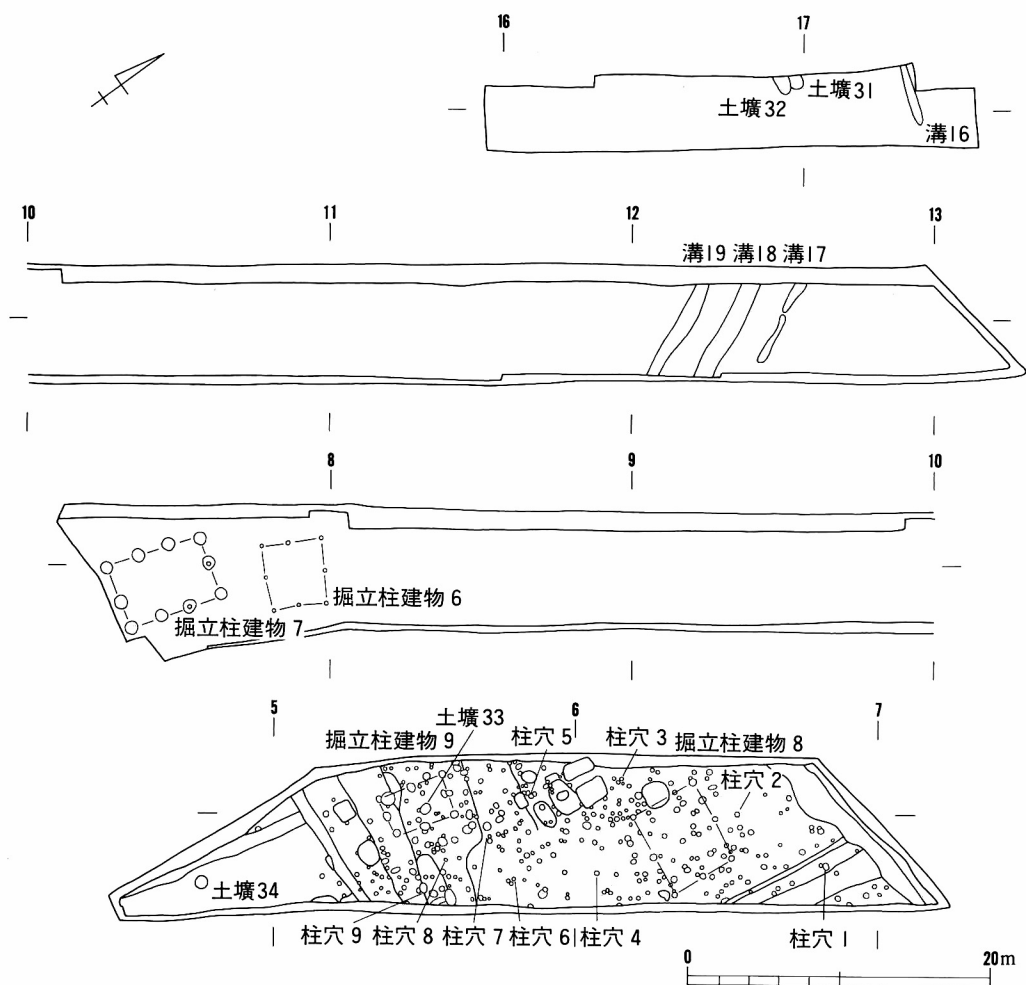
番号	器種	法 量 (cm)					残 存 率	色 調			
		A	B	C	D	E		内 面		外 面	
376	壺	(18.0)	—	—	—	—	口縁部小片	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	灰白
377	甕	(18.6)	(18.0)	—	—	—	口縁部1/4	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙
378	高坏	(20.8)	—	—	—	—	坏部小片	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	灰白
379	高坏	(22.6)	—	—	—	—	口縁部小片	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙
380	高坏	—	—	—	(16.4)	—	脚部1/4	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙
381	壺	25.2	14.3	—	—	—	口頸部完存	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙
382	壺	—	—	—	—	—	頸部小片	10YR8/2	灰白	7.5YR8/3	浅黄橙
383	壺	(8.7)	(5.1)	—	—	—	口頸部1/2	10YR6/1	褐灰	7.5YR7/3	にぶい橙
384	壺	(11.7)	(10.2)	—	—	—	口頸部1/4	10YR6/2	灰黄褐	7.5YR7/4	にぶい橙
385	甕	15.5	12.9	17.7	4.8	22.5	完形	2.5Y8/1	淡黄	5YR8/4	淡橙
386	甕	—	—	—	(6.0)	—	底部1/2	10YR6/1	褐灰	7.5YR	にぶい橙
387	甕	—	—	—	(4.2)	—	底部1/2	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙
388	高坏	(27.4)	(24.9)	—	—	—	坏部1/2	7.5YR8/2	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙
389	高坏	—	—	(3.7)	—	—	接合部	10YR7/3	にぶい橙	10YR7/3	にぶい橙
390	高坏	—	—	(2.2)	—	—	接合部	7.5YR7/3	淡赤橙	7.5YR7/3	淡赤橙
391	高坏	—	—	(3.7)	—	—	接合部1/2	7.5YR7/3	淡黄橙	7.5YR7/3	淡赤橙
392	高坏	15.6	—	3.2	—	—	坏部完形	10YR8/2	灰白	10YR8/2	灰白
393	製塩	—	—	—	(3.9)	—	台脚部完存	2.5YR7/3	淡赤橙	2.5YR7/3	淡赤橙
394	鉢	—	—	—	(6.8)	—	1/2	10YR8/2	灰白	10YR8/2	灰白
395	甕	(16.0)	(15.6)	—	—	—	1/3	2.5Y8/3	淡黄	10YR8/3	浅黄橙
396	鉢	(35.8)	(34.2)	—	—	—	1/4	2.5Y7/23	灰黄	7.5YR8/2	灰白
397	鉢	(34.8)	(30.8)	—	8.0	(22.4)	口縁部1/4、底部完存	2.5Y8/3	淡黄	5Y4/1	灰
398	高坏	—	—	—	(34.5)	—	裾部1/4	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙

第 3 節 古墳～室町時代の遺構と遺物

1. 調査の概要

第2面で検出された遺構は、掘立柱建物4棟、土壇4基、溝4条および柱穴である。

時期的に幅があるため、不確かな部分が多いが、遺構の種別による平面的な偏りが認められる。III区南端からIV区にかけては、掘立柱建物および柱穴が多数検出されたことから、居住域として利用されていたことが分かる。また、III区9ライン付近には、土層断面の観察により、畦畔状の高まりが確認されたことから、これよりII区の溝にかけての平坦面は、水田あるいは畑といった生産活動の場として機能していた可能性がある。



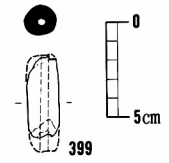
第110図 古墳～室町時代遺構配置図

2. 掘立柱建物とその遺物

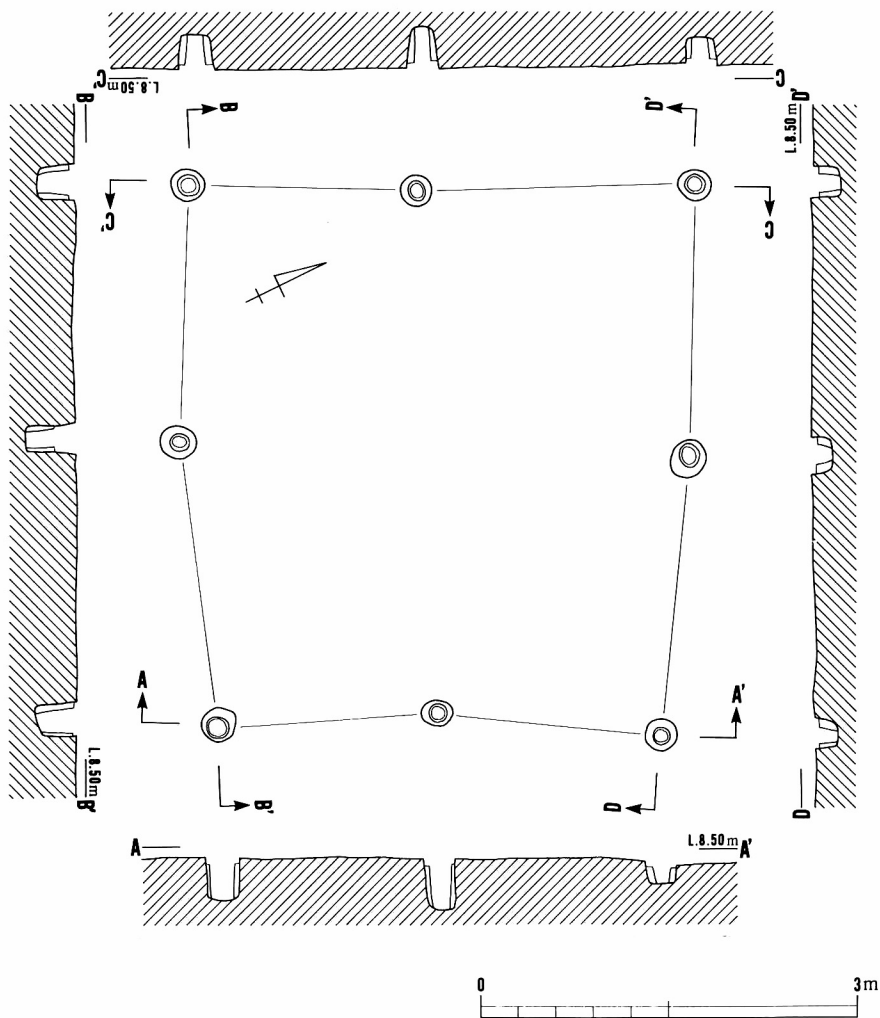
掘立柱建物 6

III区西端の15層上面で検出した掘立柱建物であるが、13層上面から掘り込まれたことが、柱穴埋土の観察などから判明した。掘立柱建物7に近接した位置にある。

梁行2間(3.8m)×桁行2間(4.3m)の規模であり、棟軸方向はN-60°-Wである。柱間寸法は、桁行が203~227cm、梁行は177~222cmを測る。



第111図
掘立柱建物6
出土遺物



第112図 掘立柱建物6

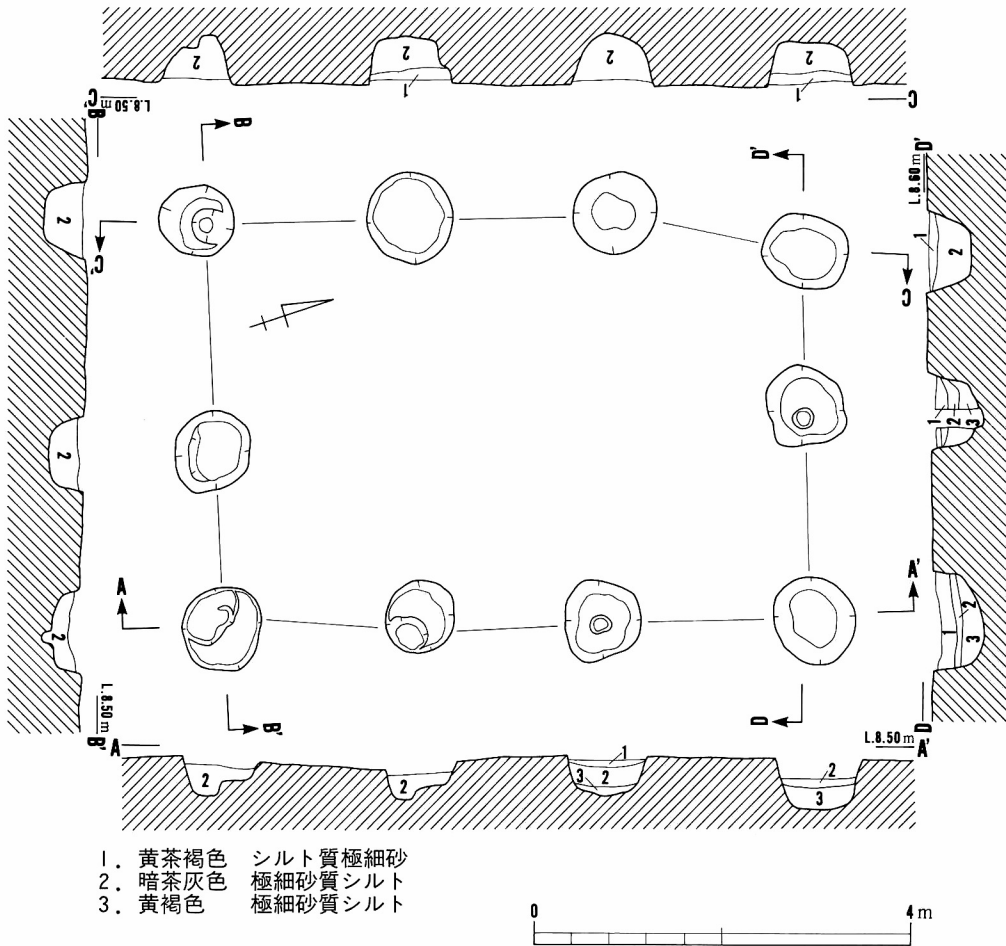
柱穴の掘り方は、直径25~30cmであり、柱痕の直径は15cm程度と小規模である。柱穴の深さは40cm以上である。

土器の出土はみなかったが、南西隅の柱穴掘り方から土錘が1点出土している。側縁が直線的な、土師質の管状土錘である。両端部を欠失し、残存長は約4.3cm、直径約1.7cmを測る。孔径は0.4cmであり、現重量は11.2gである。

掘立柱建物 7

III区西端の15層上面で検出した掘立柱建物である。これも、近接する掘立柱建物6と同じく13層上面からの掘り込みと思われる。

規模は、梁行2間(4.1m)×桁行3間(6.4m)である。棟軸の方位はN-18°-Eであり、掘立柱建物6とは主軸が揃わない。柱間寸法は、桁行が200~225cmであり、梁行は173~235cmを



第113図 掘立柱建物 7

測る。

柱穴の掘り方の直径は75~97cmと大形であり、80cm前後のものが多い。柱痕は確認できなかったため、柱を抜いたものと思われるが、抜き取り痕は断面によっても観察することは不可能であった。

遺物は出土していない。

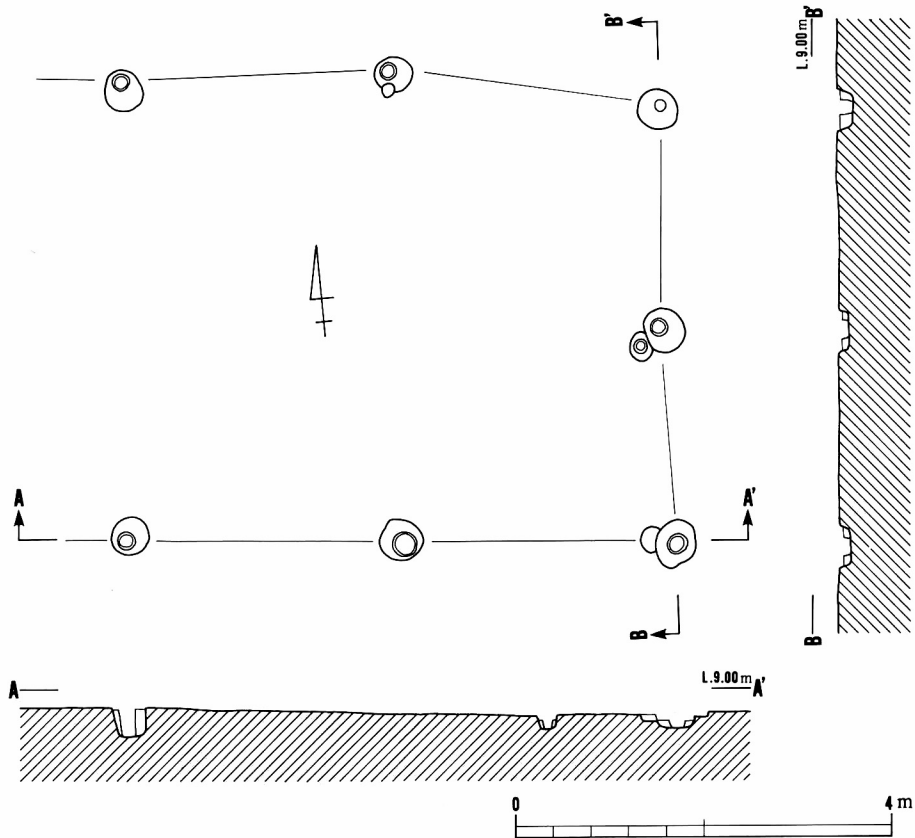
掘立柱建物 8

IV区やや東寄りで検出された掘立柱建物である。12層上面で検出された。

攪乱があるため、西端の2本の柱が西側梁部を構成するものかどうかは不明である。規模は梁行2間(4.7m)×桁行2間以上(5.9m)である。棟軸方向はN-85°-Wである。柱間寸法は、桁行が284~296cm、梁行が228・232cmである。

柱掘り方の直径は40~50cmであり、柱痕の直径は15cm前後を測る。

遺物は出土していない。



第114図 掘立柱建物 8

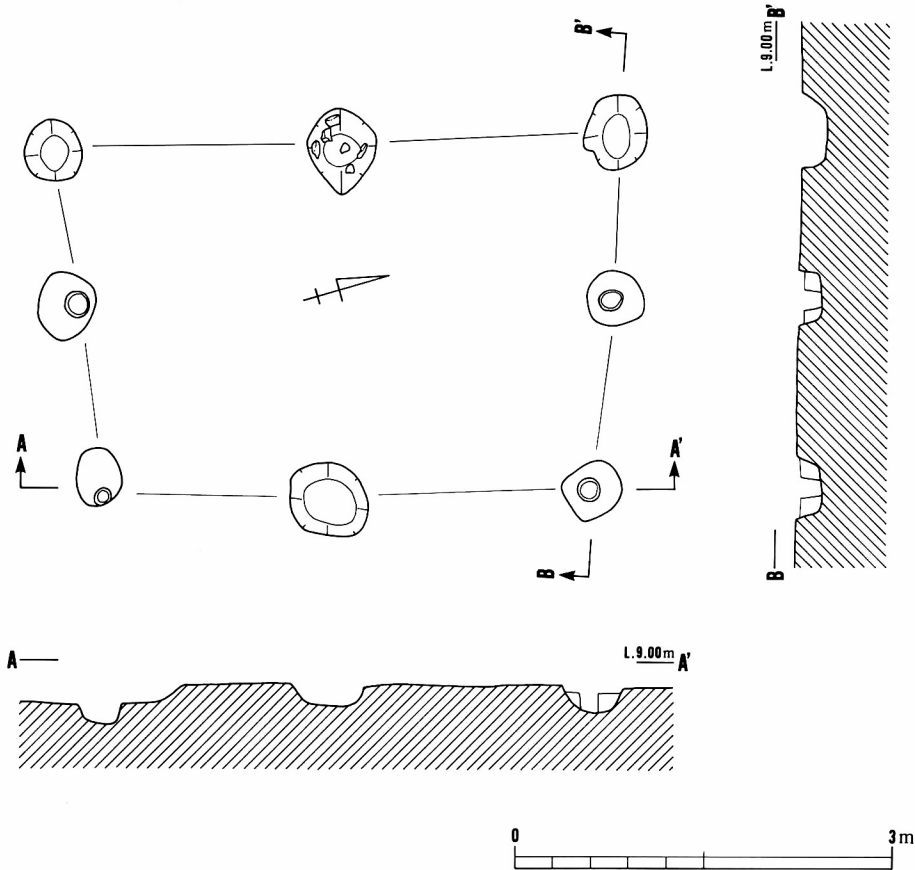
掘立柱建物 9

IV区西寄りの12層上面で検出された掘立柱建物である。

建物の規模は、梁行2間(2.8m)×桁行2間(4.5m)である。棟軸方向はN-16°-Eである。柱間寸法は、桁行が180~228cm、梁行が132~153cmである。

柱掘り方の直径は45~60cmであり、検出された柱痕の直径は15~20cmを測る。

遺物は出土していない。



第115図 掘立柱建物 9

3. 土壌

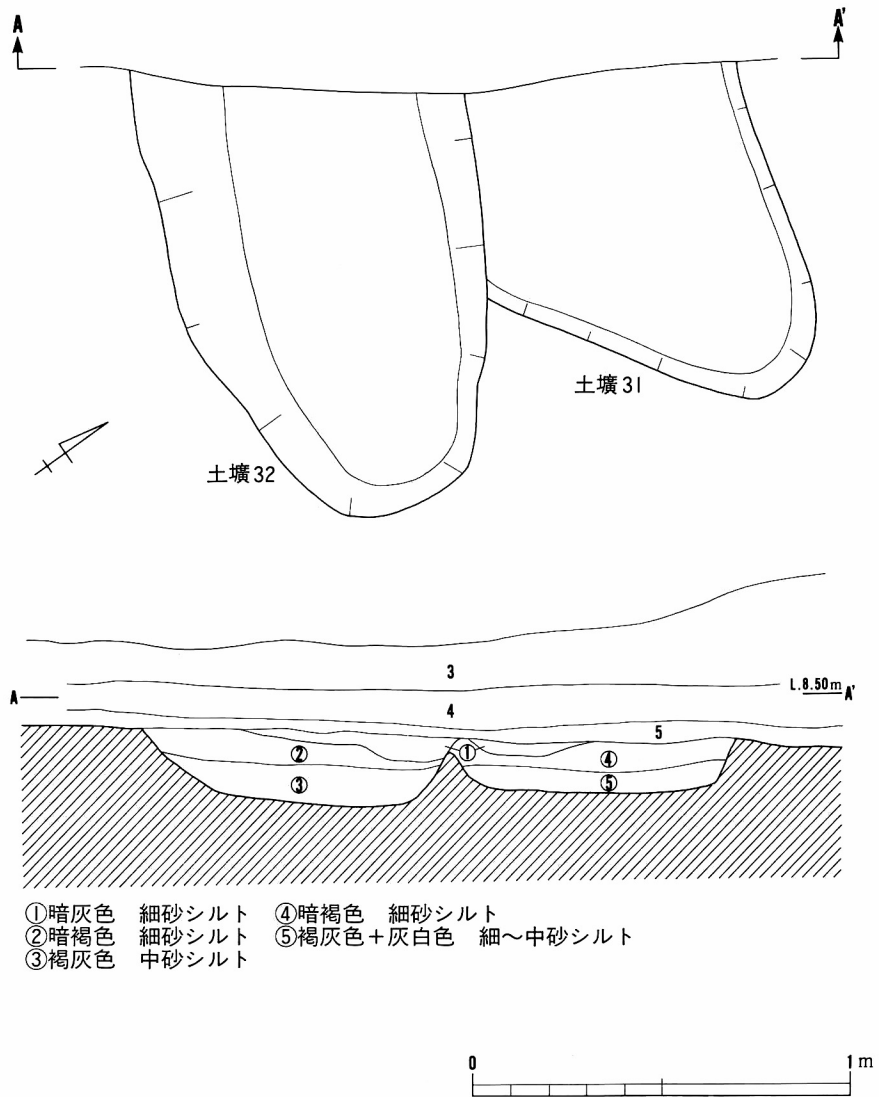
土壌31・32

I区中央付近、西壁際で検出された。両土壌の東部分は調査区外にある。検出面は、平安時代の遺物を含む5層の下面である。土壌32が土壌31を切っている。

土壌31は平面形・規模ともに不明である。深さは10cmを測り、底面は平坦である。

土壌内埋土、④層より、土師器の細片が出土している。

土壌32は、短軸の長さ1.14mを測り、検出面からの深さは30cmである。底面は、土壌31と同様



第116図 土壌31・32

平坦である。

土壇埋土②層より、須恵器の細片が出土している。

土壇33

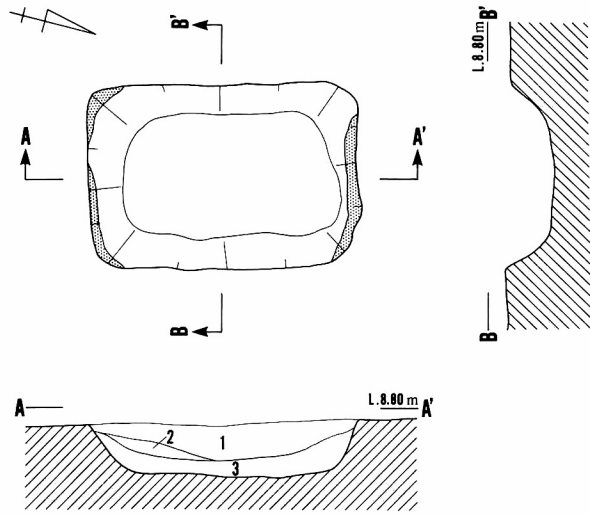
IV区西寄りの12層上面で検出された長方形の土壇である。掘立柱建物9の内部に位置するため、建物に伴う施設であった可能性もある。

検出面における長軸の長さは90cm、短軸の長さは60cmである。土壇壁は60~70°の角度をもって壇底にいたる。

壇底における規模は、長軸の長さ65cm、短軸の長さ40cmを測り、ほぼ平坦である。

なお、南北の両壁が焼けている状態が観察されたが、炭化物等の出土はみしていない。

遺物は出土していない。



- 1. 暗灰色 シルト質極細砂
- 2. 暗灰色 シルト質極細砂 (炭片含む)
- 3. 明灰色 シルト質極細砂
(網目は焼けている範囲)



第117図 土壇33

4. 溝とその遺物

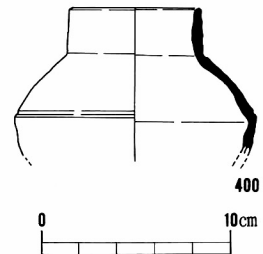
溝16

I区の北側に位置し、調査区を東西方向に横切る形で検出された。溝の東端は調査区のほぼ中央で終結する。幅は44~50cm、深さは4cm前後と浅い。断面形は浅いU字形を呈する。埋土は浅黄色シルトが堆積し、須恵器碗の細片が出土している。

溝17

II区北半で検出された。溝18・19と平行し、調査区を斜めに横切るものである。幅は約40cm、検出面からの深さは5cm程度と非常に浅い溝である。

400は短頸壺である。頸部は短く直立し、端部は丸く仕上げられている。体部は最大径を中位より上にもち、1条の凹線が巡っている。口縁~体部にかけて回転ナデ調整が施されている口径は推定で6.6cmである。



第118図 溝17出土遺物

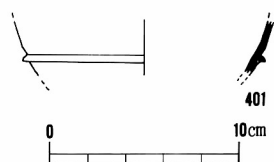
溝18

II区の北端近く、溝6の南で検出された、幅約110cm、深さ約25cmの溝である。溝9・17・19と並行した方向をとる。断面形はU字形を呈し、上層に灰色粗砂シルト、下層にオリーブ灰色粗砂シルトの堆積が認められた。

溝19

溝18の南側で検出された、幅約75cm、深さ約25cmの溝である。断面形は箱形であり、埋土の状況は溝18と同様であった。埋土からは須恵器が1点出土している。

401は、体部下半に1条の突帯をもつ、いわゆる突帯椀と思われる須恵器の破片である。突帯は断面三角形を呈する小さなもので、強いナデ調整によって貼り付けている。胎土は灰白色を呈し、焼成は良好である。



第119図 溝19出土遺物

5. その他の遺物

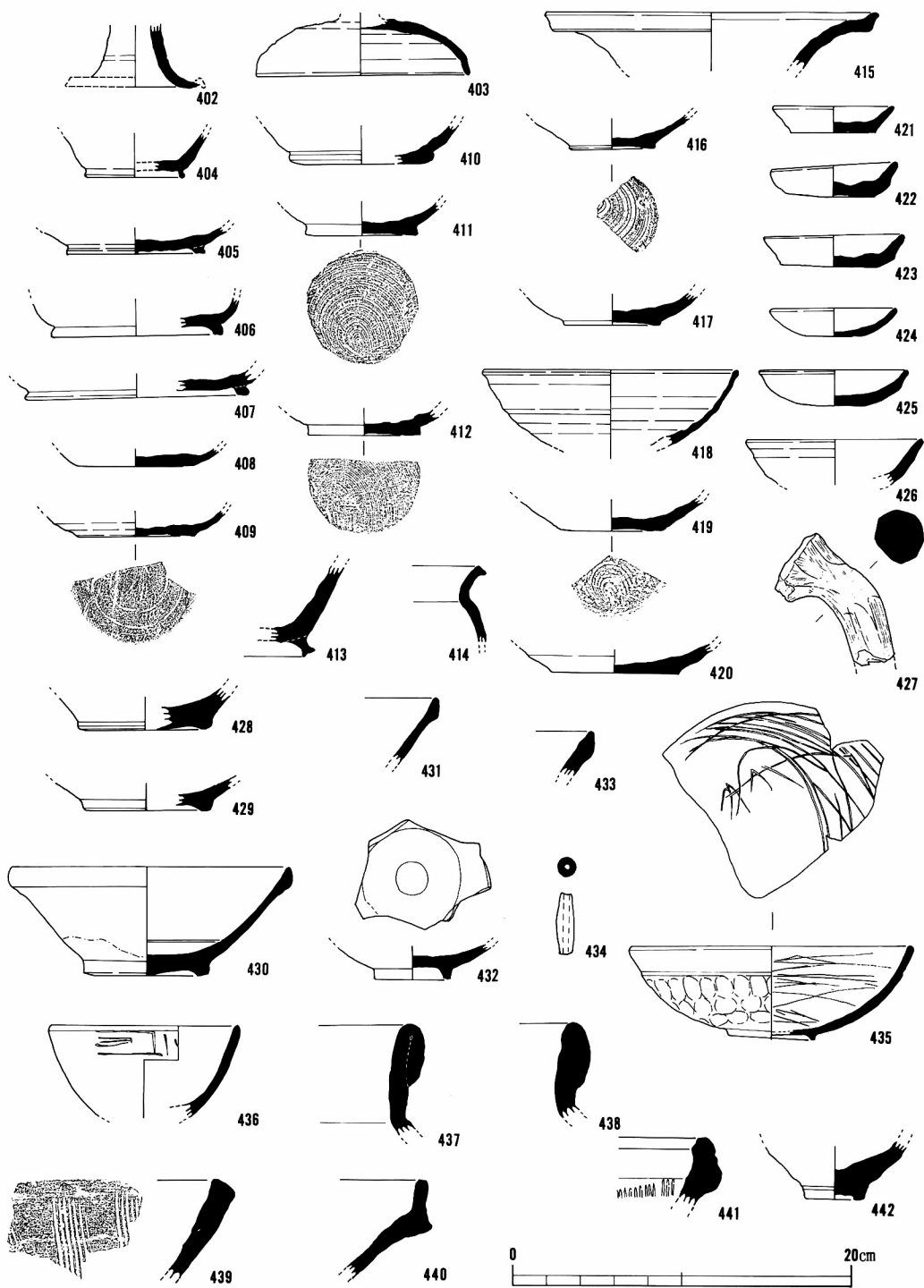
これまで説明をしてきた遺構以外にも、柱穴・包含層などから多くの土器が出土している。出土した土器は、須恵器、土師器、瓦器、中国製・国産陶磁器等種類が多い。時期は古墳時代から室町時代と幅広く出土している。

須恵器

402は柱穴9から出土した高坏脚部の破片である。脚部は外反気味に下方へ広がり、端部を下方へ屈曲させ段をなす。脚部下半には1条の凹線が巡っている。403はつまみをもつ坏蓋と考えられる。天井部は比較的低く、口縁部は内彎気味に開き、端部は丸く仕上げられている。内外面とも回転ナデ調整である。口径は12.5cmを測る。柱穴5から出土している。

404～409は坏である。いずれも口縁～体部を欠損し、遺存状況は悪い。404～407は底端部に高台を貼り付ける坏で、405・406は高台の位置が他の2者に比べてやや内側にある。高台の大きさは径6～13.2cmで、比較的低い高台である。調整は内外面ともに回転ナデ調整が施される。404はIV区7層、407は柱穴7、405はII区22～27層からそれぞれ出土している。408・409は底部破片で全体の器形が明確でないが高台をもたない坏と考えられる。調整は内外面とも回転ナデ調整を施し、底部はヘラ切り手法を用いている。409の底部には板目状圧痕が残る。すべてII区22～27層から出土している。

410～412・416～420は椀である。平高台の椀（410～412・416～418）、平底の椀（419・420）に大別できる。410は径8.6cmの突出した平底をもち、ヘラ切り手法を用いている。II区22～27層より出土している。411・412は突出した回転糸切りの平高台をもつ椀である。底径は6.6cmで、



第120図 遺構に伴わない遺物（3）

高台側面は回転ナデ調整によって整えられている。412はⅢ区5層より出土している。416～418はわずかに突出する回転糸切りの平高台をもつ椀である。いずれも高台側面は未調整である。底径は416が4.8cmと小さく、417は5.7cmを測る。418は内彎して立ち上がる体部をもち、口縁部は外反する。口径は推定で14.8cmを測る。底部は欠損しているがわずかに突出した平高台をもつと思われる。調整は内外面とも回転ナデ調整が施されている。414・417はⅡ区22～27層より、418はⅣ区7層より出土した。419・420は平底で回転糸切り手法が用いられている。底径は6cm前後である。419は柱穴1から出土している。

413・415は長頸壺で、415は口縁部が大きく外反し、端部は垂直に立ち上がって面をなす。口径は推定で19cmを測る。Ⅳ区7層より出土している。413は底端部に高台を貼つけた長頸壺である。高台は内端面で接地する。内外面とも回転ナデ調整を施す。

414・433は鉢である。419は口縁部が「く」の字状に外反し、端部は下方に拡張する。内外面とも回転ナデ調整が施される。Ⅱ区22～27層より出土している。433は東播磨系の片口鉢である。端部は尖り気味に仕上げている。口縁部外面は黒化している。

土師器

421～424・426は小皿である。421～423は径7～8cm前後の平底の皿で、体部は底部から直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめている。内外面ともヨコナデ調整が施され、底部は摩滅が著しく明確ではないが糸切りと思われる痕跡をもつ。421は柱穴3から、422・423はⅣ区7層より出土している。424は丸底気味の底部から体部は内彎して立ち上がる皿で、口縁部と体部との境が明瞭でない。外面は、ユビオサエ調整、内面はナデ調整である。口径は推定で7.2cmを測る。Ⅳ区7層より出土している。426は内彎する体部をもち口縁部は外反する皿である。内面はナデ調整、口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整である。口径は推定で10cmを測る。柱穴6から出土している。

427は三足の埴の破片である。全体に粗いハケ目調整を施している。柱穴4から出土した。434は管状の土錘である。長さは3.6cm、中央部の径1.1cm、孔径0.4cmを測る。重さ3.5gである。

瓦器

425は丸底気味の底部で口縁部が外反する皿である。内面および口縁部外面にヨコナデ調整を施し、体部外面はユビオサエ調整である。器面が摩滅しているため暗文の有無は確認できなかった。口径は4.6cmを測る。柱穴8から出土している。435は暗文を施した椀である。体部は内彎して浅く立ち上がり、口縁部に段をもって移行する。底部には断面が逆台形の高台が貼り付けられている。外面体部はユビオサエ調整、口縁部はヨコナデ調整を施している。内面は底部中央に鋸歯状の暗文、体部に螺旋状の暗文が施されている。外面の暗文の有無については器面が摩滅しているため確認できなかった。口径は推定で16.4cmを測る。柱穴2から出土した。

陶磁器

428～432は中国製の輸入磁器である。428～431は口縁部が玉縁化した白磁の椀である。高台は断面逆台形状に浅く削りだし、釉は高台まで至らず露胎である。429・430は内面見込み部分にそって凹線状の段をもつ。高台径は7cm前後である。430はIV区7層、431はII区22～27層から出土している。432は内面見込み部分の釉を輪状に掻き取った白磁椀である。高台は逆台形状に深く削りだしている。高台径は4.2cmを測る。II区22～27層より出土している。436は外面口縁下に簡略化されたヘラ描きの雷文帯をもつ青磁椀である。体部外面の正文は刻みが浅く、釉が厚いため不明である。口径は推定で11cmを測る。III区5層より出土している。

437～441は備前焼である。437・438は玉縁の口縁部をもつ大甕である。437はIII区5層より出土している。

439～441は播鉢である。439は口縁端部が平坦で、多少上方への拡張が認められる。内面は7本1単位の櫛描条線が施されている。440は口縁部が上方へ著しく拡張している。内面に櫛描条線の痕跡を認める。II区22～27層より出土している。440は外面に2条の凹線が巡っている。内面は9本ないしはそれ以上の櫛描条線が施されている。

442は天目茶碗と考えられる。高台を浅く削りだし、内外面に黄色味を帯びたオリーブ色の灰釉が施されている。底径は推定で3.5cmを測る。産地は不明である。

出土した多くの土器が破片であるため、土器の全容が不明瞭である。ここでは時期の判別が可能なものを抜粋し、遺跡の年代について若干触れてみたい。

400～403は、古墳時代後期の所産と考えられる。370の宝珠つまみをもつ蓋、輪高台をもつ坏の一群は、奈良時代の範疇で捉えておきたい。410～412の突出したヘラ切り・糸切りの平高台をもつ椀の一群は、森内編年⁽¹⁾の西後明7号窯、入野6号窯、鶴亀1・2号窯に併行すると理解し、9世紀後半～10世紀前半の時期と考えておきたい。416～418は平高台が低くなり410～412の一群より新しい要素をもつものである。401の突帯椀は緑ヶ丘窯址群⁽¹⁾、ないしはその周辺で焼かれたものと推察される。419・420は平高台が消滅し、糸切りの平底になる一群で、12世紀後半～13世紀の間におさまるものとする。433の東播磨系の片口鉢⁽²⁾は12世紀末～13世紀初頭の特徴をもつものである。435は「和泉型」の特色をもつ瓦器椀で、尾上編年⁽³⁾のII-3期ないしはIII-1期に相当し、13世紀を前後する時期と考えられる。428～431は太宰府編年⁽⁴⁾の白磁IV類(430はIV-I・a類)に、432は白磁VIII類に相当する。436は亀井氏の言うAタイプ⁽⁵⁾に属し、時期は14世紀後半～15世紀前半に想定されている。437・440は備前焼IVB期⁽⁶⁾に相当し15世紀後半を中心とした時期と考えられる。441の備前焼播鉢は、時期的には江戸時代までくさる可能性がある。

以上のように、弥生時代以降にあつては、古墳時代後期～奈良時代、平安時代中頃～鎌倉時代初頭、室町時代にかけて遺跡の形成があつたと推察される。

第 4 節 江戸時代の遺構と遺物

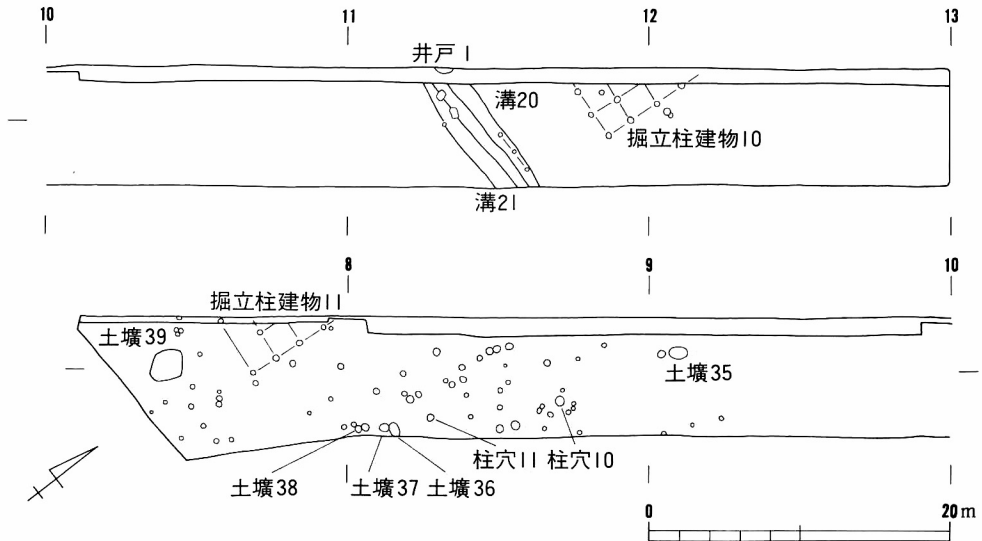
1. 調査の概要

この時期の生活面は I 区・IV区には認められず、II・III区の範囲にしか存在しなかったため、平面的な調査はこの部分に限って実施した。その結果、II区中央と、III区南寄りの2か所に遺構の集中が認められた。

II区中央付近では、総柱の掘立柱建物1棟、溝2条、井戸1基、柱穴が検出された。このうち、溝21は現在まで使用されていた畦路の南裾直下に位置しており、これより以前の路に伴う可能性がある。井戸は、円形の石組み井戸である。

III区南寄りの部分では、掘立柱建物1棟、土壇5基、柱穴多数が検出された。建物は1棟しか復元できなかったが、柱穴に柱根が残存するものがいくつかある。また、柱穴11からは、柱の根石に転用されたと思われる石臼が検出された。この石臼は、愛媛県宇和島付近に産する石材を使用しているものである。

遺物は少なく、陶磁器、瓦、古銭（寛永通宝）がある。



第121図 江戸時代遺構配置図

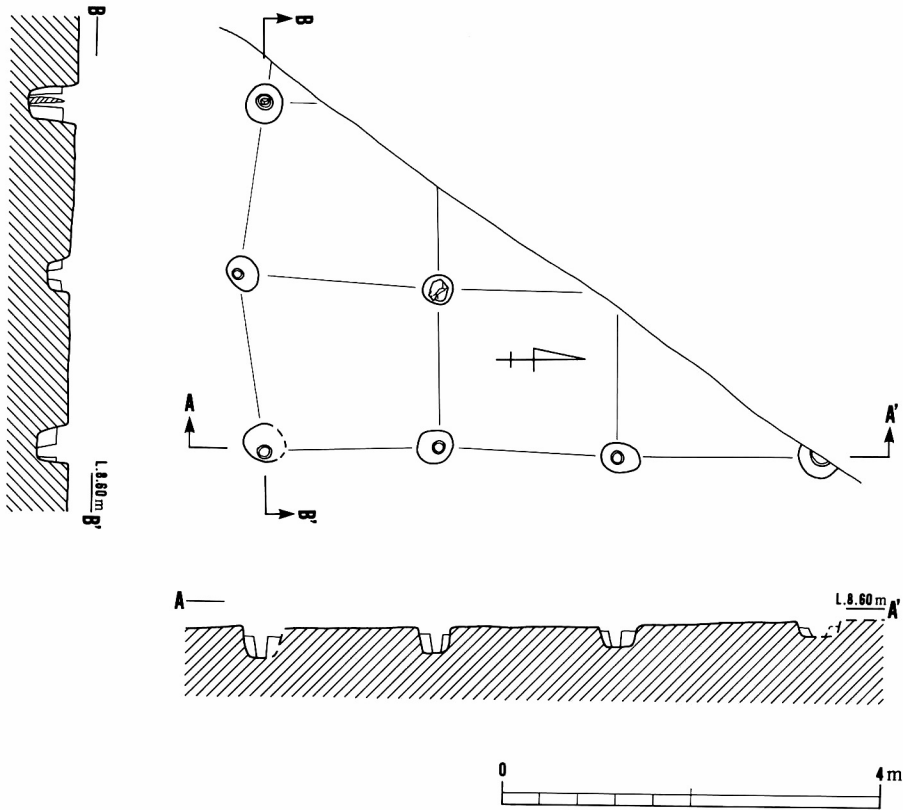
2. 掘立柱建物

掘立柱建物10

竪穴住居2と切り合って検出された、南北3間以上、東西2間以上の建物である。建物の北半は調査区外となっており、全体は検出されていない。そのため棟方位等は不明であるが、南北方向の柱間が広がっていることから、棟方位を $N-1^{\circ}-E$ に置く、総柱建物と考えられる。

南北柱間は182~215cmとなっており、検出された部分の最も北側の柱間が広がっている。東西柱間は約180cm等間となっているが、東から2本目の柱穴は外側に振っている。

柱穴の掘り方は約40cm前後の円形か、楕円形となっている。掘り方内には13~15cmの柱痕跡が確認できたが、南北柱通りの2列目の南から2本目の柱穴には、底に石が据えられていた。



第122図 掘立柱建物10

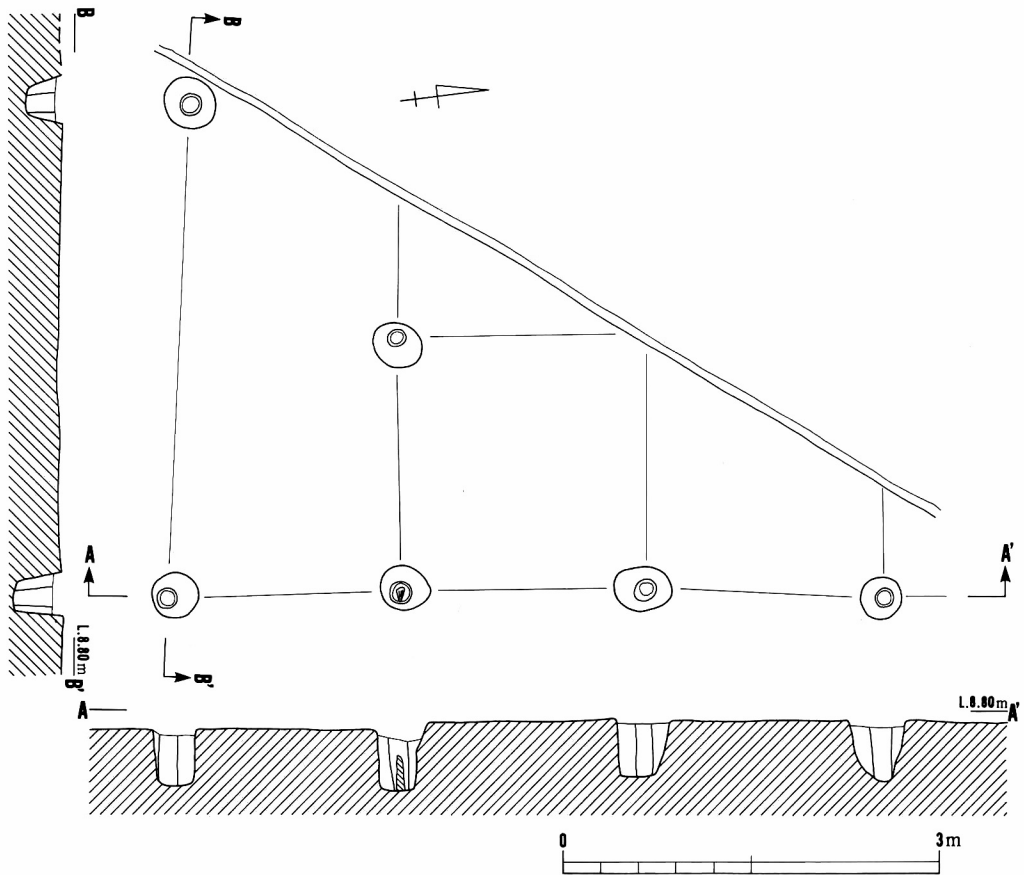
掘立柱建物11

III区南寄りの8層上面で検出された。周囲にピットは散在するが、建物として捉えられるのはこの1棟のみである。東半部の柱穴6本を検出したのみであり、正確な規模は不明であるが、2間(3.9m)以上×3間(5.8m)以上の総柱の掘立柱建物である。南側梁部には柱穴が確認できなかった部分がある。

棟軸の方向はN-8°-Eである。柱間寸法は、南北方向の側柱においては188・198・191cmを測る。

柱穴の平面形は円形であり、その掘り方は直径40cm前後である。柱痕跡の直径は約15cmである。残存していた柱根は基部の直径が約10cmである。

遺物は出土していない。



第123図 掘立柱建物11

3. 井戸

井戸 1

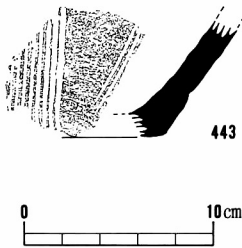
調査区西壁にかかって検出された石組みの井戸である。掘り方は直径約2.25m、深さ約0.8m以上で、内部に内径が約1mの石組みをもつ。石組みには40cm大前後の角石が使用され、3段まで確認できた。石組みの背後には約20cm大の石を使用した控えが施されている。

4. 溝とその遺物

溝20

ほぼ東西方向に走行する、幅約105cm、深さ約15cmの溝である。断面は浅い皿状を呈する。内部には灰色シルトが堆積する。埋没後に、江戸時代以降の柱穴が掘り込まれていた。

溝21



幅約55~110cm、深さ約15cmの溝で、断面形は浅い皿形である。幅は西端から東に向けて広くなり、底も東に深くなっている。溝中央の東肩からやや内側には板による護岸状の施設が認められた。現在の畦道の南裾下部にあたるため、これの下層道路に伴っていた溝と思われる。溝内埋土からは、備前焼の播鉢が出土している。

第124図 溝21出土遺物

備前焼播鉢の底部破片である。外面はユビナデ調整が施され、内面には8条1単位の櫛描条線が放射状に施されている。播目はかなり摩滅しており、使用頻度が高かったことが伺える。色調は赤褐色

を呈し、胎土には少量の砂粒が含まれる。

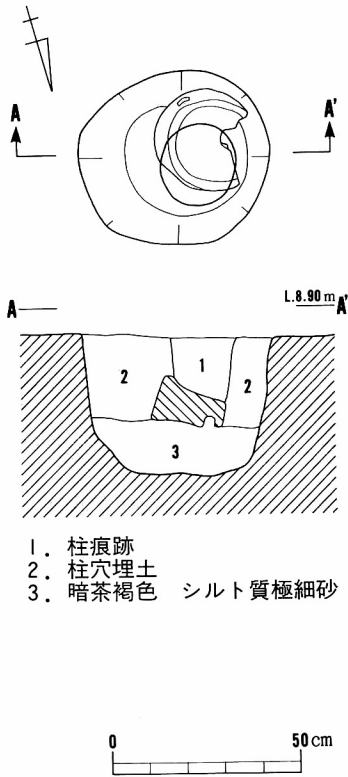
5. 柱穴とその遺物

柱穴11

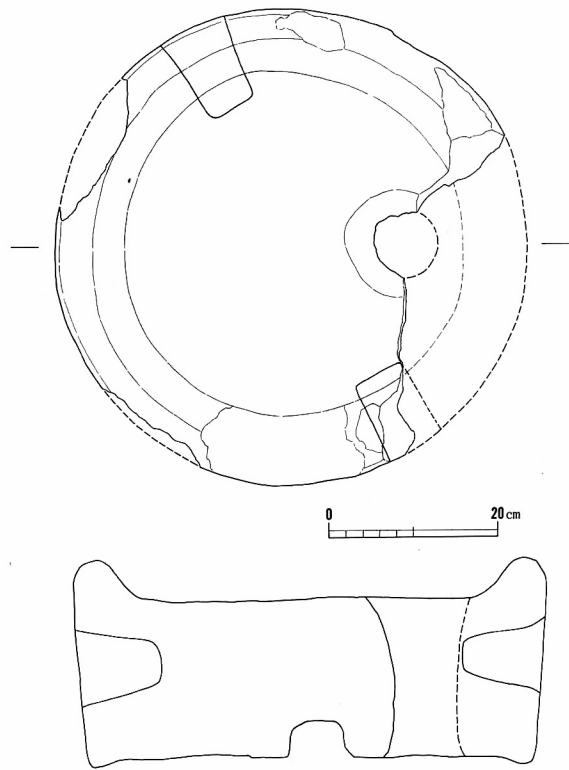
Ⅲ区で検出された多数の柱穴のうち、石臼の出土したもののみを取り上げる。

この柱穴は、他の遺構と同様、8層上面で検出されたもので、直径50cm、深さ35cmの掘り方に直径20cmの柱を据えるものである。石臼は底から約15cmの位置で検出されたもので、柱の根石に転用されていたものである。

石臼は挽き臼の上臼であり、直径27.8cm、高さ12.0cm、ふくみは0.5cm、現重量は8.4kgである。残存率は約3/4である。供給口は円形で、直径3.6cmである。L字形の挽き木の挿入口は正方形で、側面对角に2か所ある。下面中央の芯棒受けは直径3.3cm、深さ2.1cmを測る。下面はよく磨滅しており、目の状況、「ものくばり」の有無については観察できない。石材は細礫岩であり、愛媛県宇和島付近の四万十層群中に産出するものである。



第125図 柱穴11



第126図 柱穴11出土遺物

6. 遺構に伴わない遺物

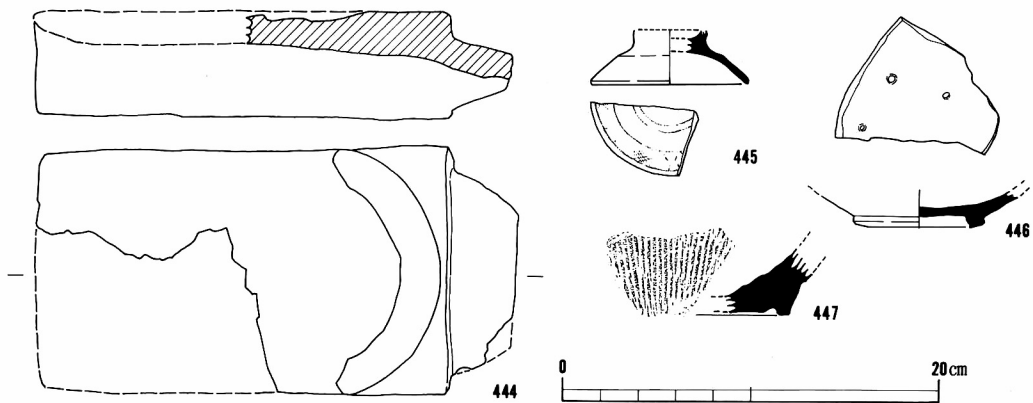
444は丸瓦である。全長24.8cm、最大幅13.0cm、厚さは1.6～3.0cmを測る。

445は伊万里焼の青磁染付蓋である。体部はやや直線的に外傾し、外面は無文で緑灰色を呈する。内面は口縁部にはくずれた四割花菱繫文を、中央部付近には2条の圏線が呉須で描かれている。口径は推定で8.3cmを測る。

446は皿と考えられる破片である。内面には暗褐色の釉が施され、見込み部分には3ヶ所の目跡が確認される。外面底部は削りだし高台で、露胎である。胎土はクリーム色を呈し、精良である。高台は推定で6.8cmを測る。

447は播鉢である。底部に擬高台を貼り付けており、内面には単位は不明であるが密に施された播目の痕跡が認められる。胎土は砂粒を多く含む。生産地は不明である。

以上が近世の遺物の概要である。これらの遺物は、総じて江戸時代のなかにおさまると考えられる。比較的時期が限定できる遺物としては445の青磁染付蓋がある。有岡城跡・伊丹郷町I遺跡SE02⁽⁷⁾よりこれに近い特徴をもつ青磁染付碗が出土している。器形は異なるが、文様



第127図 遺構に伴わない遺物（4）

構成が類似しており、時期的にも近いと理解できる。井戸の時期は18世紀中葉～後葉の中心とされているところから、445もこの年代のなかにおさまると考えたい。

註

- (1) 森内秀造『相生市・緑ヶ丘窯址群』 兵庫県教育委員会 1983年
- (2) 森田 稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』
第3号 神戸市立博物館 1986年
丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会 1985年
大村敬通・水口富夫『魚住古窯跡群』 兵庫県教育委員会 1983年
- (3) 尾上 実「大阪南部の中世土器—和泉型瓦器椀—」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会
1985年
- (4) 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料
館 1978年
- (5) 亀井明德「日本出土の明代青磁の変遷」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980年
- (6) 間壁忠彦・間壁菫子「備前焼研究ノート(3)」『倉敷考古館研究集報』第5号 1966年
- (7) 藤井直正・前川 要・藤本史子『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』 大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年

第 4 章 自然科学的方法による調査

- 第 1 節 周世入相遺跡の地形環境分析……………高橋 学
- 第 2 節 赤穂市周世入相遺跡出土土器の胎土の化学分析および
土器に付着の赤色顔料の微量化学分析
……………安田博幸・森 眞由美

第 1 節 周世入相遺跡の地形環境分析

高橋 学 (立命館大学 地理)

はじめに

千種川は、島取県と兵庫県の境をなす三室山(標高1358m)に源を發し、岡山県境に沿って播磨灘まで752kmの道程を南流する。流域面積はおよそ67.6km²を測るが、ほとんどが標高400~500mの隆起準平原状の高原であり、それを刻む谷の幅は狭く、下流域を除くと盆地らしい盆地を發達させることがない。他方、河口部に展開する三角州も、大部分は近世以降に塩田として利用するために人為的に造成されたものであり、本来のそれはさほど広いものでない。

さて、当流域の地形形成や土地利用の変遷について検討を加えた既存の業績についてみると、まず、稲見悦治(1973)の干拓による陸域の変遷図があげられる。これは、古絵図や1895、1925、1949年測量の地形図を比較し、陸域の拡大過程を検討し明らかにしたものである。また、富岡儀八(1980)は、既存のボーリングデータを収集整理し、三角州帯の内部構造に論究した。そして、さらに田中真吾(1981)は、多数のボーリングデータを駆使して、三角州帯の内部構造を明らかにすると共に、フィールドワークによって、広域火山灰を検出し麓層面の詳細な編年を試みている。他方、千種川本流ではないが、その有力な支流のひとつである矢野川流域については、平井松午・高橋学・五十嵐勉(1988)が、地形環境の把握を基礎に土地開発を検討した。また、高橋学(1988)は、同様の地域について、地形環境分析によって最終氷期以降現在までの環境変化を概観し、土地開発や災害について検討を加えている。しかしながら、管見によれば、千種川本流沿いの地域において、縄文海進最盛期以降近世以前の地形環境や土地利用について論究した研究はほとんどない。そこで、今回、周世入相遺跡の立地環境を検討するにあたり、千種川下流域平野を対象に地形帯、微地形、極微地形の4段階の精度で、地形環境分析を実施した。

千種川下流域平野の地形面環境分析

ここでは、支流の矢野川が千種川に合流した所から播磨灘に至る範囲を千種川下流域平野として扱うことにしたい。また、有年盆地の地形環境については、機会を改めて報告する予定があるため、ここでは必要に応じた事柄のみふれることにする。

さて、千種川下流域平野を地形面レベルで捉えた場合、通常、段丘と略称される「更新世段丘」が現地表面に露出していない点に特長がある。これは、六甲山地や淡路島を生成させた「六甲変動」と呼ばれる地殻変動の影響により、播磨灘沿岸平野のうち東側に位置する平野ほど更

新世段丘の占める面積比が高く、しかも同時代に形成されたものであれば、標高もより高くなるといった傾向を反映したものである。

当地域において、平野が現在形成過程にあると見ることは、10⁴年オーダーの精度では妥当と考えられる。しかしながら、地形環境の把握といった観点から、より細かな検討を行うと必ずしもそうは言えなくなる。すなわち、当地域の平野は、0.5から2mの比高を示す低い崖によって性格の異なった2面の地形面に細分されることが明らかになったのである。この低い段丘崖は完新世になってから形成されたものであり、これによって境される高位の地形面は、段丘化しているものの更新世段丘ではない。そこで、以下この地形面を完新世段丘と呼び更新世に形成された段丘と区別して扱うことにする。段丘崖形成以降、完新世段丘面上に洪水がおよぶことはほとんどなくなり、それによる地形形成も生じていない。むしろ地形面としては侵食による破壊過程に入ったと言えよう。

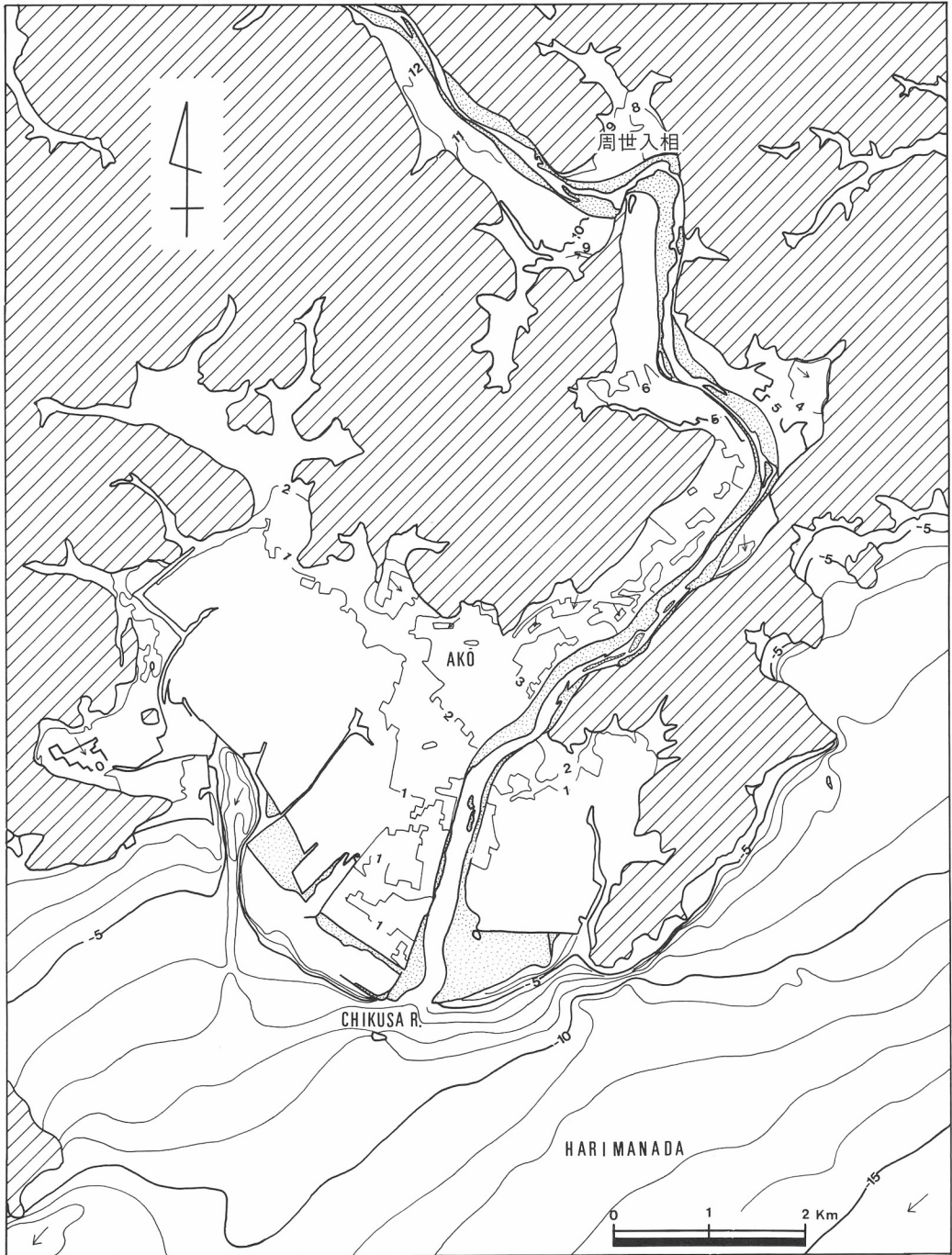
他方、段丘崖下に位置することになった地形面には、洪水が集中するようになり堆積が極めて促進された。厳密に言うならば、この部分のみが、現在、地形形成過程にあるのである。そこで、この地形面を現氾濫原と呼ぶことにしたい。なお、完新世段丘面と現氾濫原面をとを境する完新世段丘崖の現在の比高は、現氾濫原面に多量の土砂が堆積した結果であり、段丘化が生じた際には、数mを測るものであった。

さて、完新世段丘面には、弥生時代中期頃に段丘崖が生じたものと、古代末に堆積過程から侵食過程へと転換したものが存在している(高橋1990)。そこで、前者をさす場合には、完新世段丘Ⅰ面(弥生段丘面)、後者と判断できる場合には、完新世段丘Ⅱ面(古代段丘面)と呼ぶことにする。また、どちらとも判断しかねる時には、完新世段丘面と称することにする。千種川下流平野の場合は、後に詳述する様に完新世段丘Ⅱ面の可能性が高いと考えられる。一般に播磨灘沿岸平野では、完新世段丘面の占める面積の割合が高いが、そのなかにおいて、千種川下流域平野は最もその比率が低くなっている。当地域において、完新世段丘面が分布しているのは、その北側に基盤岩等の障壁が存在するため、千種川本流の攻撃を避けることができたところに限られているようである。

千種川下流域平野の地形帯環境分析

次に地形帯レベルの精度で千種川下流域平野を捉えてみたい。

ボーリングデータの解析によれば、完新世に海面下に没した範囲は少なくともJR坂越駅の南まで広がっていた。すなわち、ここより下流側が三角州帯にあたる。播磨灘沿岸平野では、三角州帯の割合は半分に満たないのが普通であるが、千種川流域平野だけは、ほぼすべてが三角州帯で占められている。こういった点で、当地域の三角州は、吉井川、旭川、高梁川流域など吉備地方の様相を示すと言えよう。



第128図 千種川下流域平野等高線図 (T. P. m)